



牛飼いの名

街道を人の流れに逆らうように走る姿があった。

背の長いものは、得物なのだろうか。

紅い、ざんばらな髪がなびくと、その井出達に反してまだ若い女の顔が……不安そうに気忙しく動く目が見える。

薄汚れた筒袖の長着に馬乗り袴。

素足に草鞋だけだというのに、その駆ける速さは女のものとは思えない。

すれ違う旅人たちが、見て見ぬふりをする。

その異様な紅い髪。

ざわざわと髪を流していく風に、何を思ったか女の足が止まる。

その視線の先にあるのは街道から外れた山道。

その道に、まだ新しい足跡がある。

山の土のぬかるみに気遣うように進んだような後だ。

その足跡の中に明らかに小さなものがあるのを確認して、さらに後を追うように走り出す。

頭上を騒がしく鳥の群れが飛んでいく。

それを仰ぎ見て、女の顔に静かな笑みが浮かぶ。

—ザッ……—

木立が揺れた後、女は山道から消えていた。

「早く入れ！」

「ひい……怒らないでえっ……」

牛に繋いだ荷車には、大きな箱が積まれていた。

その中に入るようにと脅された少女が泣きながら、ゆっくりと箱の中にと座り込む。

「閉めないで！暗いのは怖いよお！」

「静かにしないと、その口を利けなくしてやるぞ」

低い声で脅され、少女は泣く声を押し殺す。

「ねえさま……」

少女の泣き声を聞き取って、周囲の男たちが舌打ちと共に明らかに急ぐように動きを早めている。

「早くしないかっ」

牛を引き寄せていた若い男が叱咤される。

牛が少し驚いて荷車が揺れる。

「ひっ」

すすり泣く声。

ゆっくりと荷車は動き出した。

周囲を囲む男の数は三人。

牛を引くものを入れて四人。

他には、どうやらないらしい。

—ならば、此处で止めさせて貰おう—

独り言を呟いて、車の前に躍り出る。

なびくのは、紅い髪。

携えた得物を既に構えている。

「さあ、取り返しに来てやったぞ」

笑みがこぼれる。

まるで、般若の面のような笑み。

「だから早くしろと言ったんだ！」

「こんなガキ、他で攫えば良かったんだ！」

仲間内のつまらない諍いを聞き流して、女がゆっくりと動く。

「運が無かっただけだ、小悪党共」
聞こえたと思ったときには、一人、二人と斬られていた。
女が持つのは、間合いがとれる薙刀。
近付かれたと気付いたときには既に絶命していた男が二人、ぴくりとも動かずに倒れこんでいた。
開けた場所に荷車を待たせていたせいで、長い得物を振るう場所が出来ている。
「待て……待て、いくら人攫いでも問答無用で斬るのか？」
「それが、私の流儀だ」
刃に付いた血を払う。
「お前が頭と見た」
「いや、俺など……」
開きかけた口を閉ざしたのは、切っ先が喉元に迫ったからだ。
「使い走りの一人に過ぎない……か」
「そ……そうだ」
ふっ……と笑う女の笑みに魅せられて、気が緩む。
今までも危険な目には逢ってきた。
それでも、こんな凶暴な者に出会ってしまったのは初めてなのだから背筋を伝う冷たい汗を感じずにはいられない。
「人攫いごとき……本来なら見ても見ぬふり位してやる」
「な……なら！」
希望を持ち始めて、顔を上げた男は口を利けなかった。
男が見たのは、般若の笑顔。
返り血を浴びた白い女の顔が笑っていた。
首が落ちる。
「手出しした相手が悪かったと思え」
逃げ出しかけていた牛の手綱を持っていた若者へと声をかける。
「おっ……俺はっ！」
「何も知らんのだろうが」
着ているものからして他の三人とは違う。
この若者は、ただ雇われたに過ぎないか……脅されていたか。
「手伝わないと、俺の妹が売られてしまうっ」
「そんなもの、さっさと売られているさ。
いつから見ていない？」
若者の顔色が変わる。
何かに縋りつこうとして、ふと目の前の牛と目が合う。
「べこよお……」
泣きながら牛に縋る若い男を見ながらも女は、既に息絶えたものの身につけているものを探っていた。
「……ふん、本当に運が悪かっただけか」
遺骸の衣服で血を拭う。
「ちづる、もう大丈夫だ」
「ねえさまっ」
荷台の上の箱の中から飛び出してくる小さな少女。
それを、紅い髪の女は優しく笑って抱きとめた。
「知らぬ者に付いて行ってはいけないだろう？」
「だって、だってね……」
袂で涙を隠しながら、少女は牛に縋る若者を見ている。
「大きな牛に乗せてくれるっていうから」
「そんなのに付いていったら、攫ってくれと言ったようなものだぞ」

得物を背負って、少女を抱いたまま若者へと近付く。

「お前、私に雇われる気は無いか？」

涙を浮かべたまま、訳がわからぬような顔の男に女は話を続けた。

「お前の妹がどうなったか、お前では探れもしないのだろう。

ことのついでがあつたら、ちゃんと調べてやる。

そのかわりに、この娘を牛に乗せてやってくれ」

「.....あんだ.....」

まだ衣装に三人分の返り血を付けたままで紅い髪の女の声は、まるで天気模様でも話すように気負いが無い。

「私はヌイ、この娘はちづる。

私の腕は先程見たとおりだ」

そう、見たばかりなのだ。

事態の把握も出来ず、ただ牛を逃がさぬようと手綱を握り締めている間に.....

この手の中から、理不尽な暴力で妹を奪った男たちは、今は土の上でただの骸となっている。

「関わるのが嫌なら、それでも構わぬ。

ちづる、牛に乗るのは次まで我慢だ」

「の.....乗せるくらいは構わないさ。

あ.....あんたは、俺だけ斬らなかつた.....助けられたんだ」

下を向いたままの若者の言葉を小さな少女は不思議そうに聞いている。

可愛らしい顔を、じっと近付けてくる。

「牛に乗せてくれるの？」

「ああ、落ちないように捕まっていな」

少女を抱き上げている間も、女の様子は変わらない。

先程の般若のような笑みが見間違いだったのかと思ひそうになって

その衣装の返り血に現実を知らされる。

「助けたわけじゃない。斬る必要が無かつた。運が悪ければ、お前もこうなる」

聞こえた声は平坦だ。

恐ろしいと思わせるのは、その気迫だろうか。

「その娘に危害が及べば、私は見境なく斬るさ」

牛の背に乗せられて、はしゃぐ少女を見つめながら紅い髪の女は、ことさら気にする様子もなさそうに話す。

「この娘のためなら.....」

「ああ、そうだ。この命を懸けてやれる」

腕を両の袖内に入れて、少女を見つめる目は優しい。

この女のように、己の腕に技量があつたなら.....

いや、せめて、命を懸けていたのなら.....

もう長い間、その声すら聞いていない妹を思い出す。

「いずは.....生きているのかなあ.....」

殴られて、起き上がれずにいる間に妹は連れて行かれてしまった。

泣きながら、ひたすら兄を呼ぶ声だけが今でも夢に出てくるほどに、耳について離れない。

「いずというの？あなたの妹さまは」

「うん.....？あんた、何処かのお嬢様か？」

小さな少女にしては、言葉になまりも無い。

拙いながらに下級庶民の己とは、話す言葉が違うと感じる。

そういえば、攫ってきた連中は『上物だ』と言っていた。

連中の仕事を見るのが嫌で箱の中から出てくるまで、こんな幼子だとは思っていなかつた。

てっきり、器量のいい少女なのだとばかりに思っていたのだ。

「詮索は寿命を縮める。

ちづる、もう良いだろう？降りなさい」

女の差し出した手を、不承不承という表情で握る。

返り血の付いた衣装を気にする様子も無く小さな少女は、その腕に抱かれなおされた。

「お前、雇われる気があるなら荷台を外して付いてくるといい」

「ま……待ってくれよっ」

既に歩き出した女に声をかけながら、慌てて荷台と牛を離す作業にかかる。

もとより、この牛だけが財産なのだ。

この牛だけは、家族と共に暮らしてきた。

それでも牛よりも先に、妹を手放すことになるなどと想像もしない間に離れ離れにさせられた。

痩せ牛を引きながら、もう遠くなった女の後を追う。

遠くなくても、あの姿を見失うことは無い。

異質な紅い髪、背の長い得物。

そして、不釣合いに腕に抱いた小さな少女。

不思議な二人だ。

そんなことを思っていたら後ろを振り向いた少女が、こちらに気付いて手を振っている。

攫われかけたというのに、その片棒を担いでいた己に、あの少女は何故あんな風に笑いかけてくれるのだろう。

妹を取り返すためだからと、今まで何人の娘をああやって荷台に乗せて運んだだろうか。

いつになったら妹に会えるのかさえ解らずに、ただ言いなりになっていたことが今さらに悔やまれる。

「過去を悔やむほど、くだらぬことは無いぞ」

いつの間に……そう思って顔を上げれば丁度、茶屋の前だった。

少女が上品な手つきで、安い茶を飲んでいる。

「ちづるが喉が渇いただの、団子を食べだのと普段は言わぬような我儘を言ってお前を待たせたのだ。

後悔などしている暇があったら、前を向いて歩くことだな」

「違うの、本当なの。本当に、喉が渇いていたんだから」

「それは、泣いて叫んだからだ」

女の素っ気無い返事に、小さな少女は俯いてしまう。

その傍に団子が置かれて、茶屋の女は目の前にいる異様な女を恐れるように店の奥に駆けて行った。

「ねえさまも……たべる？」

「私の機嫌取りなどしなくていい」

口調は変わらぬままに、しゃがみこんで少女の目を見る。

「気に入ったのは、どちらなんだ？」

「うーん？」

愛らしく首をかしげながら、ちらちらと見てくる。

その視線の止まったのは、己の顔だと気付いて驚く。

「あの牛、あの人の言うことしかきかないでしょう？」

でもね、あの牛は悪いことはしていないでしょう？」

当然だ。

牛に悪意など有りはしない。

悪事に加担したのは、この身だ。

「あの牛が気に入っているなら、私もそうするの」

「ちづる、もう少し利口になれ。

そんな理屈、私でなくても理不尽だと解る」

言うなり少女の膝の上から残った団子に乗せた皿を奪うと、こちらに差し出してきた。

「ちづるからだ」

突然のことに、小さな少女は手に持った一本を眺め、さらに差し出されている皿を見ている。

さすがに手を出せずにいると、少女は声を立てて笑い始めた。

「そうね、一緒に旅してもらうなら食べるものは分けるのよね」
くすくすと可笑しそうに笑われながらも、その言葉が嬉しくなる。
女の子の手から皿を受け取ると、満足そうに少女が微笑む。

「あなたの名前をきいていないわ？」

貰った団子を口に入れるなりの質問に、思わず喉に詰まらせそうになる。
無意識に手を伸ばして飲み干した茶が、誰のために置かれたものかと
そう気付いたときには全て飲み干した後だった。

「ひっ」

とんでもないことをしてしまった。
そう思って頭を抱えて震えていたが何事も起こらない。
そ……と上げた顔を見つめているのは、名を尋ねてきた少女だ。

「どうしたの？」

「茶を……」

この少女のものではないのだから、当然あの紅い髪の女の子のものはずだ。
あの女に出されたものに手をつけたのだ。

「足りなかったの？」

「いや……その……」

少女の視線を追うように、後ろに立つ女を見上げる。
女は腕を組んだままの姿で無表情に見ている。

「雇い主に、そこまで怯えてどうする。

その娘に危害が無いなら、私は何もしない」
何もしない。

それを信じるのは難しいことだった。

ずっと信じてきたのだ。

—お前が仕事を手伝えば、妹には何もしないでいてやる—
それなのに、この女に言われて気付けば攫われたきりで妹の声すら聞いていないのだ。
信じていたものが崩れたばかりで、新たに信じるのは困難だ。

「ならば、怯えて居ればいい」

見透かすように、気にもならぬとばかりに声が落ちてくる。

「ねえさまは、見目も言葉も怖いけれど

本当は、とっても優しいのよ？」

「それは、ちづるにだけだ」

駄目押しのように付け足されて、少女すら言い返すことを諦めたようだ。
何より、この少女は理解していると解ってしまった。

この女は、傍に居るだけで恐ろしい。

異質な紅い髪は、ざんばらに流したままだし背には長い得物を持っている。
どう見ても、ただの女には見えない。

そういう恐ろしい感覚を、見た者に持たせるのだと理解した上で
この少女は、この女の傍に居るのだ。

「あなた、名前……ないの？」

答えが無いことを不思議そうに見つめてくる。

邪気の欠片も無い眼差しに、見つめ返すことが恐ろしくなる。

この娘を攫う者に加担していたことを、忘れたはずがないからだ。

「こじろ」

「コジロ……小次郎？おにいさまがいるの？」

そんなことはきいた事もない。

「俺は、こじろって呼ばれてきたんだ。小次郎じゃない」
「ならば、周辺に太郎だの、小太郎だのも居ないのだな？」
ふいに紅い髪の女の声が聞こえて、その言葉に驚いた。
「小太郎は、このべこの父親だぞ！」
唯一の自慢なのだ。
この地方で一番の力持ちだった小太郎牛の血を引く牛。
この牛を買うために、父親が借金までしたことは最近まで知らなかった。
その借金が返せずに、母が逃げたとも知らなかった。
父親は、死ぬまで何も話さないままだった。
それでも牛は、唯一の自慢なのだ。
小太郎牛の子に野良仕事などと言って、畑にも出さずにいたのだ。
そんな贅沢が出来るほど、荒れた狭い畑で出来るものなど
金にはならないと両親は知っていたはずなのに。
「ならば、生まれたときから売られる運命だったのだ」
団子を食い終わった少女の手を紅い髪の女は
優しく手ぬぐいで拭いてやっている。
「自慢の牛なのだろう？」
おそらくは、お前や、その妹よりも
その通りだろう。
野良仕事で疲れるのは、子である己や妹は当然だ。
べこは違うのだ。
べこは、あの小太郎牛の子なのだから……
幼いときから聞かされ続けられて、おかしいとも思っていなかった。
妹の助けになるのなら、今なら働くときだろうと人攫いの荷台を引かせたことさえ、己一人の責任だと思っている。
この牛には罪は無いはずなのだ。
「お前の名前が牛の弟のようにしか聞こえないもので
その妹が『いず』というなら、『いない』はずのものなんだろう？
お前たちの名を付けたものは、小太郎牛なるものに惚れこんだのだろうな」
「いないわけじゃないかっ。
いずは、ちゃんと居る。居たんだ！」
思わず声を荒げてしまう。
泣いて、助けを呼んでいた声は忘れられない。
「当たり前だ。居ないものを、どうやって売るんだ。
女など居ない、売れる子は居ない、だから『いず』なんだろう」
息が止まるかと思った。
異質な姿をした女は、不吉なことばかりを言う。
考えたくも無いことばかりを吹き込んでくる。
「有り触れた名より探すのは容易い。
本気で探したいなら、もう少し話せ」
気鬱になりながら、女の気迫に負けて口を開く。
「攫われたのは、去年の田植え時でさ……
俺も妹も、近所の田植えを手伝っていたんだ。
まだ十二になったばかりだったのにさ。
借金があるなんて、知らないといっても聞いてももらえなかった。
妹を返してくれと、代わりに自慢の牛を渡すといっても
誰も聞いてはくれなかった……」

ぽつり、ぽつりと話すうちに、あの日のことが思い出されてくる。
知らずと涙が伝っては落ちていた。

「小次郎、どうして泣いているの？」

心配そうな顔が見上げている。

愛らしい……人を疑うことさえ知らないような幼子。

「俺の妹には、あんたのときみたいに

怖い連中を斬り倒してやれる者など誰も居なかったんだよ」

意味が解らないのか、首をかしげている。

思いついたように、紅い髪の女を見上げて少女が笑う。

「ねえさま、またなのね」

「ああ、そうだ。

ちづるが、攫われたりするからだ」

くすくすと、小さな少女は笑っている。

人の不幸話を聞いて、何故に笑い始めるのかと苛立たしくなる。

「小次郎、ねえさまは優しいのよ？」

悪戯のように笑うと、少女は駆けて行く。

何を言われたのか……意味さえ解らないまま、ただ流されるままに牛の手綱を引いて歩いていく。

目の前の紅い、恐ろしい女の後ろに付いていく。

その理由など、考えることなど出来ないくらいに周囲が、自分を取り巻く世界が変わる早さに

流されることに慣れた身では気付かなかったのだ。

すっかり辺りがふけてから、ようやく宿場町に辿り着く。

「空いている部屋がないか尋ねてきてくれないか。

私が行くと、怯えて先客を追い出したものが居たからな」

手間賃なのだろう。

小銭を渡されて、小次郎は女の顔を見上げる。

そんなに背が高いわけなのではない。

この女の前に立つと、自然と俯いてしまうのだ。

顔をあげて、みつめるなど怖くて出来ない。

そう、そういう風貌をしているのだ。

だから、宿を回ることを頼まれても不思議ではなかった。

しかし、女とは別の意味で小次郎は見た目が悪い。

簡単に言うなら、みすぼらしいのだ。

とても宿に泊まるような類には見えはしない。

仕方もないから、方便でもなかろうと思いついた言葉を言う。

「俺の雇い主さんが、今夜の宿を探しているんだ」

三件ほど回って、気の良さそうな女将が『狭くてもいいなら』と

色の良い返事がもらえて、ようやく役目を果たせた気分になる。

離れた場所に居る二人に手招きをすると待ちかねていたのだろう。

小さな少女が、笑って駆け寄ってくる。

「お部屋があるの？」

「おや、愛らしいお嬢さんだ」

暖簾をくぐってきた小さな少女に、宿の女将も微笑みかけている。

だが、その後ろの人物に気付いて微笑が凍る。

「ねえさま、良かったわね」

少女が、その腕に捕まると女は笑みを浮かべる。

「要らぬ気を使わせるな……ちづる」

「なあに？」

髪を、その白い手でくしゃりと撫でる。

幼い少女が恐れずに懐いている様子に、宿の女将は少しばかり安心したようだ。

「本当に小さな部屋なんですけど……かまいませんか？」

笑顔が硬い。

女が漂わせる不穏な気迫に誰もが、こうなるのだろうか。

何しろ、その髪は紅い。

それだけでも不気味なのに背負うのは見まがいよのない得物。

「この娘が眠れて、食事が取れるなら構わない。

私は座る場所があれば充分だ。

ああ、この男と牛を泊まらせられる場所を紹介してくれ」

「それでしたら、ウチの裏手にある馬小屋をお使いくださいな」

なるほど、馬小屋に牛引きを泊まらせるなどという交渉は

この女のほうが容易く出来る。

恐れられることを女は気にもしていないはずなのだ。

宿探しをさせられたのは、部屋を探すためではなかったのかもしれない。

あの女は、見知らぬ他人が追い出されても小さな少女が安心して眠れる場所を手に入れられるなら気になどしないだろう……。

「気を……使ってもらった……」

宿のものが出してきた湯で足を洗う女は顔も上げない。

「お前の牛が待っているぞ」

紅い髪の間から、暗い眼が見える。

それが蒼く底光りしていることに気付いて、今さらにゾッとする。

慣れる事等出来ない。

あの少女のように、ごく普通に接することなど出来ない。

この女は恐ろしい。

早々に案内された馬小屋に入り、牛の世話をして

そのまま積み込まれた藁の上に寝転んだ。

破れた木板の屋根から、月光が差し込んでくる。

今頃、あの人攫いたちを雇っていた者はどうしているんだろう。

いつも荷台の傍で待たされたから、連中を雇う人物を見たことも、声を聞いたこともない。

それでも、今日のようなことに気付かないとは思えない。

暴力で他人に言い分を通すものたちが、あっさりと齒向かう隙もないままに斬られたのだ。

「いずは、元気かなあ……」

こんなことになってしまって、いずは無事だろうか。

己の骸だけがないことを、不審に思われたりはしないだろうか。

—あの女は、何を企んでいるのだろうか—

いくら少女が牛を気に入ったと言ったところで

この身を雇うというのは、気前が良すぎる。

何より、あの容貌。

紅い髪、蒼く光る眼。

あれは、本当に人の子なのだろうか。

噂に聞く『鬼』というものではないのだろうか。

不安が大きくなる。

ただ流されることしか思いつけないはずなのに

恐れから逃げることだけは、しっかりと算段を立てようとしてしまう。

「今さら逃げたりしたら、余計に危険だがな」
気配にも気付かず、すぐ傍の柱に背を預ける紅い髪の女が居て驚く。
「にぎり飯だ。ちづるは、お前を気に入っている」
差し出された包みを受け取りながら、己の手が震えていることに気付く。
「お前が牛を連れて逃げたところで、不審に思われはしない。
だが、見つければ逃げたことを咎められるだろう。
まさか、他の連中を殺した相手と居るなどとは思わない。
だから私から逃げるほうが危険だ。
お前を斬る理由もない、斬れば、ちづるの機嫌を損ねる」
話しながらも、決して目を合わせようとはしない。
恐れられることを知っているのだ。
「ちづるが嫌がるから言わなかったがな。
お前、この牛と十二やそらの生娘の値が釣り合うと思っているのか？」
握り飯を頬張りながら、女の言うことの意味を掴みかねる。
差し出された竹筒から、水を飲んでも答えが見つからない。
「小太郎牛の子だという証拠はないのだろう。
たとえ、偽りでないとしても痩せ老いた牛であろう。
この牛に何が出来る。
どんな器量か知らないが、生娘の方が買い手が付く」
何を言い出すんだ。
そうだ、この女は不吉なことばかり言うのだ。
考えたくもないことばかりを吹き込んでくるのだ。
「私のような見目でさえ、見世物に出来る。
十二や、そこらのころなら良い値で売られたかもしれない」
「あんたより、べこは劣るといえるのか？」
怒りではなかった。
なんとも言いようのない苦い感情が沸き起こってくる。
「ちづるは、この牛を気に入っている。
決して劣ると言いたいのではない。
ただ、この牛よりも売り易いという話だ」
女は、屋根の穴を見上げていた。
単調に、感情のこもらない話し方だ。
「お前が、どれほど大切に思っていようと
他人が金を出してくれはしないのだ」
「なら、あんたが俺に小銭でも、飯でも与えるのは何故だ」
ふ……と笑みが浮かぶ。
白い顔が、こちらを向く。
「お前が知っている一番の頭のところへ連れて行け。
連中が、ちづるを攫った本当の理由が知りたいのだ。
この私が連れであることを知っていて攫えるものなど少ないぞ」
ああ、そうだ。
この女は、一目でも見れば恐ろしいと思わせる。
「お前は案内役だ。
だから、分が悪いと思えば脅されていたといえればいい。
嘘ではないはずだ。
私に付いて来いといわれて、嫌だと言い切れる者は少ない。」

実際の腕で恐れられているわけじゃあないから

まったく、自慢にもならないのだがな」

肩を揺すって笑っている。

紅い髪が、ざんばらなままの髪が肩で揺れている。

「あんたは強いじゃないか」

この目で見たのだ。

恐れて、怯えている僅かの間だった。

「こんな見目に怯えるような連中など、どうでもいい」

ふらりと、本当にどうでもいいように背を向けられる。

「無駄話を聞かせたな。早く寝てしまうことだ」

月明かりの中、紅い髪が背で揺れている。

あんな恐ろしいもの言うことなど、何も解らない。

解りたくなかった。

あの見目に恐れるものを、女は気にもしないのだ。

それでも、幼い少女……ちづると呼ぶ少女のためなら

命すらかけるとまで言っていた。

己は妹のために何をしてやれただろう。

自慢にしてきた牛は、確かに妹に比べたら手放せるものなのだ。

この手から奪われたくないものは、他のものとして欲しいのだ。

そうだ、失いたくないものは値が付くのだ。

ならば、あの幼い娘を連れて行けばいいのではないのか？

あの娘を連れて行けば、いずに会えるのではないのだろうか。

そこまで考えて、ふと顔を上げると

馬小屋の外に、先ほどのままに動いていない背が見えた。

背筋が凍るといのは、こういうことをいうのだと

心底に感じずにはいられない。

「思慮が浅いと、命を落とすぞ」

聞こえた声に怯えている間に紅い髪が、ゆっくりと闇に消えていく。

そうなのだ。

あの娘を攫うようなことをするなら、己の言い分など聞いてはくれない。

きっと何も解らないまま、あの長い得物で斬られてしまうだろう。

こんな場所まで付いて来てしまった事を悔やむ。

過去を悔やむことが愚かだと、そう言ったのも

あの紅い髪の女だった。

前を向いて歩けといていた。

自慢の牛の価値を教えられ、妹のために何もしてやれず

ただ人攫いの片棒を担ってきたこの身に、前を向けというのだろうか。

己は、あのように恐ろしい存在とは遠すぎるのだ。

あれは女のように見えるだけの恐ろしい存在だ。

それでも、あの幼い娘を見るとき笑顔は優しそうだった。

—ねえさまは、本当は優しいの—

ああ、あの娘は信じているのだ。

いずのように泣いて喚いて助けを呼ばずとも、きっと助けが来ると信じている。

泣き喚いていたときだって、脅されて怯えていただけだ。

ただの一言も助けて欲しいとは言っていなかったはずだ。

誰かに縋ろうとしなかった。

ただ、あの女を待っていた。

あの二人は、いったい何者たちなのだろう。

あんな紅い髪の女が、幼い少女と旅をしているのは何故だろう。

つらつらと、答えの出ないことを考えているうちに

眠り込んでしまっていた。

月の明るい夜だった。

割れた水鏡

大きな屋敷の中へと庭を駆けてきた少女が転がるように上がりこんでいく。

明るい外から、急に暗い室内へと入っても少女の速度は一瞬たりとも変わらなかった。

長い黒髪が馬の尾のように揺れている。

まるで男のような馬乗袴などを身に付けてはいたが

その白い肌と、幼さの残った上気した頬は良家の娘にしか見えない。

「騒がしいぞ。千鶴」

その声に慌てて少女は身繕いをする。

額の汗を拭き、手櫛で髪を整えた。

「父上……お義母さまは……」

言い終わらぬうちに、赤子の声が聞こえてきた。

「子は元気だがな……あんなものために

あの女は命を掛けたのかと、殺してやりたくなった」

「父上……？」

こんなに苦しそうな、悲しそうな顔をした父親を初めて見る。

まして、このような暴言を吐く人物ではないと

千鶴は知り尽くしているつもりだった。

「生まれたばかりの赤子をですか？

いくら、お義母さまが亡くなったからって！

私の母とて、私を産んだから命を縮めたと聞いています。

父上は、私を殺したいと思われたことがあるというのですかっ」

話しているうちに頭に血が昇って、つい声が大きくなる。

武家の一人娘として育った千鶴は気性が荒い。

まして、まだ十三参りを終えたばかりなのだ。

尊敬する父親の言葉であるだけに聞き流すことなど出来なかった。

部屋の中では、赤子が泣いている。

廊下で睨み合ったままの父と娘は、その声が聞こえないかのように

互いの顔を、その目を、それぞれに思い巡らせながら見つめていた。

「千鶴、お前がいるのに……

その年で我が家の子として恥ずかしくないだけの

腕と技量を、女ながらに身につけたお前がいるのに

嫡男欲しさで子を作れば、このざまだ」

まだ理解できずに怒りをあらわにする娘に

父親は室内へ入るようと仕草で示す。

「言い過ぎました。ご容赦ください」

深く頭を下げてから、娘は室内へと入っていく。

一人娘であるが故、千鶴には厳しく躰けてきた。

素質があるのだろう。

まだ子供だというのに、武道の技量は底が知れない。

あの自慢の娘がいるというのに、家を継がせる子を男でなくてはと硬い考えのまま

周囲に勧められた二人目の妻を迎えたのだ。

血の繋がらない義母を慕い、子が出来たことを喜んでいたのは千鶴が一番だったのかもしれない。

—弟であれば一番だけど、妹でも私が居るから大丈夫—

千鶴が義母に掛けていた言葉だ。

男を産まねばと気負う若い母親に、血の繋がらない娘が精一杯に励まそうとしたのだ。

あれが居ることで満足しなかった。

男の跡取りでなければと欲を持ちすぎたのだ。

そう、今となっては欲だったとしか思えない。

若い妻は、赤子を産み落とし……その赤子を見た途端に気を失ったまま命を落としたのだ。

「お義母さま……お疲れ様でした」

白い布を掛けられた義母の傍で、千鶴は姿勢を正して座っていた。

かけた声に返ってくるのは、誰にも抱いてさえもらえない

生まれたばかりの赤子の泣き声だけだ。

「可哀想に……乳が欲しいのだな」

小さな布団に包まれた赤子を抱き上げる。

赤子などに慣れていない少女の腕に抱かれて、不安になったのか

余計に大きな声で泣き始めるのを静かに見つめる。

「泣くことなどない。

私は姉になったんだ。お前が生まれてきてくれたおかげだ」

拙い抱き方でも、赤子に話しかける言葉は周囲の誰よりも冷静だった。

産婆は早々に逃げ帰っていたし、乳母になる女も居ない。

冷たくなった義母の傍で、誰も抱こうとしない赤子は産湯を使った後でさえ

血のように紅い髪をしていた。

「男でも、女でも、どんな姿でも

お前は私を姉と頼って来い。

この筑後千鶴、そのくらいの器が無いわけではないっ」

泣き喚く赤子を抱いたまま、千鶴は己に言い聞かせるように聞いても解るはずのない赤子相手に約束した。

「その子供を、お前は愛しいと思えるのか……」

姿を見れば、きっと義母を奪った赤子を恨むだろうと

この苦しみを解るだろうと思っていた父親が声をかける。

あんな異形のものを産み落とせば、女が死に至ることも理解できた。

我が子だなどと思うことは出来ない。

「父上が愛さないなら、その分まで千鶴が愛してみせる。

この子が何をしたと仰るのか。

お義母さまは命を掛けて産み落としたというのに

その子を要らないというのですかっ

子が欲しいと願ったのに、生まれた子の髪が紅いだけで！」

思わず上げた手を振り下ろすことは出来なかった。

赤子を庇うように抱いたまま、千鶴は睨み付けてくる。

ほんのりと目を赤くしながらも険しい顔つきは反抗的だ。

「そんなものは要らぬ。

それは、イラヌモノなのだ。

千鶴、それは人の子に見えないだろう？」

父親の言葉に、千鶴は顔を曇らせる。

悲しそうに赤子を抱きしめる。

「お義母さまが生んだ子を、人の子ではないと

そんな風に言うのですか……

ならば、千鶴が赤い髪になったら捨てるのですか？」

「千鶴、お前は子供だから解らないんだ。

人でないものが、人の腹の中に子を置いていくと

そんな話は世に溢れている。

千鶴とはチガウモノなんだ」

なだめようと伸ばした手を千鶴は避けた。

変わらない険しい目で父親を見つめている。

あと数年もしたら、きっと美しい娘になるだろう。

千鶴の気性は激しいが、子供とは思えない見目の美しさを周囲の武家のもので知らないものは居ない。

まして筑後家といえは由緒ある家柄なのだ。

まだ子供だと知った上で、婿に迎えてくれという話も一つや二つではない。

この娘が居るのなら、もう他に子は要らない。

「それは、寺に預ける。

御仏の下においていただければ化物の血を引いていても

きっと正しく生きてくれるだろう」

「化物なんかじゃないっ」

抵抗しても無駄だった。

父親が怒りに任せて、泣き叫ぶ赤子を奪い取っていく。

「これはイラヌモノなのだ。忘れなさい」

そんなのは嫌だ。

約束したのだ。

どんな姿でもいい。

私を頼って来ていいと約束したのだ。

義母の葬儀が終われば、あの赤子は寺に連れて行かれる。

義母の眠る寺に連れて行かれる。

泣いて解決するなら泣き叫ぶだろう。

この命を掛けて、あの命が助かるなら

それでも構わないとさえ思えた。

千鶴は子供だけれど、それだけに考えは変えられなかった。

言葉すら解らない筈の赤子との約束を守れないくらいなら、己の価値などしれている。

—約束したのだ！—

絶え絶えになった赤子の声を求める。

生まれ出でてから、ただの一口も乳を飲んでいない。

このままでは、あの子は死んでしまう。

己の力の足りなさが嫌になって暗い庭の黒い池に映りこむ己の姿を見ていた。

悔しくて考えすぎた顔は歪んでいる。

「あれはイラヌモノなのか？」

水鏡に映った己に問いかける。

知らず涙が浮かんで、視界が歪む。

『お前は変わっているな』

聞きなれない声が、唐突に聞こえて身構える。

いつも身につけている実母の遺したヒ首を片手に構える。

「何者だ……」

『ほお……助けを呼ばぬか』

周囲の気配を探っても、不穏な気配が感じられない。

感じられないことが、余計に不気味になる。

『お前の願い、私に勝ったら叶えてやってもいいぞ？』

「何が目的なんだ」

声に出した途端に目の前の池が割れた。

先ほどまで波一つ立てずにいた水鏡が割れたのだ。

『ただの暇つぶしだ。人間の娘と勝負なんて機会が少ないからな』

声の主は割れたままの池の中に居た。

驚くくらいの美丈夫が、見慣れぬ剣を片手に立っている。

「負ければ、赤子も私も死ぬということか……」

それもいいかもしれない。

『殺したりはしない。だが、代償は払ってもらう。』

もしも、お前が勝てたら赤子は生きて暮らせるようにしてやる』

のんびりとした声ではあったが、既に殺気が籠っている。

得手の武器を持っていないことが悔やまれる。

小さな匕首で、この女の身体で、あの見慣れぬ剣を受けられるか

いや、あの男を倒せるか……千鶴は素早く考えをめぐらせる。

瞬間に目の前に見えていたはずの美丈夫の姿が無い。

—ギリリッ—

細く短い刃で、大きな剣を受け止めていた。

『驚いた……』

「驚いたのは私の方だ。そんな重いものを軽々と扱うのだな」

目の前に白い顔がある。

楽しげに晒う男の顔が、その瞳が猫のように金の色をしている。

重い剣と張り合っても勝てはしない。

匕首を引きながら、手刀を喉めがけて繰り出す。

その手に、なんの感触も無いことに気付けば即座に後ろへと飛んだ。

『良い動きだ』

声が聞こえたときには、千鶴は視認もせず次の手を繰り出す。

細い匕首の刃が血の色に染まる。

男は手の平に刺さった小さな刃を信じられないとばかりに見ていた。

だが、千鶴の方は読み違いもいいところだったのだ。

左胸を目指して突進したのに、あっさり手の平で受け止められた。

これでは武器を捨てるしかなくなる。

転がるように距離をとって、偶々に手に当たった木の枝を拾う。

それを構えると、男は声を上げて晒い始めた。

『諦めないか……』

「当然だっ」

曲がって、頼りない姿の木の子を千鶴は気迫だけで突き、剣の刃を避け

さらに宙を舞って距離をとる。

その取った筈の距離を、事も無げに詰められる。

振り下ろされる剣を左腕で受けようと差し出せば、皮膚を微かに切り裂いただけで止められた。

「どうした、腕の一本くらいくれてやる」

見上げる瞳に迷いは無い。

これが己の技量なのだ。

こんなものと闘って、勝算など始めから無かった。

『いや、腕など要らぬ』

剣は皮膚に当たったままで、男の顔が近付いてくる。

それを目も逸らさずに見つめる。

『お前、本来の得物を持たずに挑んだな。』

だから今宵は、引き分けだ。

鏡池で待っている……腕を上げて挑みに来い』

男の声が耳のすぐ傍で囁かれた。

かすめる様に千鶴の黒髪に口付けて行く。

「情けを掛けられるとはな」

『情けなどではない。何年でも待っていてやる』

皮膚に当たる冷たい金属の感触が消える。

風と、土煙と、雷鳴のような音に驚いている間に池から現れた美丈夫の姿は消えていた。

「名を……聞き忘れたな」

静かになった庭先で、千鶴は左腕を見る。

かすり傷にしか見えない。

あの重い剣を、この距離で止められる技量が羨ましい。

「不思議な男だったな……」

黒く鏡のようになった池を覗き込む。

そこに映る姿を見て、さすがの千鶴も驚いた。

「叶えてくれたのか？」

慌てて縁台から屋敷へと上がりこむ。

泣き声も絶えがちな赤子の下へと急ぐ。

義母の亡骸を寝かせた部屋のすぐ隣で赤子は放置されている。

義母の亡骸を見守る親族たちの目の前を会釈だけで通り過ぎ、小さな赤子を抱き上げた。

「……ああ……良かった」

嬉しくて弱った赤子を抱きしめる。

「父上っ！見てください」

義母の傍に居る父親に向かって赤子を差し出す。

その黒髪が見えるように。

その黒い瞳を見せ付けるように差し出す。

「これは、私の妹でしょう？」

笑顔で問いかけても、誰も返事をしてくれない。

恐ろしそうな目が向けられている。

「千鶴……なのか？」

「そうです。父上」

赤子を抱いた娘は、千鶴の声で、千鶴と同じ口調で

厳しい躰けの入れられた美しい姿勢のまま

紅い髪をして座っていた。

「赤子に乳母を与えてください。どう見ても人の子です」

「その姿は、いったい何だっ。」

千鶴、赤子に取り憑かれたか！」

父親の不穏な気配に千鶴は赤子を背に隠す。

持ち歩いているヒ首は、先ほどの戦闘で失くしてしまった。

まさか、実の父親から殺気に向けられるなど予想もしてはいなかったのだ。

千鶴は、己の甘さを噛み締める。

「この姿が、そんなに御嫌いならば千鶴は父上の前から消えましょう。」

罪も無い赤子に乳すら与えてやれぬなど……」

片膝を立てる。

俯いていた顔を上げて、父親を見つめる。

「そんな勝手なものが人の子だというなら

千鶴は死んだと言えればいいっ

私は、もうあなたの娘でもなんでもない」

見つめてくる瞳が蒼く底光りをしている。

紅い髪が、ばさりと顔にかかる。

その形相は、ただ恐ろしく何も言い返せないままに座り込んでいた。

目の前で、悲しそうな目をした異形の娘が泣くことすら出来ないほど弱った赤子を抱きしめる。

「今宵からは、お前が『ちづる』だ。

私はイラヌモノになってしまった」

誰もが動けない間に、娘は部屋から静かに立ち去っていく。

「騒ぎを起こして申し訳ない。

今宵のこと、この異形のモノが迷い込んでのことと

どうか家の名に傷が付かぬよう、要らぬ噂はしないで頂きたい」

閉められた障子の向こうから聞こえるのは自慢の娘のものなのに

あんな気遣いが出来るのは、娘以外に居ないはずなのに

それでも追うことが出来ないまま時が過ぎた。

翌朝、千鶴の愛用していた薙刀と共に愛娘は姿を消していた。

それからだ。

時折、噂だけが流れてくる。

子を産んだばかりの女のもとに、紅い髪の女が乳を分けてくれと頼みに来るのだという。

—鬼が人の子を攫って育てようとしているんだ—

そんな言葉と共に聞こえてくる。

二人目の妻女と共に、赤子だけでなく跡取り娘さえも失った筑後家の主は

近しい親類に家督を譲って、出家してしまった。

ただ譲られた者たちは、あの娘の帰りを恐れた。

あれは、本来ならば家を継ぐはずだった娘に間違いは無いのだ。

あの異形の姿になって、赤子を育てているという娘。

一人を惑わせる紅い髪の鬼女。

その首を持ってきたものに賞金を出す—

瓦版にまで載せられた鬼退治に町が色めき立った頃、赤い髪の娘の噂は遠い地方へと移っていた。

「イラヌモノだ。ちづる」

「イラ……？」

やっと言葉を覚え始めたというのに名前を捨てた己を呼ばせるすべが無い。

「イラヌモノなんだよ、私は」

「うーん……又……イ……モ？」

野宿の火の傍で、幼子が何度も練習を試みる。

その様子に、もうどうでもいいと思えてくる。

「ああ、ヌイなら言えるのだな。

ならば、ヌイでいいさ……どうせ名など呼ばれることは無い」

「ヌイ？」

あっさりと呼ばれて可笑しくなる。

赤子だった異母妹は、元気に生きている。

あの割れた水鏡の中に居た男は、約束を守ったのだ。

—ならば、私も守らねばならない—

今度こそ、あの不思議な男に勝たねばならない。

愛用の薙刀の手入れをしながら、妹を寝かしつける。

それが、今のヌイの平穩だった。

肉を切らせて

その廻船問屋は、敷地内に大きな庭と池を作らせていた。

周囲を取り囲むように、家屋と蔵が立ち並んでいる。

「豪勢な暮らしぶりのようだな」

茶屋の横で牛飼いは、少女を見ているようにと言われて待っていた。

こんな場所で知っている顔に出会えば命が無い。

それでも妹に会えるかもしれないと思うと、あの女の言うことを大人しくきくしかないと思ったのだ。

「山道を抜けるまでが俺の仕事で、あとは川を下るんだ。

此処に来たのは、いずが居るからと連れて来られた

ただの一度きりだけど間違いない。

いずが居ると思うと忘れられるわけが無いだろう？」

大きな屋敷の土塀をなんとなく飛び越えて中の様子を探ってきたらしい紅い髪の女が

無表情に話を聞いている。

その視線の先で、愛らしい少女が茶屋を覗き込んでいた。

「蕎麦でも、たぐって来い」

いきなり銭を渡されて、女の顔を盗み見る。

蕎麦代にしては、多すぎる金額だ。

「逃げろと言っている。わからんのか？」

「いずはっ」

紅い髪の間から、暗い眼が向けられる。

「見つければ助けてやる」

それは『見つかるわけなど無い』と言われていたのと同じことだ。

とても聞き入れることなど出来ない。

「ならば、勝手にするがいい」

片手に牛の手綱を握り締めたままで既に立ち去ろうとしている女の背を見つめる。

あの紅い髪の女は、これからどうするつもりなのだろう。

「ちづる、もう少し歩きなさい」

「ねえさま……行くの？」

女を見上げた少女は、急に不安そうな顔になって駆け寄っていく。

愛らしい大きな目で『姉』と呼ぶ異質な紅い髪の子を見ている。

「こんな時間だから大人しくするしかないだろう。

夜目でも目立つのに、昼間から暴れるわけにいかないじゃないか」

「ちづるも！ちづるも付いていく！」

普段は大人しい子供が、珍しく駄々を捏ねる。

紅い髪の子に縋るように、纏わり付いている。

周囲を通りかかった人々が、女に怯えながらも好奇の目を向けていた。

「だから、私は目立つんだから大人しくしていなさい。

心配せずとも、こんな人の多い場所で一人にはさせない」

女の白い手が髪を撫でると見上げていた少女が微笑む。

不思議な二人だ……。

「千鶴？千鶴じゃあないのか？」

大きな声に少女は咄嗟に女の影に隠れた。

背の得物を片手に握り、眼差しだけが声のほうを向く。

「おいおい、俺だよ」

害はないと示すように両の腕を広げて見せている。

茶筥の鬚、家紋の入った上等の羽織と着物。

陽気な声で、若い男は近付いてきた。

「斬るぞ」

低い恫喝の声に、男は驚いて立ち止まる。

「従兄弟の真之介だよ、忘れたのか？」

「知らぬ」

短い返事の間にも、長い得物は構えられている。

往来でのこと、早くも人だかりが出来始めていた。

「そんな姿の女が、二人、三人といるわけがないだろう」

「私は女ではない。イラヌモノだ」

紅い髪が流れる。

長い得物が薙ぐように周囲の空気を裂く。

「千鶴っ」

後ろに下がった隙を狙って、女は少女を抱きかかえて茶屋の屋根に登っていた。

「お前など、私の敵にすらなれはしない」

女の声は瓦を踏む音と共に聞こえてきた。

周囲のものが騒ぐ中、若い男は躊躇いも無く後を追う。

牛飼いは、その有様を見つめながら特に意識もせず懐の中に握らされた銭を入れていた。

—イラヌモノ……？—

何故だか、その言葉が心に引っかかって仕方が無い。

とぼとぼと瘦せ牛を引いて歩き出す。

何処を目指しているのかさえ、解ってはいなかった。

どれほど走っただろう。

川原の風が心地いい。

息を切らせながら、土手に座る女の傍に近付いて行く。

「相変わらずだな」

女の膝の上では、小さな少女が眠っていた。

その寝姿を見ながら、顔を上げもせずに声だけがかかる。

「相変わらずは千鶴の方じゃあないか。

まったく、いつになったら追いつけるのやら」

羽織を脱ぎ捨てると、当然のように少女にかけてやる。

それを見て、ようやく紅い髪の女が笑う。

「今の私は『ヌイ』という。ちづるという名は、この娘に与えた」

「髪の色とともに？」

ようやく息が整ったとみえて、男は女の傍に座り込んだ。

「あんな往来で声をかけるな。

だいたい、何故お前が此処に居る」

「親父が死んで、お前を追うものが居なくなったと報せたかった。

いや、俺が追っていたんだから皆無ではないが」

紅い髪の間から、暗い蒼く光る眼が向けられる。

それでも若者は笑っていた。

「ならば、家を継いでいるはずだろう」

「継ぐならば、俺じゃあ駄目だ。

お前は、幼いころから言っていた。

『敵にすらなれはしない』『相手にもならない』

全くだ、今日も敵わないと思った」

一人、可笑しそうに笑い出す。

その声を聞きながら、女は何も言わずに流れる川を見ていた。

「あの家を継げるのは千鶴だけじゃないか。

俺の心配なら無用だぞ？

俺は入り婿になると、ずっと言っていたらどう？」

「お前、私の姿が見えないのか」

膝の上で眠る少女を撫でる女は、紅い髪で顔が隠れていた。

ざんばらに流した紅い髪。

そんな目立つものを見えないわけは無い。

「俺は気にしない」

「そうか……」

予想していたかのように女は聞き流してしまう。

この陽気な男は変わらない。

記憶の中の、拙い刀さばきで挑んできた頃と何も変わらない。

「千鶴は死んだと、最近まで聞かされていたんだ。

義母さまが亡くなったと知った途端に、そのまま死んだんだと。

墓もあったし……疑わなかった」

男の投げた小石が川に落ちる。

その様子を見ても女は何も言わなかった。

「けど、俺の両の親は『紅い髪の女』を恐れていた。

そんなものは居るはずがないというと、全部話してくれたよ。

生まれた赤子と髪を入れ替えたんだって？

千鶴らしいと思った。

何故、俺に黙って出て行ったのかと恨んだよ」

「お前など、頼りにもならないからだ」

女の言葉に慣れているのか、陽気な声のままに笑う。

「だが、探し当てた」

「私は目立つ。探すのは容易い」

自慢げな声を容赦なく、へし折る。

紅い髪の女と幼い子供の二人連れというだけで何度も襲われたから、追われているとは思っていた。

直接に手出しが出来ないと知ると、まず狙われるのは幼い異母妹だ。

ちづるが攫われかけたのは、一度や二度ではないのだ。

「俺は千鶴への恋慕で探したと思っているがなあ。

ほら、十三参りの時でも俺は『恋』と書いたと話しただろう。

お前には散々と笑われたが、これこそ『理』じゃないのか？」

「私はヌイだと言っただろう。ちづるは、この娘だ」

同じ年の従兄弟とは同じ日に寺へ出掛けた。

虚空蔵菩薩への参拝の前に書いた一文字だけの文字。

己が大切にするというものを漢字一文字で書くというから千鶴は迷わず『理』と書いた。

その千鶴は、実父に殺意を向けられて死んだのだ。

あの夜、理由が解らないままに殺意を向けられて千鶴は消えた。

ヌイと名乗り、『鬼』と呼ばれながら生きていううちに

あの夜の殺意の『理』が見えてきた。

この紅い髪は恐ろしいのだ。

なんとも感じずにいた己は稀有なのだ。

「んーじゃあ、こっちの嬢ちゃんに求婚しなそう。

そしたら、お前も付いてくるんだろ？」

「阿呆が……」

この男は考え無しで動くわけではない。

幼いころから、唯の棒切れしか持てないような頃から、何度も稽古試合をしてきた。

剣術は拙かったが、戦法は悪くなかった。

「鏡池に居る男と約束したのだ。

お前などの相手はしてられない」

ぽつりとこぼすような言葉に真之介が過剰な反応をする。

両の手を地に付けて、紅い髪の下に隠れた目を覗いてくる。

ここまで、この外見を気にしないというのも問題だと思った。

この紅い髪で帰る場所など無い。

あの男と勝負をつけなくてはならない。

「惚れ合った相手が居たのか？」

「本当に色恋しか考えられないのか」

溜息が出そうになるのを堪えて、遠く川の流れる流れに目を向ける。

「何処の鏡池なんだ？」

「それが解らないから探している」

せめて名を訊くべきだった。

あの水鏡の底に居た男は、何処に居るのだろう。

「そんな会いに来ないような男など忘れてしまえよ。

この俺を見ろ、こうして探してきたんだ」

「金の色の猫のような目をした男なんだ。

恐ろしく重い剣を片手で軽々と振るう。

あの技量が羨ましくて仕方が無かった」

その重い剣をヒ首などで受け止めた技量は意に介さない。

あの夜に勝っていたなら、今の自分は居なかった。

「惚れているのか……そんな見目の男に」

あの男は髪に口付けて姿を消した。

色香の話ではない。

「真之介、お前が惚れた相手の見目はそんなに良いのか？」

「当たり前だ。気性は荒いし、恐ろしく腕が立つがな。

あんな真っ直ぐに前を見て歩く女は他に居ないぞ。

背筋を伸ばして、綺麗な目で見つめてくるんだ。

見惚れている間に、いつも試合では負けていた」

思い出したのか、可笑しそうに大きな声で笑う。

その声に驚いたのだろう。

昼寝をしていた少女が起き上がっていた。

「ああ、起こしてしまったか。

もう少し寝ていてくれないか、あと少しで口説き落とすから」

「くどき……？」

少女が言葉の意味を尋ねようとしている間に紅い髪の女が立ち上がる。

「ちづる、知らぬものと親しくしてはいけないだろう」

「でも、ねえさま……

この方は私の名前を何度も呼んでいたのよ？」

少女の言葉に若者が笑う。

掛けてやっていた羽織を差し出されても、男の笑いは収まらなかった。

「何度でも呼ぶぞ。

俺は千鶴という名の女に惚れたんだ。

けど、千鶴は居なくなっておかしな名を名乗っている。

名を変えても、俺が惚れた目は変わらない」

「幼子に妙なことを吹き込むな」

羽織が放り投げられてくる。

それを受け止めて、視線を戻すと女は居なかった。

慌てて周囲を見回す。

はるかな距離に、少女を片腕に抱いた紅い髪姿が見える。

「益々、動きが早くなってるじゃないか。

それだけの技量を持っていて、家督を継がないなんて卑怯だぞ。

千鶴……」

声の届かない距離にいる相手に独り言のように呟いていた。

話に聞いていた通りに女の髪も、瞳の色も変わり果てている。

けれど、あの真っ直ぐに見つめてくる目は同じものだ。

刃を抜けば、決して逸らさない瞳。

長い流浪生活で性根が変わっていたらと危惧したのも馬鹿馬鹿しい。

あの女は何処までも前を見て歩いていく。

「鏡池ねえ」

そんな名の池など何処にでもある。

今まで幾つの池を訪ねたのか知らないが、あの女は諦めないのだろう。

いつか辿り着けると信じて歩いているのだろう。

「あれじゃあ、小さいちづるも奪えないなあ」

赤子さえ普通の子だったら千鶴は消えたりしなかったはずだと

そう信じてきたからこそ、何度も人の手を使って奪おうと試みた。

どれだけ異母妹を大切にしているかは、予想しているつもりだった。

何しろ襲わせた相手は、残らず斬り捨てられている。

二人の仲の良さを目の前で見れば奪おうとした己が恥ずかしい。

何より、あの幼子は小さいだけで姉と同じ目をしている。

真っ直ぐに相手を見据える瞳。

あれは何かを一心に信じている目だと知っている。

己の惚れた女は、あんな幼子の頃から『理』にこだわって信じる道を歩いていた。

あの瞳は、全く同じものだ。

もう遠くなってしまった背を追うことにする。

やっと出会えたのだ。

諦めるのなら、追ってきたりはしなかったと伝えなくてはいけない。

譲られた家督も、その家に伝わる武術も継ぐ者として相応しいのは、あの紅い髪の女だけなのだ。

己が惚れたのは、そうして前しか見ないで生きる女なのだ。

一度は死んだ者として諦めていた恋慕だが他に想いを寄せることが出来なかった。

居なくなってしまった者への想いだけが募っていた。

やっと出会えた。

それを伝えなくてはいけない。

真之介は、遠い背を追って駆け出した。

あの背を追うのは慣れてる。

あの背は、いつも振り向いてなどくれないのだ。

追い抜いて、前に躍り出ない限り見つめてさえくれない。

追わなくてはならないのだ。

【再会】

ぽつり、ぽつりと屋根から滴り落ちる水滴の音が聞こえる。

闇の中、小糠雨が降っていた。

「行くの？」

刃の手入れを終えた紅い髪の女に少女は声をかける。

懐から、そっと取り出した守り袋を差し出してくる。

その小さな手の平を握りながら、紅い髪の女は笑った。

「これは『ちづる』のものだろうか？」

私に何かあれば、それは役に立つはずなんだ。

そうだな……

今日の川原に居た男、あれにでも渡せばいい」

これが、かつての千鶴のものだと覚えていてもおかしくない男だ。

ましてや、その中には異母妹の母親が埋葬されている寺の場所が記された

異母妹への想いを最低限に示した紙切れが入っている。

「ねえさま……」

抱きついてくる幼子の、その背を優しく撫でている。

『鬼』と恐れられる紅い髪などを持っていても、その少女を見る目は慈しみに溢れている。

「心配せずとも私は簡単に殺られたりしないよ。

今宵は共に行くのだから、余計に無理などしない。

ちづるを攫った理由を知りたいだけなんだから。

だから心配などしなくていい」

少女が腕の中から見上げてくる。

蒼く底光りする眼を恐れもせずに見つめてくる。

「ねえさまは、ちづるのことばかり心配なさるのに

ちづるに案ずることすらさせないなんて。

ちづるが攫われそうになる度、理由を問いたです

それだけで、ねえさまは危険になる……

ちづるは信じているけれど……

ねえさまのことは信じているけれど」

「ならば、それを裏切ったりはしない」

幼子が言葉を選んでいる間に、女は話を終わらせてしまった。

背に得物を担ぐと、少女を抱き上げる。

不安そうに抱きついてくる異母妹の髪の匂いが清らかなままであることに安堵してしまう。

今宵も、この娘に血臭など移らせたくはないと願う。

雨宿りに使った荒ら屋を出て、真っ直ぐに昼間の廻船問屋へと向かっていた。

昼間と同じように土塀を乗り越え、家の主を探して歩く。

隠れもしないで屋敷の中を歩き回るのだから、すぐに気付いた店の者たちが騒ぎ始めて行く手を阻まれた。

「夜分に申し訳ないな。

この見目では、人目を避けたかっただけだ。

この店の主に会いたいだけ、話をしたいだけ」

力には自信のありそうな大柄な男が立ち並んでいる。

大きな荷を運ぶ廻船問屋になら、このような連中が揃っていても不思議はない。

不思議なのは、恐れもせずに敵意を向けてくることだ。

「それすら叶わぬというなら、力づくという事になるが」

そろりと抱いた少女を降ろすと背の得物を片手に握る。

隙と見たのだろう。

飛び掛ってきた男たちの中には短刀や包丁を振りかざしてくるものも居る。

それを低い姿勢のまま、柄の部分で薙ぎ払ってしまった。

ただの硬い木の棒にしか思えなかったもので軽く当たっただけに感じていたら着ているものが裂けている。

ゆっくりと感じる痛みは、次第に動けぬほどになってきた。

「素人が何人出てきても同じだ。

話のわかる相手を出せ」

低い声での恫喝に、男たちが周囲を見回す。

「俺は客人だろう？ええ？」

頓狂な声に、緊迫感が破られる。

老いた男に背を押されてやってくる姿を認めて呆れ果てる。

「元はといえば、先生の依頼じゃあないですか。

ウチは女子供を攫ってはいるが、あんなのと張り合いたくない。

あんたが害のない目立つだけの女だといったのは

これじゃあないのか？」

「あああ、だから話すなと！

この女は怒らせると本当は怖いんだ。

けど、普段は害などないから嘘など言ってはいないぞ」

老爺の言葉に見知った若い男が慌てていた。

「なるほど、お前の策か。

私に手出しをして来ないで、ちづるばかりが狙われるわけだ。

お前との勝負もつけてやる。

さあ、鈍でないなら抜くがいいっ」

後ろに隠れていた少女が闇の中庭を目指して渡り廊下を降りていく。

その気配を感じながら、紅い髪の女は刃を向けてきた。

蒼く眼が光る。

大柄な男たちが、ようやく恐れを思い出したかのように逃げ始める。

「よしてくれ。敵うわけじゃないか」

両の手を広げると、まるでやる気無しという風情だ。

その男の喉下にまで切っ先が突きつけられる。

流石に驚いたのだろう。

硬い表情で見つめてくるのを迎えたのは般若の笑み。

「昼間の言葉が嘘でないなら、その刃を抜け。

全てが嘘だったというなら、このまま大人しく消えろ」

知り尽くした相手なのだ。

この男の嘘くらいは見抜ける。

「ちづ……じゃなくて、ヌイだったな。

ヌイ、話し合いでは済まないのか」

返ってきたのは、八重歯が見えるほどの笑み。

真っ直ぐに見据えられたままでは、動くことも出来ない。

喉に突きつけられた刃は本物の殺意が込められている。

この女は怒らせると怖いのだ。

途方にくれるように天井を仰ぎ見る。

「解った、俺が悪かった。

お前に斬られるなら本望だ」

腰に下げた二本の刀を投げ出す。

途端に激しい痛みが鳩尾に入った。

眩暈がする。

蹲る身体を、さらに石突で突き上げられる。

板張りの上を転がると、顎を蹴り飛ばされた。

「死ぬ気もないのに何を抜かす。

私に加減をしてくれるのかと思つてのことなら甘いぞ」

距離を詰めてくれると思つたのは一瞬のこと。

あの女の何処でもいいから掴むことが出来れば接近戦なら勝算もあると思つた。

それなのに、相変わらず動きは早いし近付いてきたと認識できた時には攻撃をくらっている。

この女の持つ薙刀は、女ならではの短いものだ。

刃の反りが急で、少しでも触れたら斬られる。

気合だけで石突で着物を裂き、その下の骨を砕く。

室内だからといって、半減しているとも思えない技量だった。

暗く静かに雨が降っている。

その静けさと緊迫感を破るように、大きな音が聞こえてきた。

「何事だ」

「裏木戸が破られた！」

店の者たちが騒いでいる。

その中で、紅い髪の女は動かなかつた。

得物を構えた姿のまま、見知つた男に刃を向けている。

逸らされることのない瞳。

「牛！暴れ牛だ！」

声が聞こえた時には、蹄の音も聞こえていた。

濡れた地面を、玉砂利の上を、大きな生き物が動いている。

「あの牛は、小次郎という男のいうことしか聞かない。

近くに居るはずだ。

あの男と話してみるがいい。

それまで、勝負は預けておく」

「千鶴っ」

背を向けられて、咄嗟に声をかけてしまった。

「お前には失望した」

紅い髪の向こうから聞こえてきた言葉に予想以上の痛みが走る。

心が痛くてならない。

そんな男を部屋に残したまま、紅い髪が濡れるのも構わずに暗い庭へと降りていく。

広い中庭に、場違いな幼い少女が闇の中に立っている。

「ねえさまっ」

少女が女に駆け寄る。

「どうした、小次郎にでも会つたか？」

「牛は見たけど……でもね、でもね。

あっちの池がおかしいの」

指差す方向には贅沢な作りの池がある。

その畔に立てば、確かにおかしい。

おかしさに、思わず笑みがこぼれる。

「でかしたな、ちづる」

頭を撫でられて、幼い少女は訳も解らずに微笑む。

池は小糠雨の中でも、黒い水面を波紋一つ立てずにいる。

そこに映りこむ己と異母妹の姿。

「遅くなったな」

水鏡に向かって話しかける。

不思議そうに見上げる異母妹を抱き寄せる。

『なんとも騒がしい夜にやってきたものだ』

懐かしいような、不思議な声が聞こえてきた。

「私が来たから騒いでいるんだ」

水鏡が割れる。

水の流れる大きな音と共に、雷鳴が轟く。

『変わり者は、いつまでも変わり者のままか』

池の底には、まるで変わらない姿の美丈夫が立っていた。

あの見慣れない剣を片手に、当たり前のように池から上がってくる。

「探せと言ったのではなかったのか」

『言われて探し当ててくるから驚いている』

他愛のない話をしながらも、互いに隙は見せない。

女の背後から、幼い少女が見つめてくる。

恐れでも、驚きでもない。

ただ好奇の目で真っ直ぐに水鏡の底に居た男を見ている。

『如何にも、お前が育てた娘らしい目だ。』

この勝負、何を賭ける？』

言われて答えが見つからない。

引き分けた勝負で、異母妹は生きてきた。

代わりに己の髪は紅くなった。

引き分けなのだ、当然だ。

「約束を守りに来ただけだ」

それしか理由はない。

『願いはないのか？』

勝負に勝てば、叶えてやるぞ。

その姿を元に戻してやってもいい』

「生憎、この姿にも慣れてしまった。

そうだな、願うなら生きていたいただけだ。

この娘が一人で生きていけるときまで。

だから負ける気などない」

薙刀を構える。

背の少女が、後ろへと駆けて行く。

それを目で追いながら、金の瞳が晒っていた。

『欲のない……』

す……と指しだされた手に抜き身の小さな刃があった。

見知った柄を向けられても、構えは変わらない。

『代償を余計に持っていった』

「ならば、勝負が付いてからでいい。

その辺に捨てておいてくれ」

実母の形見だ。

あのヒ首だけで、この男と渡り合ったのは数年前。

今なら得物で勝負が出来る。

二つの刃を持つなど慣れない事はしたくない。

『本当に欲のない……』

男は晒いながら、ヒ首から手を離した。

すどんと闇の中、細い刃は地に刺さる。

『ならば人ならぬものの欲を賭けさせてもらう。

その身の傍に、この身を置け。

無論、お前が勝てば忘れていいことだ』

「わかった」

負けるつもりがないのだから返事は早かった。

笑みを浮かべて頭上を仰ぐ。

小糠雨など意に介せず、見つめる目は相手を見据えていた。

猫のような金の瞳が晒う。

宙を舞う姿を捉えられて、その着地すら待たずに薙ぎ払われる。

—ギャン！—

重い刃に当たって、振動が手に伝わる。

それを感じる前に次の一手は繰り出されていた。

刃を引かずに、そのまま回転させて石突で突く。

それが空を突いたと感じれば、刃が素早くやってくる。

追えぬはずの相手を正確に追い、攻撃してくる。

『呆れたな。本当に腕を上げてきた』

「当然だ」

ギリリッと音を立てながら、互いの刃が競り合っている。

重い剣が鏢に届く前に、ぬかるみの中で足の動きが変わる。

刃を引く。

濡れた紅い髪が飛沫を飛ばして流れていく。

宙を舞うように飛んでいく重い剣を、どちらも目で追うことすらしなかった。

「何故だ？」

『そういう事を言い出すと解ったからだ』

薙ぎ払った瞬間に、この男が手を離したと解っている。

それでも、あの重い剣を飛ばすほどに技量はないと知っている。

薙ぎ払った瞬間に、この男が手を離したと解っている。

折れた刃を向けながら、理不尽な怒りが湧いてくる。

「負けてやる気などないといっただろう！」

『そんなもので斬られても死なぬのが、人でない身。

解らぬはずもないくせに人の身で挑んでくる。

もともと暇つぶしでしかなかったのだ』

暇潰しだろうが、相手が人でなからうが約束は約束だ。

勝負を挑んできて、今さらに何を言い出すのだろう。

「ならば、私の負けだ。勝手にするが良い」

くるりと刃を地に向ける。

紅い髪の下から蒼く光る瞳が見据えてくる。

『女、負ければ欲を、条件をのむという事だぞ』

「ああ、だから勝手にしたら良いと言っている」

人でないはずのものが呆れたように見つめてきた。

ゆっくりと近付いた金の瞳が、そのまま猫のように細められる。

『呆れたな』

囁くように耳元で聞こえた声。

髪をすべるように口付けていく。

「おいっ」

それは覚えのある感覚だ。

慌てて、ざんばらに流した髪を手取る。

「ちづるっ！」

『案ぜずとも、あれに何もしない。』

いい加減に気付いたら良いものを。

あれは、私の娘だ。

あれの母親と通じていたことに気付かなかったんだな』

気付くはずがない。

あの頃は、何も知らなかったのだ。

「父は気付いていたのか？」

『おかしいとは思っていたようだ』

「そうか……」

まだまだ己は甘い。

異母妹だと思っていたのに、血の繋がりはなかったのか。

「それでも、ちづるは私の妹なんだ」

急に呼ばれて、慌てて駆けてきた少女を抱き上げる。

幼い娘が女の髪を、その瞳を、何度も見ては首をかしげる。

「ねえさま、これでは迷子になっても探せないわ」

「ならば、離れぬよう気をつけていればいい」

この少女は、紅い髪の姿しか知らないのだ。

何故、女だけが紅い髪なのかさえ尋ねてこなかった。

「千鶴！千鶴じゃないかっ」

ぬかるみに足を取られながら、騒がしく声が聞こえてくる。

「ああ、その姿の方が千鶴らしい。

これで家督も継いでくれるのだろうか？」

陽気な声に眉をひそめていた女が、ふと思いついたように晒う。

「家督を継ぐのは良いがな。お前と母親は家を出て行け。

それと、私の名はヌイだと言っている。

ちづるは、この娘だ」

思ってもいなかったのか、若い男は視線を泳がせる。

ふと、その先に見慣れぬ男を見つけて気がついたときには、その胸倉を掴んでいた。

『その女は、お前を赦せないのだろう』

掴まれていながら晒う男は猫のように金の瞳をしていた。

人とは思えない異質な声で、不吉な言葉を紡ぐ。

「千鶴っ！コレが惚れた男か？」

「馬鹿を言うな」

怒りと恐怖で掴んだまま動けなくなった手を引き剥がしてくれた白い手は

縋ろうとすると素っ気無く袖の中に引き込められた。

「それより、真之介……牛はどうした。

牛飼いに会えといっただろう」

「ああ……会った。

会ったけれど、話を聞いていたら堪らなくなった」

この男は分家とはいえ、大きな武家の跡取りとして育った。

牛を買って、その借金で家族を失うなど想像もつくまい。

まして、その思いなど察してやることすら出来ないはずだ。

「此処の人買いには少しばかり縁が出来てしまった。

だから、俺は牛飼いの妹を探そうと思う」

「そうしてやってくれ」

かけられた声既に背を向けているのだと気付いて、その背を追うことを躊躇う。

今までなら、躊躇うことも思いつかずに追ってきた。

あの背は振り向くことなどしない。

「ねえさま、小次郎は来ないの？」

「牛より妙なのが付いて来るんだ。それでいいだろう？」

『呆れた言い草だ』

人ならぬ身が、いつの間にか横に並んでいる。

当然のように腕の中の少女を抱きとろうとするのを白い手が跳ね除ける。

「急に馴れ馴れしくするな。

この娘には煩いくらい知らぬものと親しくするなと言いつまがせている」

すたすたと歩き出すと、再び横に並んでくる。

「面白い方ね、ねえさま」

「ああ、ちづるの父さまだそうぞ。

そのうち仲良くなってやれ」

「父さま……？」

ちづるは両親を知らない。

居ない理由さえ話さずに過ごした。

定住などしないまま、紅い髪の女に育てられた少女は周囲の人間たちの常を知らぬままに育った。

「ああ、親といえば真之介」

振り返ると驚いたような目が向けられる。

好奇の目に慣れた女は、その理由さえ気付かずに居る。

「お前が帰ってくるまでくらい、伯母上は我が家にいていただく。

まあ、伯母上が嫌でなければだがな……

だから案ぜずに留守にしていぞ」

絶対に振り返らないと思っていた背に振り向かれて思わぬ言葉を聞かされる。

「すまない……」

「謝られる覚えなどない。

誰だって知っていた女が紅い髪になったら驚く。

そんな当たり前を理解できなかった私がいけないのだ」

見慣れていたはずの笑顔に戸惑っている間に女は再び背を向けて歩いていってしまった。

『お前は、器が大きいのか、世間知らずなのか解らぬ』

「両方だ。お前こそ義母さまに手を出しておいて

ぬけぬけと私に付いてくるなど、本当に人ならぬものは解らない」

冷たい声で言い放つ。

その目の前に、小さな柄が差し出される。

『鞘は失くしてしまった』

「構わない、それは預けておく。

いつか、絶対に勝負して勝ってやる」

『無理だと言っただろうに』

旧知の者同士のように親しげに歩いていく姿を、そろりと覗いて慌てて庭へと降りてくる者。

「真之介様、あの別嬪さん御知り合いで？」

「馬鹿者、髪の色が変わっただけだろうがっ

幼子の頃から惚れていたのに、あっさり横取りされちゃった！」

よく解らないまま、牛飼いの小次郎は頭を下げる。

「お前もだ、人買いが一年もの間

同じ場所に女を置くはずもないだろう。

牛などを放り込んでくるなど滅茶苦茶だ。

千鶴に関わると、いつも滅茶苦茶なんだ」

茶笥の鬘が崩れるのも構わずに頭をかく。

「すみません。

イラヌモノなどになりたくない、なんか急に思えてしまって

慣れない事をしちまいました」

ひたすら頭を下げる小次郎に、真之介は当たるしかなかった。

まだ心の痛みが消えてはくれない。

「まったく、此処の後始末は俺がするのか？

俺なんだろうなあ……」

見えなくなった追い続けていた背を思う。

あの女なら、きっと迷いもせず力を貸す。

己の出来る範囲で、出来るだけのことをやりとおす。

それすら出来なかったから、振り向いても貰えなかったのだろう。

帰郷

地方とはいっても、由緒ある武家のこと。

家督を譲られた男が死んで、まだ喪があげたばかりだというのに
死んだはずの本来の跡目継ぎが帰ってきた……

—あの薙刀使いの娘が帰ってきた—

本人は目立つことに慣れてしまっている。

堂々と町中を歩いて居たのを何人もの者が見ていた。

「噂など放っておけばいいのです。伯母上」

娘を見た途端に寝込んでしまった伯母は見舞いに来られる度に恐ろしくて仕方がない。

この娘を追って出て行った息子は無事なのだろうか。

「それでも男を連れ込むとは何事ですか。

会わせていないからって知らないと思ったら間違いですよ」

精一杯に虚勢をはる。

それが解るから、娘は笑って聞き流す。

「会わせぬなりに理由もあるのです」

衣擦れの音が聞こえて、娘が立ち上がったのだと知る。

恐ろしくて顔を見ることさえ出来はしない。

出て行った頃と変わらぬままに、馬乗り袴などを身に付け

朝夕構わずに稽古をしていることくらいは激しい打ち合いの音が聞こえるから間違いはない。

こんな日くつきの娘の稽古に付き合うなど何処の変わり者だろう。

「そんなに気にかかるなら、お連れしますが」

障子を開ける音と共に聞こえた声。

心のうちを読まれて余計に恐ろしくなる。

答えられずに居ると静かに立ち去っていく音だけが聞こえてきた。

何もなかったように接してくるのが恐ろしい。

殺そうとしていたことくらい気付いているはずだ。

『何処ぞに移してやった方がいい』

濡縁に腰掛けて、庭を見ているのは人ならぬもの。

隣で小さな少女が鮮やかな布で出来た玉を器用に放り投げては受け止めている。

流浪生活では教えてやれなかったからと帰ってきて早々に教えて与えたお手玉だ。

己もそうだったが、一つ、一つの重さを覚えてしまえば

見ていなくても三つ、五つと宙に舞わせて遊ぶ。

「ああ、私だって気付いている。

此処から近い湯治場にでも移っていただけるよう手配している最中だ。

身一つで動けないのは不便だな」

周囲に散乱したお手玉を三つばかり手に取ると片手だけで宙を舞わせて見せる。

それを見て、両の手を使っていた幼子が慌てて片手で放り投げる。

「ちづる、いきなり数を増やしてはいけないと教えただろう？」

「でも、ねえさまのようにになりたいのだから」

ちづるのいう『ねえさまのように』とは主に武術を指す。

そういうことなど教える気などないから、お手玉などを与えれば上達が早すぎて呆れているのだ。

『だから、私が教えてやるといっただろう』

「父さまは駄目。ちづるだけのねえさまだったのに」

屋敷に帰ってきて、誰もが恐れていると気付いている。

ちづるは、恐れられて当然なのだと思います。

それなのに恐れずに親しくしてくる人ではない父親が気に入らない。

「夜だって、いつも騒ぎを起こしに来るんですもの」

『騒ぎになるのはヌイが大人しくしないからだ』

当たり前だ。

この色惚けた妖怪は深夜になると、いつの間にか傍に居る。

此処に帰ってくるまでの道中でも同じ目に合っている。

気付く度に手元から離さない得物での打ち合いになるから深夜だの、早朝だのと関係無しに騒ぎになる。

「御義母さまと過ごした家で、申し訳ないとか思わないのか」

いくら人ではないといっても、子まで成した女を思い出さないのだろうか。

『あれはな、女が望むからの結果だ。

だから生まれた時期がおかしいと、お前の父親は気付いたのだ。

あの女は早く子が欲しいと願うばかりに、水鏡に向かって願いを呟いた』

「御義母さまが？待て、相手が誰でも良いとは言わなかつたらう」

この男は水鏡に言葉を呟かれると、何かしら節介をしてくるらしい。

『私は誑かしも、取り憑きもしない。

あの女が受け入れたからに決まっているだろうが。

私には惚れた相手が居るといって、余計に拘った』

ああ、あの若い義母は惚れてしまったのか。

誑かしはしないが、この男は黙っていれば声の異質さに気付けない。

聞こえても、変わった声だと思っただけのものもいるかもしれない。

唯一の瞳など、閉じてしまえば解らない。

その二つだけが異質なだけで、見目は美丈夫なのだから誑かす気もなく誑かされた女だって居ると思う。

「惚れた相手が居るなら、私に要らぬことをしてくるな」

睡眠の浅い人には、慣れている。

けれど、毎晩と続くと人の身では耐えられる期間も限られる。

この男と持久戦などしたくない。

『女の癖に、本当に色香に鈍い。

傍に置けとまで言って、離れないのなら

惚れられているとくらい勘ぐるものだ』

片手で遊んでいた玉を思わず取り落としていた。

「お前、本当に色に惚けているんじゃないだろうな？」

『ヌイが鈍いのだ。こんな状態で家督を継いでしまって

その次の跡取りはどうする。

私が居る限り、普通の人間は恐れて養子にもならないぞ』

継ぐことを捨てたはずの家督を継いだばかりだ。

千鶴は死んだことになっているから、養女としてのヌイが継いだという形を取っている。

そんな体裁ばかりの跡継ぎだから、その後など考えてもいなかった。

「勝負に勝って、お前を追い出す」

『無理だといっただろう』

それでも付けられないままの決着が悔しくてならない。

実際、この男に手加減なしで胴を貫いたことさえあるが意にも介せず次の手を出して来られて驚いたことがある。

『ちづる、ねえさまが母さまになったら良いと思わないか？』

「かあさま？」

この男のせいで、今まで両親の居ないことさえ気にする様子も見せなかつたちづるが

父だ母だと知りたがっている最中なのだ。

「そういうのを誑かすというのだ。水鏡」

機嫌が悪い時しか名を呼ばないのに、名を呼ばれると

この人でない男は晒っている。

「勝手にしたらいい。もう知らぬ」

再び手に取った鮮やかな布の玉を投げ始める。

幼いちづるは、それを真似ようと懸命に片方の手で玉を投げて受け止めている。

『ならば勝手にさせてもらう。騒ぐなよ？』

「そんなことは約束できかねる」

素っ気無い返事を、男は晒って聞いている。

『すぐに慣れる』

「都合の良いように解釈するな」

言葉だけが投げられてくる。

幼いちづるに手ほどきするのに忙しそうだ。

何度もやって見せては、ちづるが真似るのを見ている。

『良い母になれると思うがな』

それを聞いていながらも、もう女は返事すら返しては来なかった。

ちづるに対する態度が母親のようだとは思っているのだ。

自覚があるのだから何も言い返しはしない。

ただ今宵も浅い眠りになるのかと思うと少しばかり気鬱なだけだ。

色恋に疎い女は、そんな態度が惚れ合った者同士の戯れにしか聞こえないということすら

全く気付いてはいなかった。

ただの約束一つで、この男を探していた理由も恋慕だとは思わない。

そんな、いつまでも少女のような女の疎さに気がつきながら人ならぬ男は、触れるような距離で座っている。

その距離が日々、縮まっていることを知っている。

だから金の瞳で鮮やかな玉を追いながらも、それを操る女には何も話さないでいることにした。

慌てる理由など、何処にもなかった。

人でない身だからこそ、この女が離れないことなど見抜いている。

ただ当分の間は、その愛情表現が刃同士の鬩ぎ合いになってしまう。

ただ、それだけのことでしかない。

そう、それだけのことでしかなかった。

肌を求めるより、刃を交わすほうを好むのなら人でない身の男は、どちらでも良かったのだ。

妖しなもの

暗闇の中、息も絶え絶えに駆ける姿があった。

追ってくるものの気配から逃れよう、逃れようと、ただ無我夢中で走り石段を駆け上がる。

「たすけて！」

声の限りに叫んだのは、丁度境内の中にある池の前だった。

直後に何かに押し倒される。

頭が水に浸かる。

必死になってもがく娘を押さえつける腕は容赦なく

その着ているものを引き千切るような勢いで肌蹴させる。

「いやっ勘弁して！」

その声に余計に乱暴になる相手に娘は怯えて震えている。

両の脚を無理矢理にひろげさせられ、いつの間にか切れた帯が胴から、するりと離れていく。

「いやあああっ」

暴れても、相手は全く動じることがない。

覆いかぶさられたと思ったときには、引き裂かれるような強い痛みが身体を貫いていく。

「きゃああああああああああああああああああ」

その絶叫を最後に娘は意識を失った。

翌朝、娘は骸となって見つかった。

境内の中の、木の枝に何も身につけない姿のまま

両の脚の間から胴を貫くように枝を差し入れられて絶命していたのだ。

その数日後

近所に使いに出ただけのはずの少女が股座から口へと麻縄を通して、反らした身体のまま木
木の枝に下げられて骸となっていた。

凄惨な骸から漂う不吉な感覚に誰もが人の仕業とは思えなかった……

人から人へと噂が広がる中、犠牲者は再び出るのだった。

つい転寝のつもりが深く眠り込んでいたようだ。

横になっている己の背に、衣装が触れる距離で

共に横になっている存在を感じている。

こういう事をされるたびに、得意の刃を持って斬りかかった。

それも、ひと月、ふた月と続けば身が持たない。

そして、ふた月もたてば嫌でも気付く。

この共に横になっている男は眠り込んでいても、せいぜいが髪に口付ける程度だ。

未だに戦闘中以外で肌に触れたかさ覚えていない。

「懲りないな」

『勝手にしていいといったのはヌイだ』

まだ日が昇るまで時間があるのだろう。

薄暗い部屋の中で、猫のような金色の瞳が光っている。

この人ではない男と知り合ったのは数年前。

いきなり庭の池の水が割れて、その底から出てきた。

あれから幾度となく斬り合いを、こちらは本気で挑んでいるのだが

未だに一度たりとて勝ったという気がしない。

「水鏡、お前の行動の理由が解らない」

『惚れた相手の傍に居て何か不思議なことがあるのか？』

万事に関して、こんな調子だから邪魔臭くなって

勝手にしたら良いと言い放ったのだ。

言っても、言わなくても、この男の態度は変わらない。

薄闇の中、並べて敷いた布団の上には小さな娘が眠っている。

異母妹だと信じて、十三のときから女一人で育てた幼子。

そのころの己が名乗っていた名を与えた、ちづるは今でも可愛くて仕方がない。

例えば父親が、この背に触れている人外のものと知っても

そんなことはどうでも良かった。

「お義母さまとも、こんな風にしていただけか？」

『子が欲しいと願をかけてきた相手に添い寝などするか』

それが解るから不思議なのだ。

この人でない水鏡の名を持つ男は、その名の通りに鏡のようになった池などの底にいるらしい。

こんなものが居ると知らずに、水鏡に意味のある言葉を呟けば

何らかの形で叶えてやろうと節介をしに現れる。

ちづるの母である義母は、嫡男を産まねばと悩んだ挙句に水鏡に願いを呟いたのだという。

「それでも、義母さまは惚れていたんだらう？」

『知らぬ。惚れた相手が居ると言うとは何故だか

この異形のものの子を欲しがった。

だから、生まれた子を要らぬと思ったら命を落とすようなことになる』

困ったことに願を掛ける気もなくかけているというのに勝手に条件を出してくる。

叶えば、それなりに代償を持っていくのが水鏡だ。

生まれたばかりのとき、ちづるは紅い髪をしていた。

それを今のように人にしか見えない姿に変えたのは水鏡だ。

「お前、自分の子が死んでも良いと思っていたのか？」

『もとより、人が人でないものの子など育てられるわけがない。

それを生かすというから変わっていると言ったのだ』

生憎と人外の子と思って育てたわけではない。

それでも、事実を知れば見捨てたのかと何度も考えたが

やはり義母が命をかけて産んだ子を見捨てることは出来ないだろう。

それを変わり者と言われたくらいでは気にもならない。

「その割には、ちづるを可愛がるじゃないか」

父も母も知らずに育てた幼子相手に、父親なのだと言って懐かせようと心砕いている姿は滑稽ですらある。

この男は、異質な声で金の猫のような瞳をしているというだけで

黙って目を閉じていれば、ただの人にはしか見えない。

その上、美丈夫だときている。

そんな姿で、赤子の時から流浪生活をさせられて年の割には生意気な口調で話す幼子を相手にしているのだ。

『あれはヌイと同じ目をしている。

ヌイが育てた子だと思っただけから愛おしくもなる』

こういう言葉を表情も変えずに言ってくるから困るのだ。

「お前が義母さまに言った惚れた相手というのは

私だというようなことを言っていなかったか？」

『そういう意味以外に聞こえたなら言い直すが』

あえて言い直させたいわけではない。

人でないからなのか、理由も訊いたことはないが

まだ子供とっていいところから想われていたらしい。

「なら、何故 姿を消した……」

この男は一戦目を引き分けだと決め付けて姿を消した。

願いは叶ったが、代償も払った。

再度、挑みに来いというから各地の池を回る羽目になったのだ。

『頃合を見計らっていただけだ』

「頃合？」

確かに腕を上げて挑みに来いとは言われていた。

それでも未だに一戦とて勝てたとは思えない。

何より勝てぬと言い切られている。

この人ではない男は、胴を薙刀で貫かれても意に介さなかった。

ならば、何の頃合を見計らっていたというのか。

『だから女の癖に疎いというのだ』

耳元で囁かれた声に、少しばかり身構える。

さらりと黒髪に口付けをして立ち上がる姿が見える。

「水鏡？」

『誰ぞの声が聞こえた……』

ふいに掻き消すように消える姿。

どうやら、また何処かの水鏡に誰かが言葉をかけたらしい。

「節介な妖物だ」

あの『水鏡』の名を持つ人外のものは、水鏡にかけられた言葉だけは他の何事より優先するらしい。

相手は水鏡に映った己に呟くだけなのだ。

あのようなものが出てきても、大抵は驚かせるだけではないのか。

かつて『千鶴』と名乗っていた頃のヌイでさえ、あの男に声をかけられたときは驚き、身構えたものだ。

そんな風に思い出しながら、待つ気もなく待っていたのかもしれない。

いつもなら半時もせず姿を見せるのに今日は珍しく帰りが遅い。

朝飯時に姿が見えなくても何も言わなかった幼子が流石に気になっていたのだろう。

庭の池を覗き込んで見つめている。

「ちづる、落ちて知らないぞ」

「落ちたら、父さまのところに辿り着く？」

「溺れるだけだ」

ちづるは、己の父親を名乗るものが人ではないと知っている。

池を割って現れるところも見ている。

だからだろう。

池を見ていれば、あの男が現れると思っ込んでいる。

「そんなに気になるか？」

振り回していた棒を肩に担ぐ。

本来は薙刀を得物とするヌイは、棒術にも長けている。

この古い武家の跡目継ぎとして育ち、ごく最近継いだばかりだ。

「ねえさまは気にならないの？」

駆け寄ってきた幼子は、甘えて擦り寄ってくる。

それを抱き上げて濡縁の上に座らせ、己も隣に腰を降ろす。

手ぬぐいで汗を拭きながら、気にならないのかと自問してみる。

「気にしても仕方がないだろう」

相手は人ではない。

簡単に死なぬことは知り尽くしているし、案じてやる義理もない。

「ちづるの父さまなのにな」

「なんだ、いつの間に懐いたんだ」

ちづるは唯一信頼してきたヌイのことを独り占めできなくなって実の父親相手に嫉妬していたのだ。

「母さまも居た方が嬉しいもの」

「お前、誰を母親と呼ぶつもりなんだ」
幼子の指が己を指してくる。
尋ねる意味さえ解らぬとばかりに当然のように指してくる。
「呼び方が変わるだけだろう？」
元から、ちづるは私が育ての親じゃないか」
「でも、ねえさま……」
着物の袂を両の手で遊ぶ仕草は、ちづるが困った時の癖だ。
「言いたいことがあるなら言いなさい」
頭に手を置いて、優しく声をかけてやる。
それが余程に嬉しかったのだろうか……
ちづるは、笑顔で甘えてきた。
膝の上に寝転ぶようにして身体を乗せてくる。
その上目遣いの目が、まっすぐに見つめてくる。
「ねえさまだって、気になさっているのでしょうか？」
いつもより技を失敗していらしたし……
それに池の見える場所で稽古をなさっていたわ」
そう言われても、それが気になってのこととは思えない。
気にしなければならぬ理由が見つからない。
「アレの入れ知恵に誑かされてどうするのだ」
「父さまは、たぶらかさないもの」
確かに妖物のくせに人を誑かそうという気はないらしい。
ただ誑かすつもりもなく、誑かされる者がいるだけだ。
「ねえさまが母さまになって下さればいいと思うか、
思わないかと父さまは尋ねてきただけなの。
たぶらかしてなんかいないわ」
ちづるは滅多に我俣など言わない。
それが、こうも拘っているのは余程のことなのか。
「だから、育てたのは私なんだから呼び方が違うだけだろう？」
「父さまは、父と母とは仲が良いものだと教えてくださったわ。
ねえさまは、斬り合いばかりなさっているじゃない」
どう答えるべきかと、さすがに悩む。
実母の記憶がないのは、己も同じだ。
ただ跡目取りとして厳しい躰と稽古に明け暮れた日々は母を恋しいとさえ思う暇がなかった。
『斬り合いなど、戯れの一つに過ぎない』
いきなり背後から声がして、つい握ったままだった棒を構える。
膝の上から転げるように濡縁に落ちたちづるは何事かと目を見開いて左右の二人を見比べていた。
「おかえりなさい。父さま」
きっちりと座りなおしてから声をかける幼子に人外のものが、金の瞳を細める。
『あまりヌイに解らぬことを繰り返してはいけない』
「お前が要らぬことを吹き込むからだ」
構えを解いて、くるりと回す。
一体いつから話を聞いていたのか。
周囲の気配には人一倍、敏感なはずなのに、この男は気付かせぬままに傍に現れる。
「また怒ってる」
ちづるの声に仕方ないと濡縁に座りなおす。
「怒ってなんかいない」

「ほんとう？」

何故だか、ちづるは己に尋ねて来ずに人外のものを見ている。

『ヌイは本気で怒ると見境なしに斬りかかって来る。

こんな棒きれでも、当たり前の人間ならあばら骨くらい叩き折る』

「その当たり前の人間でないものに言われたくはない」

機嫌など良いはずも無さそうな声で言い返す。

だが、それ以上を言い返そうとする幼子に手をかざし、合図で話すなど示した。

「立ち聞きなどしていないで、出て来い」

「ん、やはり気付かれていたか」

屋敷の影から出てきたのは上等の着物を着流した若者だ。

見つかったことも気にならない様子で笑っている。

「いつ帰ってきた」

「一〇日くらい前になるか。

お前が何もしないから、親類縁者を回っていた」

この陽気な男は実の従兄弟だ。

ヌイが戻らなければ、この家を継ぐはずだったものを旅先まで追いかけてきた。

「それで？」

「ああ、あの牛飼いな……あのまま雇った。

妹は見つけて、俺が身請けしたから揃って雇った」

胸を張って自慢そうに言うのを聞き流す。

「そうじゃない。何の用で来たかと訊いている」

「あ、ああ……相変わらずだなあ」

困ったように笑うと、気になるのだろう。

背後にばかり視線が行く。

「こんな昼間からウロウロしている妖物など気にするな。なんの用だ」

「いや、だからさ。

その……妖怪騒ぎが起こっているのを知らないと思ってさ。

神社の森だので妖しいものに女ばかりが、殺されてる」

手渡された瓦版には、禍々しい化物に馬乗りになっている若い女が描かれていた。

それを、ちらりと見ただけで置いて突き返す。

ちづるなどには見せたくないものだからだ。

「生娘ばかり、もう三人も殺されている。

どれも、さんざん弄んだ後があるというから

こういうものが好きな連中は大騒ぎだ」

「それを、どうして私に聞かせる」

尋ねる必要も無かったが、あえて尋ねておいた。

この従兄弟は、水鏡を疑っている。

そんなことくらいは、言われずとも解る。

「あのな、親類連中だって本家を化け物屋敷にするのかと散々に騒いでいるんだ」

「その件なら、私が話すから来るようにと伝えたはずだ」

実際には誰も来るはずは無い。

それも解っていたから、放置していた。

「だからな……」

「真之介、生娘ばかりなら私が仕留めて来てやろうか？」

「え……？」

思わぬ返答に従兄弟は間の抜けた返事をしてきた。

それを真っ直ぐに見つめたまま、笑顔だけを返してやる。

「これでも着飾れば、当たり前女に見えると思うが？」

「いや、それは知っている。

美しいからこそ、妖魔も取り憑くとされている」

「じゃあ、適任じゃないか」

クスクスと遠慮のない晒い声が背後から聞こえてくる。

この人ではない男は、取り憑くことも、誑かすことも無い。

訳のわからない節介を焼いて、勝手に代償を持っていくだけだ。

「いや……あのだな、ちづ……じゃなくてヌイ。

疑わないのか？あまりに時期があっているだろう？」

「疑うも何も、こいつだとしたら私が生きている意味が解らぬ」

背後の人でないものを指差すと、その指されたものが

背に触れる距離まで寄ってくる。

『察してやれ。お前が生きていれば隠れ蓑になる。

その位は想像しているだろう？』

「あのな、お前を庇ってやっているんだ」

触れる寸前の距離に顔をあわせていながら、躊躇いも無い。

真之介にとって、この妖魔は恋敵だ。

「真之介、私が襲われないと確認してからでも良いだろう？」

「いや、あのだな……さっきも言ったが、生娘ばかりだぞ？」

何故だか顔を赤らめて、こちらを見ようともせずに出てくる。

ヌイは年の離れた妹などの育ての親だが、まだ生娘でもおかしくない年齢だ。

『私が手を出したと思っているんだろう』

「ああ……そういえば、そういう仲に見られ易い」

ちづると三人であるけば若夫婦と子供だと思われたことも少ないとはいえない。

「とにかく私が歩き回っておく」

早く帰れとばかりに追い払うように手を振られて真之介も居心地が悪くはなった。

とっくに夫婦仲だと思っていた妖魔とは、この嘘が嫌いな気性の荒い娘が

何もないというなら本当に何もないということなのだろう。

「一人で……大丈夫なのか？」

「一人でなければ意味がないだろうが」

相手が例え妖魔の類でも、ヌイは気にならない。

普段から斬りあっているのが背後にいる人でない男だ。

この男の持つ見慣れない重い剣に比べたら大概のものは受けても平気だ。

しづる真之介を追い返してから、ことさら気にする様子も無く

ヌイは眠そうにしていた幼子を昼寝させている。

考えていることといえば、普段は着慣れていない女らしいものを用意する方法などだった。

『何故、まったく疑わない』

「なんだ、身に覚えでもあるのか？」

突然に背に触れる距離で現れても、もう気にはならない。

人でない男が金の瞳で晒っている。

『声は聞いたが、すぐに水鏡が揺れて壊れた故

助けろという女の願いを聞き流したことならある』

「つぎに現れる場所とか、解らないのか？」

『私は、そういう類のものではない』

予想はしていたから期待はずれとも思わなかった。

—母や義母の着物を漁ろうか、いや残した己のものにも
艶やかなものがあつた気がする……—

『意味の無い事に巻き込まれに行くなら
今からでも手を出しておこうか』

「意味はあるだろう。

この辺りでは紅い髪の鬼女退治騒ぎがあつた。

最近では死んだはずの娘が町中を歩いている。

それも、日くつきの幼子と異形の男が傍に居る。

真之介が来なくても、騒ぎくらいは気付いていた」

人ではない男の、耳に触れるような距離での囁きさえ

今のヌイは聞き流してしまう。

『私の無実を示そうと行くのではないのか？』

「そう思いたいなら思っていればいい」

いきなり身動きが取れなくなって慌てる。

後ろから抱きしめられて居るのだと理解するまで僅かに時間がかつた。

「なんのつもりだ。水鏡」

『だから、要らぬことを起こす前に手を出しておくといつたららう』

首筋に唇が這う。

今まで一度も触れてこなかつたくせに両の腕が身体を触れていく。

身八口から手を入れられて、素の肌に触れられたと解ると

流石に大人しくしていられなくなる。

「おいっ」

振り払おうとした腕を押さえつけられて、仰向けのままに

目の前で見慣れた金の瞳が晒っている。

「あのな、相手が当たり前の人間なら生娘に

見えるというだけで充分なんだ。

今さら手を出して来ようが、今宵から歩き回る。

襲つてこなかつたら、生娘じゃないと解るお前だということになる」

『ならば、抱いてもいいということだ』

言い返そうとした言葉は言えなかつた。

唇を唇で塞がれたまま、しばらく思考する。

この人でない男が、今さらに手を出してくる理由が解らない。

『ヌイ、色事に及ぼうかという相手を見据えてきてどうする』

「今さらで、今でないといけない理由が解らない。

早々に襲つてくると限らないんだから、退治した後でいいだろうに」

色香の欠片も無い言葉に人でないものが笑い出す。

『早々に来ると思うがな。

ヌイは雑魚妖怪でも斬れる腕だが、それだけに素人には隙だらけに見える』

「ならば、尚更 明日、明後日くらい待て」

とくに逃れようともせずに、見つめたままに言い募ってくる。

『嫌だとは言わないのだな』

「ああ……そういえば失念していた」

おおよそ尋常では有り得ない言葉を本気で呟く。

『やはり、お前は変わり者だ』

名残惜しそうに口付けられながら、変わり者で何が悪いのかとも思っている。

触れていた肌が離れて、何故だか落ち着かない。

「妖物のくせに暖かいのか」

『そんなことに感心しているのか、呆れた奴だ』

呆れられても、そうとしか言えなかった。

何故、落ち着かないのかは解らないのだ。

「歩き回っている間は、何処ぞで声をかけられても

此処で、ちづるを見ていてくれるか？」

『何故、嫌だとも言わないのかを答えてくれるなら』

つくづく、些細な願いでも代償は必要らしい。

この妖の性質に呆れ果てる。

「そんなものは考えても解らぬ。

ごく普通に考えたら、惚れているんだろう。

自覚が無いから、そんなことを容易く言い切りたくは無い」

『そこまで自覚があるなら充分だ』

自覚が無いことを自覚している。

それを人ではないものが晒していることさえ、ヌイには平穏な日常でしかない。

【変化】

散々に散らかした挙句、結局は着ることなどないと思っていた

実母が己のために遺してくれたという艶やかな柄の着物を身につける。

本来なら、見合いなどのときにでも用意してくれたのだろうが

生憎とヌイに、そういう話が来るはずもない。

着慣れない振りの長い着物と、着け慣れない艶やかな帯。

髪結い屋にまで行く気にはなれず、それでも少しは女らしく

玉結びに仕上げると見違えるような若い娘が出来上がった。

得物を袋に包み、それを両の腕で抱きかかえて歩いてみる。

「なんとか、なるか……」

袋に入れたままの得物を片手でクルリと回せば、はらりと袋の紐が解けて石突きが現れる。

「綺麗ね、ねえさま」

「ああ、私が着ていくと着られなくなるな。

ちづるには、新しいのを仕立ててやるから心配するな」

袋に得物を仕舞い直すと、幼子の手を引いて廊下を歩く。

冬でも素足に慣れたヌイには、白い足袋すら邪魔に思える。

『まるで想い人にでも会いに行くような衣装だ』

「そういうときのために作っていただいたのだから

そう見えるだろうさ。

これだって、届け物にでも見えるだろう？」

得物を包んだ袋を指し示すと珍しく金の瞳が見据えてくる。

いつも、晒うように……何もかも見透かすような妖物の瞳。

『手助けがいるようなら呼べ』

「お前を呼んだら意味がないだろうが」

疑っているのは従兄弟だけではないはずだ。

水鏡はヌイの傍から離れたがらない。

昼間から、堂々と何処にでも付いて回る。

この界限で『化物』といえ水鏡を指している。

「ねえさま、あぶないところへいくの？」

「近所を歩き回るだけだ。案ずるな」

幼子を抱き上げて、そのまま人ではないものの腕へと渡す。

「ねえさまは、本当にだいじょうぶ？」

『大丈夫でないからといって、誰かが止められるのか？』

その異質な声に幼子が首を横に振る。

「ちづるを不安がらせるな」

言葉を置いて、ヌイは着慣れない衣装を乱すことなく背を向ける。

幼くても、ちづるは置いていかれる意味を知っていた。

置いていくほうが安全だと思えば置き去りにされる。

まして此処はヌイの家で、ちづるの父親が傍にいる。

ヌイが此処から出て行けば危険なのだ知っている。

けれど、それを止められないことも解っていた。

「ねえさまっ！」

呼び止めたくて、声をかければ笑みを浮かべて振り向かれた。

「良い子にしていたら、土産でも持って帰ってくる」

泣き出したいのを堪える。

あんな風に言いながら、いつも返り血まみれで帰ってくるのだ。

野の花などを気楽に土産だと渡されながら

帰ってきてくれるだけで良いと何度も思った。

「早く帰っていらしてね」

「心がけておく」

カラリ……という音と共に、艶やかな衣装を着た女は暗がりの中へと消えていった。

あてもなく歩いても仕方はない。

まずは、人目につくような大きな通りを歩いてから何度か小道へと入って様子を見る。

艶やかな、いかにも良家の娘という風情の娘が少し急ぎ足で町を歩いて過ぎ去っていく。

ときおり照らし出される白い顔が、あまりに美しくて

たまたま行き逢っただけの蕎麦屋が振り返る。

「何処の箱入り娘だか、噂も知らないのかねえ」

ここ数日、毎晩のようにやってくる常連客に話しかける。

客は蕎麦代を置いただけで、何も言わずに立ち去った。

気配は、随分前から気付いていた。

気付いていると解らせることの方が都合が悪かったから

ただ夜道に怯えるような足取りで歩いたに過ぎない。

それでも、あからさま過ぎるほどに付けて来るとなると少しばかり足を速めてみる。

相手は、気配を感じさせることで道を選ばせる。

人通りの少ない場所へと、より暗い場所へと気付かれぬよう選ばせる。

なるほど、慣れた手口のようなだ。

小さな稲荷神社への石段が見えて、その先に開けた場所はなかったと思出す。

着慣れない衣装なのだ。

出来るだけ不利は避けたい。

石段の手前ならば、祭祀などがあるたび市が建つ広場だ。

これだけの場所があれば充分だと立ち止まる。

出来るだけ静かに、相手の気配に気付いていることすら気付かせぬくらいに静かに俯いたままに立ち尽くす。

背後から見た姿は、ただ途方にくれた良家の娘だ。

薄闇にも浮かぶ灰桜色に鮮やかに鶴が描かれた衣装。

鳩羽紫の帯がキリリと文庫に結ばれている。

大切そうに抱えているのは、届け物だろう。

何か物思いに沈むように、うなだれているように見える。

道に迷ったことだろうか。

誰かに付けられていることに怯えているのだろうか。

追いながら見た白い顔は美しかった。

今までの娘とは格が違う。

着ているものも、その姿も、上質のものだ。

—あれを汚したい……—

素早く駆け寄り押し倒そうと手を伸ばす。

だが、そこに居るはずの娘は遥か後方に身を翻していた。

手に持った袋の紐は解けて、長い柄が見えている。

前身の裾を当たり前のように、するりと帯に挟み上げて

片手で抜き放った長い得物が微かな星明りに鈍く光る。

「驚いたぞ。てっきり当たり前の人間だと思ったのだがな」

目の前にいるのは、ただの人間とは言いがたかった。

背丈といい、その太い腕といい、尋常ではない。

その上で、あれだけ気配を消して追ってきたのだ。

「な……に・も・の……」

驚いているのは男のほうだ。

大きな身体でありながら、俊敏に動ける身は今まで狙ったものを取り逃したことなどなかった。

それだけではない。

この姿を見ただけで、女でなくても怯えて逃げる。

それが、この女は晒って見据えてくるではないか。

「見ての通り、少しは知られた武家の当主でな。

お前などにウロウロされると、私は居心地が悪いのだ」

晒われることに腹立たしくなって腕を伸ばす。

それが何も掴んでいないと感じたときには伸ばした腕は地に落ちていた。

「だぁぁっ」

怒りのままの体当たりは成功したと思った。

足は速い。

自信がある。

薙ぎ払っただけの刃が胴を裂いていた。

倒れた直後には石突で背の骨を砕く。

返り血を浴びた白い顔に笑みが浮かんだ。

「証人、見ての通りだ」

血を払うと刃を地に向け帯に挟んだ裾を直す。

袂から出してきた手ぬぐいで血を拭う間に、声をかけられて気まずい思いをしながらも男は出てきた。

「確かに……一部始終をみていたよ。

出る幕、なかったなあ……」

陽気なはずの男は、少しばかり残念そうだ。

この数日、捕まえてやろうと探し回っていたものを目の前で倒されてしまった。

やはり、この従姉妹に話したのは失策だったか。

「真之介が片付けたかったなら女装でもしたら良かったんだ。

蕎麦なんぞ、食らっている間があるなら考え方を変えればいい」

「馬鹿を言え。相手は生娘しか狙ってこないんだぞ」

捨て置いたままだった長い袋に得物を収めると笑ったままで女は近付いてくる。

「こいつは、そんなのは見分けては居なかった。

ただ若い女が、こんな時間に出歩いていれば

それだけで良かったんだろう」

見た目は異形のものだったが、妖物でないことはヌイには解る。

本物の妖物なら、家に帰れば居るのだ。

「生娘でなくともって、千鶴のことかっ？」

「阿呆、どうしてそうなるんだ。

それに私はヌイだと言っているだろう」

何度言われても、つい呼びなれた名を呼んでしまう。

分家と本家の跡取り同士だというのに、気付いた時には惚れていた。

本家当主を名乗るからには、死んだことになっている『千鶴』というかつての名前で呼ぶものは他には居ない。

「こいつを斬ったのは、お前だといっておけ。

襲われていた娘は逃げてしまって解らないと言えればいい」

「なぜだ？」

得物を両腕で抱きかかえ、長い振りを手の平に乗せて口元へ持ってくる。

そんな仕草は見慣れていないし、この女は幼いころから美しかった。

戸惑っていると可笑しそうに笑う声が聞こえる。

「だから、こんな格好で大男を斬ったとなれば

それこそ不自然だろう？」

「いや、それでも……お前の腕を知る者は信じるぞ？」

「私の腕を知るものが、この格好を信じるものか」

笑ったままで女は歩いていってしまう。

真之介は言い返せなかった。

あの娘は本家を継ぐことに、誰からも反対されないだけの理由がある。

他の誰も叶わないだけの腕を持っているからだ。

ただ常日頃から、馬乗り袴で男のような姿をしている。

その上、あの口調と性格だ。

「なんで、いっそ醜女になってくれないんだっ

それだけの腕で、その姿じゃあ惚れるなどと言われても無理だろう！」

しゃなりと振り向いて見せた笑顔が意地悪かった。

「それなら水鏡にでも頼めばいい」

「あいつに頼み事なんかできるかっ」

捨て鉢のようになって、喚いている男を放って女は来た道を引き返していた。

「ああ、まだ居たか」

そろそろ店仕舞いをしようとしていた蕎麦屋は驚いた。

声をかけてきたのは、先ほど駆けていた娘に間違いはない。

「悪いな、何も手土産がなくて難儀をしている。

一束でいいから蕎麦を分けてくれないか」

まるで男のような言葉で銭を置く。

ふと、その手に持っているものに目が留まる。

「ああ！あんた、いつも幼子を連れている薙刀使いか？」

「ん？なんだ、解るか」

解るも何も、この女は界限では有名だ。

十三で死んだと言われていた娘と瓜二つで同じ技を持っている。

誰もが、死んではいなかったのだと気付いている。

それでなければ、あの大きな武家屋敷の当主になど

こんな若い娘がなるはずがないからだ。

「おかしいと思っていたんだ。
恐ろしい噂があるって言うのに、えらい別嬪が駆けていたから」
蕎麦屋は、気前良く話しながら蕎麦を竹皮に包んで寄越した。
「逢引にでも行くのかと思ったけど、あんただったか。
こりゃあ、化物騒ぎも終わったか」
「このこと、伏せておいてくれ。
それでなくても、うちには本物が居るんだ」
金を余計に渡されて、蕎麦屋は口が過ぎたと知る。
そうだった。
この女には、いつも連れている男が居る。
ただの美丈夫だと思い込んでいたら、その瞳が猫のような色をしていて驚いたのだ。
「誰にも言うな……私とて斬りたくないものを斬らずにいたい」
蕎麦の束を摘み取ると、女は笑顔で恐ろしい言葉を残す。
そろりと盗み見た後姿は、ただの娘でしかない。
それでも、あの娘が並みならぬ腕を持っているとは聞いている。
冷たい汗を拭きながら、今度こそ店を仕舞うことに専念したのだった。
「ねえさま」
己の屋敷だというのに、裏木戸などから入ってきた姿を縁台に座っていた幼子は目敏く見つける。
駆け寄って抱きつくと、予想通りに綺麗な衣装を血で汚していた。
「おかえりなさい」
「起きていたのか、ほら土産だ」
竹皮の包みを渡されて、そろりと中をのぞく。
「なあに？」
「蕎麦だよ、甘いものなど店が開いていないから」
ちづるは流浪生活の中で育った。
夜鳴き蕎麦を知らないわけではない。
ただ竹皮に包まれているのは、初めてみたのだ。
「たべていい？」
「眠いのを我慢していたくせに無理をするな」
片腕に抱き上げると濡縁から屋敷へと入る。
「少しだけ、少しだけ食べたら寝るから」
「残ったのをどうするんだ」
構って欲しいのだろう。
この幼子は、まだ血のニオイがするような状態でヌイが何も食べないことは知っている。
殺生など慣れている。
慣れているからこそ、食わぬと決めているのだ。
いつものように並べて敷いた布団の上に幼子を寝かせ、共に横になってやると
安心したのか、ようやく大人しく目を閉じる。
「あのね、ねえさま」
珍しく声をかけてくる。
ちづるは、赤子の頃から寝つきがいい。
横になってから起きていることなど少ないのだ。
「ちづるも、ねえさまのようになりたい」
「刃物など振り回して楽しいと思うのか？」
小さな手が手の平を握ってくる。
先ほど、人一人を殺してきたばかりの手だ。

「逃げるのは嫌だから……」

そんな生意気な言葉を呟いて、すぐに寝息を立てている。

こんな血にまみれた姿に憧れるのだろうか。

いつも背に庇い、血に汚れることの無い様にと斬りあいになれば遠くまで駆けて逃げるようにと教えた。

それを不満に思うようになっていたのだろうか。

血に汚れた白い足袋を脱ぎ、重い帯などをほどいて

もう着られないだろうと思うほど返り血を浴びた衣装を畳む。

これを作らせた母は、こんな風になると思っただろうか。

記憶に無い実母の思いはわからない。

「着るはずだった千鶴ならば、こうではなかったのだろうか」

ならば、この結果も仕方が無いのだろう。

そう答えを勝手に出して、灯りを消す。

ふいに背に感じる気配。

疲れていただけに反応するのも面倒だった。

『今宵は妙に、しおらしいな』

「ちづるを一人にして、何処に居たんだ」

代償を受け取っておきながら、約束を違えるとは思えなかった

『気になるのか？』

耳元での囁きに付き合いきれず、そのまま己の布団へと入る。

その背に寄り添ってくるのは、既に慣れたものでしかない。

「お前の約束が、そんなものなら気になどならない」

この妖物との約束を守ろうとするのは、いつも己の方だ。

相手が同じように守ってくれるなどとは思ってはいない。

ただ……

願いに代償を支払えば、この妖は違えないと思っていた。

それが少しばかり気に入らない。

『ちづるが、私が傍にいるというのに』

池に向かって願掛けなどするからだ』

「ちづるが？」

我侬を言わないような子に育ててしまっただけに気にはしていた。

何を願ったと言うのだろうか。

『仕方が無いから池の中にいた。それだけだ』

「ちづるは、何を？」

『強くなりたいのだそうだ』

つい先ほど聞かされたばかりの言葉が蘇る。

—逃げるのは嫌だから—

当たり前少女になってくれれば良いと願っても本人は、それを願っていないのだ。

『そう願うことが、既に強い証だと答えておいた』

「……そうか……」

確かに、そういう答えでいいのかもしれない。

ぼんやりと眠ってしまった幼子に見入る。

背から感じる気配も同じように見ているのだと思っただけなら唐突に抱き寄せられた。

「水鏡？」

声をかけても、人でない男は何も答えない。

ただ髪だの、耳だのと口付けてくるだけだ。

何を理由に今さらに色事に及ぼうとするのかは解らない。

何故、嫌だと思いつきもしないのかも解らない。
解らないままでも、素肌に触れられるなど初めてだ。
ヌイの手刀は、まともに食らえば一突きで大の男を殺す。
そんな女に手出しするものなどいなかった。
だから、素肌の上に触れられていてもただ不思議で仕方が無かった。
普段なら着の身着のまま、馬乗り袴などで寝床に着くのに
先ほど艶やかな衣装を血に汚してしまって脱いだばかりだ。
魔除けだと言われる緋色の長襦袢は、この妖には効かないらしい。
肌蹴た胸に唇が這う。
素のままの脚を人でないものが触れてくる。
解らないままの感覚を、ぼんやりと考えていると
そのまま手を差し入れられて、無意識に放った攻撃はかわされた。
「ちょっと待てっ」
『もう遅い』
唇が重なる。
覆いかぶさってくる身体は、人の姿をしているだけの妖物だ。
何度も斬りかかって、勝てないと思い知らされた相手だ。
未だに、この男の振るう重い剣を扱う技量は羨ましい。
己の身体の中に這入ってくるもの
知らない痛みは、刃で斬られたものとは違う。
ただ、それでも今さらに抵抗する意味はないと思えた。
知らない感覚に囚われながら、訳も解らずに伸ばした腕は
覚えの有る手の平に掴まれる。
湧き上がる感覚がわからない。
ただ抑えきれずに身体だけが反応する。
それが快楽だと気づく頃には、何度も同じ感覚に襲われていた。
身体が熱い。
よく解らないままに、抱かれているというのに
歯向かう気にはなれないままだ。
「ああ……なんだ……そういうことか」
腕の中で女が呟く。
乱れた髪で表情はわからない。
ただ、しなだれかかってきた身体は常の覇気が無い。
「情けないな、私は……」
知らずに流れる涙に、己自身が驚く。
あやすように背を撫でる手に、この人でない男は
とっくに気付いていたのだろうと思うと可笑しくもあった。
「これが、お前のいう頃合か？」
『年頃になるのを待っていただけだ。疎いにも程が有る』
ごく当たり前に考えれば惚れているのだろうとは思っていた。
それを自覚できないのには理由があった。
「義母が惚れた男に惚れるというのは、些か気が引ける」
『それは遠慮ではなく、ただの慥気だ』
そういうものなのだろうか。
それほど己は器の小さい人間ではないつもりだ。
『ならば問うが、この先 あの女と同じように

子が欲しいなどという願掛けがあったら如何する』
どうするのだろう。

この妖の性質は、鏡のようになった池などに
意味のある言葉をかけられると節介をやきにいく。

願いが叶えば代償を勝手にもって行く。

その性質を止められるとは思えない。

解らないままでいると、いきなり身体が離れて行く。

「水鏡？」

機嫌でも損ねたのかと思うほど、この妖物の目が晒っていない。

金の瞳で、あらぬ方向を見つめたままだ。

『先だって、声が聞こえて会った者と同じ声だ』

ああ、あの時は珍しく帰りが遅かった。

『一人は寂しいと泣く女だ』

つくづく、この妖は誑かす気も無く、女を誑かす。

願掛けがあったなら仕方も無いのだろう。

乱れた衣装を直して、そのまま横になると

不機嫌そうに背に寄り添ってくる。

「いかないのか？」

『私だって居たい場所くらいはある』

そういえば、傍に置けという条件を受け入れている。

この妖は傍から離れたがらないのだ。

『ヌイが願ひすら言わないから困ることになるのだ』

「願ひ？」

しばらく思考する。

ふと気付いて、その金の瞳を見る。

「水鏡、お前の居たい場所に居たらいい。

それが私からの願ひだ」

『ヌイ……せめて行くなと言えぬのか』

そう言われても、思いつかなかったのだから仕方が無い。

「居たい場所に居ればいいだろう？」

どうせ、私は人でしかない。

いつまでも傍に居て欲しいなど思うには無理がある」

『言ってこられたから困っていたのだ』

そういうことを願うものも居るのか。

願ったところで、人はすぐに老いて死ぬ。

そんなものの傍に居続けるには、水鏡の性質は厄介だ。

「それなら、付け加えておこう。

願をかけられたからといって、簡単に人と子を作るな。

人は異形のものの子など育てられないと知っているだろう」

『ヌイなら育てるだろう？』

ちづるを育てたのだ。

そのことだけは、否定のしようが無い。

『素直に他の女を抱くなといえればいいものを』

「私が、そういう事を思いつかないと解っていて要求するな」

微かに晒う声が聞こえる。

腕が回されて、抱き寄せられる。

『人にしておくには惜しい女だ』

答える言葉も見つからず、その触れている暖かさだけを感じている。

人であっても、そうでなくても

どうせ、己は人から恐れられている。

恐れられることに慣れている。

今さら、そんなことは気にしても仕方が無い。

再会

大きな武家屋敷だった。

勝手知りたるとばかりに、主は木戸を開けて入っていく。

「戸締りなどしないんだよ、ここの当主は」

なんとも無用心なことだ。

主について、手入れもされていない広い庭へと出ると、どこかで見たような立ち姿が見える。

長い黒髪を一つにまとめ、馬乗り袴などを身につけている。

片手でクルリと得物を回すと、こちらにやってくる。

「久しいな……小次郎」

「あ、あんた、やっぱり！」

以前に出会ったときは、紅い髪をしていた。

今の主から聞けば、思っていたような恐ろしいものではなかった。

「とにかく人を雇おうにも、誰も居つくわけがないからな
お前、真之介のとことウチなら どちらで働く？」

「はたらく？」

小次郎は、周囲の荒れたままの広い屋敷を見る。

これでは化物屋敷だ。

「全く、たまに頼りにしてくれると思ったら指名付だ。

小次郎、いず共々に働いてやってくれ。

ウチの本家は、当主がこんなだから人が寄り付かない」

それは解る。

この女の恐ろしさは身をもって知っている。

それでも、決して悪人ではないとも知っている。

「真之介、私のせいだけにするな。我が家には、本物の妖が住み着いている」

『いつまでも、妖、妖と言わずとも良いだろう』

いきなり女の背に触れるように現れた男に小次郎は驚きのあまりに声も出なかった。

「怯えなくても良いぞ、小次郎。

こんな昼間っからウロウロしているものに怯えて如何する」

虚勢をはって、片恋の相手に言われた言葉を真似てみる。

また笑われるかと気にしてみたが、意に介せぬと見える。

「屋敷は、こんなだが給金は支払うぞ？」

私は出稽古など付けてやっているから、真之介より稼いでいる」

「それは仕方が無いだろう？」

ち……ヌイは、親戚付き合いを俺に押し付けているんだから」

くすりと笑う顔に見惚れる。

あんなに恐ろしいと思っていたものは、なんだったのだろう。

「親戚共が、我が屋敷を恐れて近付かないからだろう。

私は、いつでも来いといっている。

戸口も開け放っているのに、誰も入ってこないのだから仕方が無い」

「ヌイは本気で怒ると怖いって、誰もが知ってるんだよ。

おまけに、コンナモノを置いてて来る奴がいるかつ」

コンナモノと主が指し示した相手。

ヌイの背に触れるように立つ男が気になって仕方が無い。

現れ方には驚かされたが、姿は恐ろしいと思えない。

ただ……不思議な声だとは思った。

「小次郎？」

濡縁から身を乗り出している幼子が声をかけてくる。

昼寝でもしていたのだろうか。

眠そうに目を擦りながらも、こちらにやって来た。

「今日は、牛はいないの？」

「ああ、お武家様のお屋敷には置いていただけなくてなあ」

寂しそうな声に、ちづるは不安そうにしている。

「いや、小さいちづる……別に手放させては居ないぞ？」

ただ他所へ預けているだけなんだ」

「小次郎の言うことしかきかない牛なのに？」

「そうは言うがな……我が家に置けないのだから……」

益々、悲しそうに見上げてくる幼子に真之介はうろたえる。

この幼子は、年のわりには口達者で困るのだ。

「だから、ウチに置けば良いと言うのだ。

庭の隅にでも小屋など建てれば良いじゃあないか」

「ウチに来るの？」

途端に嬉しそうに小次郎を見上げる。

小次郎とて、家族同然の牛と離れて居たくは無い。

「本当に、よろしいんで？」

「今さら牛が居たところで、別に誰も驚かない。

ちづるが気に入っているのだから、可愛がってやれば良い」

此処の当主だと言う女は、姿が変わっても言葉は同じだ。

奇異に見られることなど気にしないのだ。

「いつ？いつ牛はくるの？」

「私は直ぐにでも働きに来てもらいたいのだがなあ。どう思う、水鏡」

背に立つ男に声をかける。

女の耳元で何か囁いている。

女は、可笑しそうに笑っているだけだ。

「なんだ？ヌイ、どうしたんだ」

騒がしく問いかける真之介の声すら、笑って聞き流す。

「池を汚すなど言ってきただけだ。気にするな。

来る気があるなら、さっさと小屋を作れ。

真之介、牛と妹を連れてきてやってくれ」

言葉は優しいが、断れない気迫がある。

小次郎は落ち着かずに、真之介を見る。

「解るだろ……此処に誰も働きに来ない理由」

確かに、これだけの古い大きな屋敷で使用人が居ないなどおかしい。

それでも、雇い主の性格を知る小次郎には納得も出来る。

「では、明日からでも宜しいんで？」

「そうしてくれ、部屋なら用意しておく」

用は済んだとばかりに背を向ける。

ああ、この女は姿かたちなどに関係なく態度は変わらない。

確かに僅かでも、この変わった女に慣れた者でなければ勤めもできるわけもないだろう。

そんな些細な理由で雇われ先が替わって、妹のいずとともに

近辺では一番の大きな武家屋敷に勤めることになった。

家中がほこりまみれで驚かされ、さらに使用人部屋だという与えられた部屋の上等な内装に驚かされる。

畳を敷いた部屋で眠ったことなど無い。

「いずは台所に近い部屋に住んでくれ。

それとな、二人とも勝手に湯を使っていいから屋敷の中にあるものに替えておけ。

そんな格好でウチにいたら、化物の餌だとか言われるに決まっている」

どれだけ放置されていたのか知らないが使用人のためだとしか思えない狭い風呂場はある。

かつては豪勢な家だったのだろう。

「あの……お屋敷の何処にあるものでしょうか？」

この女に初めて会ったばかりの、いずには解らないことだらけだ。

「何処でもいいさ。動きやすいものならいいんだろう？」

私も、ちづるも、あちらの大屋敷でしか暮らしていない。

他の渡り廊下の向こうだとか、離れだとかは見てもいない。

掃除ついでに、着る物くらい探しておけ」

呆れるほど、この女は屋敷を放置している。

何に使うのか、見慣れない一尺ほどの棒を持った

馬乗り袴姿の女中は、使用人さえも放任するつものようだ。

「あのお、先日の旦那さまは？」

挨拶くらいはしておきたい。

何より、いずは見慣れていないから驚くはずだ。

「だから、アレはそういう者じゃあないだろう。

そんな呼び方をしたら、あの妖が喜ぶだけだ」

「あやかし？」

不吉な言葉に、いずは不安そうに兄を見上げた。

それでなくても、化物屋敷のように荒れた屋敷なのだ。

『解っているなら、素直に認めればいいのだ』

聞こえたのは、あの異質な声。

誰も居なかったはずの女の背後に美丈夫が現れる。

「せめて初対面の若い女にくらい、当たり前の現れ方をしてやれ」

『ヌイが、まるで私など居ないかのように言うからだ』

背から腕を回して、この恐ろしい女を抱きしめる。

片手に持った棒は男が腕ごと押さえている。

なるほど、アレは刃が無いだけの武器なのか。

「に……にいちゃ……」

「うん、慣れれば平気だからな」

すがり付いてきた妹に声をかける。

本当は己だって、まだ何も知らない。

ただ知っているのは、この女が恐ろしいと感じさせるほどの人間で

まるで夫婦にしか見えない美丈夫が人ではないと知らされている。

どちらも恐ろし気ではあるのに、害は無い。

ないどころか、この女に出会ってから小次郎の生き方は豹変した。

前の屋敷では、百姓仕事と牛飼いしかしたことがないものだから馬草を運ぶ程度でしか仕事は出来なかった。

妹のいずは、攫われた後は遊女だった。

二人は役立たずで居心地の悪い分家から、好んで呼び寄せられた。

「いず、怯えなくても何もしない化物だ。

そうだな、池などが鏡のようになったときに

話しかけたりしなければ この男はなにもしない」

女の声は何も変わらない。

背後から抱き寄せられ、首筋に口付ける妖を無視している。

「私はヌイ、この屋敷の当主を任されている。

今は昼寝をしているけど、ちづるといふ幼子が奥にいる。

この妖は水鏡とか名乗る節介焼きの妖物だ。

見ての通りの仲だから、ここが化物屋敷というのは嘘じゃない」

そんなことを潔く言い切られては、何も言い返せない。

何より小次郎と妹の二人には、他に行く場所も無い。

どうしようもないからと思いついて始めた古い屋敷での生活。

それが予想していたようなものでないことは数日でわかった。

此処は仕事が多いだけで待遇は恐ろしく良い。

食べ物など、主たちは何を出しても文句を言わない。

着るものは本当にきちんとしたものを着せられるし

仕事が遅くても、出来が悪くても小言など言われたことも無い。

たまに出かけたと思っていると、大金の入った袋を投げ寄せられる。

必要なだけ持っていけということなのだそうだ。

「やましい金じゃあないからな」

冗談めかしながらも女主は待遇の良さに戸惑ういずに気遣って、そういうことを話すのだ。

この屋敷には、人は入ってこないが文だけは頻りに届いている。

聞けば、どれも挑戦状だの、稽古を付けて欲しいだのという

いかにも武家当主らしい文だとわかる。

そういうことの代償に、金を貰うのだという。

「稼ぎがいいというのは、本当だったんですねえ」

「当たり前だ。分家と同じに思うな。

だいたい、その金額だって相手が勝手に渡してくるんだ」

手渡された給金の多さに驚きながら、いずが呟くと女主は事も無げに答える。

『待ち伏せした男二〇人を昏倒させたんだ。

道場主は、その金額でも少ないと思っているぞ』

いつものごとくに、女の傍には人ではない男が寄り添う。

いずも、いい加減に慣れてしまった。

声は聞き慣れないが、並んでいる姿は睦まじい夫婦にしか見えない。

「あんな殺気だらけで隠れていても意味がない。

稽古だというのに、得物を持って来いなどというから最初から変だと思っていたんだ」

聞かされてはいたが、本当に恐ろしいと思わせるだけの

腕を持つ女なのだ、いずは理解した。

「元気そうじゃないか！」

突然の声に驚いて、いずは戸口を見つめる。

見れば、以前の雇い主である。

「お出迎えもしませんで、申し訳ありません」

「あ……いや、いず……此処はそういう場所じゃあないだろう？」

慌てて居住まいを正して頭を下げると、決まり悪そうに言い返された。

思えば、主でさえ出て行くときも、帰ってきても

気付かないままだから、挨拶などした覚えはない。

「小さいのは？饅頭を持ってきたんだ」

「お前の目は、どうなってんだ」

言われて指し示された方を見ると、幼子がお手玉をしている。

ただ、その動きが余りに正確で規則正しいから

それが生きたものの動きだとは思わなかったのだ。

「ちづる、いい加減にして挨拶くらいしなさい」

「あ……」

集中していたのを、呼びかけられて驚いたのか
パタパタパタと鮮やかな色の玉が八つも落ちてきた。

「真之介、おひさしゅうございます」

べこりと頭を下げる仕草が愛らしい。

「驚いたな、さすがに本家の娘だ」

真之介は覚えている。

ヌイも、こうしてお手玉をしていた時期があった。

投げる玉の数が多いだけでなく、宙で扱う様も鮮やかだった。

今思えば、素早い動きで長い得物を扱うのだ。

色鮮やかな玉など、自在に操れるはずだ。

「ちいさいの、饅頭を持ってきたぞ」

「おまんじゅう？」

受け取りながらも、包みを眺めている。

上等の菓子屋のものなのだろう。

桐箱などに入っているから、ちづるには何だか解らないのだ。

「母さま、食べてもいい？」

膝の上に菓子折りを置いたまま、尋ねる言葉に真之介は奇異に思う。

「食べ過ぎるんじゃないぞ」

「あ、じゃあ御茶を淹れますね」

いそいそと使用人らしく出て行くいずを見送りながら

真之介は落ち着かないままに座り込む。

「小さいの、なんで母さまなんだ？」

「ちづるは母さまが欲しかったの」

それでは、訳がわからない。

確かに育ての親ではあるだろう。

それが、急に呼び方を替える意味が解らない。

「おい、妖……まさか……」

従姉妹に尋ねても、どうせ解るような説明はしてくれない。

そのくらいには理解している。

だから、恋敵で今も従姉妹に寄り添う人ではない男に尋ねた。

『この女を抱くするには、難儀なコツが要るんだぞ

少しでも間違うと、色事が斬りあいになる。

ヌイは、どうも同じものに思っているとしか思えない』

「いくら疎い私でも、斬りあいと同じに思うわけないだろうが」

いきなり空気の裂ける音がしたが、その腕の棒は妖の手に捕まえられていた。

この従姉妹は、室内でも棒切れを持ち歩く。

ただの棒切れだと思っていたら、気合で骨を砕く腕の持ち主だ。

その目に見えぬ速さの動作を止めたのだ。

「いや、それはないだろう。

俺は知っているぞ。この女は疎いどころじゃあない」

一〇になるか、ならないかというところから、ひたすら想いを告げてきたのだ。

色恋にかけては、並みの男以上に疎いのだと思っている。

「だから、疎いということは認めているだろう。

惚れた相手に、惚れているといわれても解らなかったんだから」
顔色も変えずに、当たり前のことのように言うのは、いかにもこの女らしい。

「俺以外に、ヌイみたいな怖い女に惚れたと言って来るもんかっ」
「だから、人ではないコイツになるだろう？」

確かに他にはいないだろう。

夫婦仲になっていておかしくない時期に、何もないと言い切られて
相手は妖物なのだから、そういうこともありえろと思いついていたのだ。
どうやら、さすがの妖もヌイの疎さには手を焼いたらしい。

「ヌイ……本家を化物屋敷にするのか？」
「気に入らないなら、お前が継げばいいんだ。

私も、ちづるも、流浪生活に慣れている。

水鏡にいたっては人でさえない。追い出せばいい」

それが出来るなら、最初から呼び戻したりはしないのだ。

親類縁者が恐れて近付かないから、真之介は暇を見つけてはこうして様子を見に来ていた。

何もなければ、何もないとはいきれぬ。

それが、こうも堂々と夫婦仲になっていると告げられてしまった。

「まあ、相手が悪すぎたよな……」

扱いきれぬ女だから、いずれ俺が適任だと思っていたんだけどなあ」

「それは世間体だろう。私は知らない」

この従姉妹相手に、世間体など話しても無駄だとは思ふ。

思っても、他に言葉は見つからなかった。

「せめて、他の男なら真剣勝負でも挑むんだけどなあ」

『相手くらいはしても良いが』

何もなかったはずの男の片腕に、見慣れない形の剣が握られていた。

これで、従姉妹と斬り合っている姿は見慣れるほどに見ている。

この従姉妹が、何度も負けを認めているのを聞かされている。

真之介にとって、どうやっても追いつけない従姉妹を

あっさり負けだと認めさせる技量を持つのは

人ではないのだから仕方が無いのかもしれない。

「いや、止めておく。

そんなことをするなら、夜中の池にヌイを嫁にくれと願掛けする」

「阿呆、代償に何を持っていくか解らんからこそその

化物なんだぞ。だいたい夜中に水鏡が出て行くもんか」

素っ気無い返事を従姉妹から返されてしまう。

そのうえ不機嫌そうに顔を背けられる。

「夜中でもなけりゃ、普通は鏡のようにならないだろう？」

『だからこそ、ヌイは悋気を焼いて傍にいるよう言ってくる』

「はあ？」

本来の性質を無視する妖怪より、従姉妹が悋気を焼くなど想像できなかった。

「ヌイが？この女が？」

「真之介、口が過ぎると斬るぞ」

顔を背けたままの、低い声での恫喝。

つくづく恐ろしい女だと思う。

斬ると言い出して、聞き流していたら本当に斬りかかられるのだ。

そんなだから、親類縁者は近付かない。

『そう照れるようなことでもないだろう

いつまでも、子供のように拗ねるなというのに』

「そうそう簡単に変われるもんか」

どう見ても殺気を放つ従姉妹を、照れているのだという妖も、

それも認めているとしか思えない従姉妹の様子にも真之介は、驚くよりも信じられなかった。

そんな会話を聞こえていなかったのか、するりと戸口が開いていずが茶を持ってくる。

「お嬢さん、包みをほどこしましょうか？」

「大丈夫、自分で出来るから。ありがとね」

いずは真之介の家で教わったとおりに客人から茶を置いていく。

どう考えても、ここの主はそういうことを気にしないはずだ。

幼子が、器用に包みを解くのに呆れた。

「いず、此処に慣れてしまっただけで世間の常識を忘れるなよ」

「あたしは.....真之介さまに助けて頂かねば 此処にも来られなかったんです」

ほんのりと頬を染めて言う。

「だから、あれはだな.....」

いずを探そうと思ったのは、この従姉妹に近付きたかったからだ。

武芸の技量だけではない。

生き難い生き方を、何事も無いように歩いていく姿に憧れた。

その背に追いつきたかった。

「理由などいいんです」

そういわれると悪い気はしない。

人助けが出来たと思うと、少しでも良い気分になれる。

「なんだ、いずはウチより分家の方が良かったんじゃないか」

「なんだよ、それ」

詰問のように言葉を放つても、返事はかすかな笑い声だけだ。

この家の当主は、幼子に箱から菓子を取り出す作法を教えるのに忙しいらしい。

きっちり懐紙まで出してくるのだから、本来は女らしくも出来るのだ。

得意は薙刀だが、武道は才があったとしか思えない。

ただ厳しく躰けられて、女の習い事さえ怠っていなかったと知っている。

そんなだから、艶やかな着物でも身のこなしは変わらなかった。

「叶わぬものを思うより、思われていることに気付け。

私は己自信のこととなると疎いが、他人の心の機微には敏いんだ」

「あの、ヌイさま.....」

笑うヌイを止めようと、いずは慌てた。

本当に他人のことには敏いらしい。

「身分違いだとか気にしていたら何も出来ない。

この阿呆は、体当たりでもしないと私を思い続けるに決まってる。

そんなの、迷惑以外のなんでもないから打ち明ければいいんだ」

話しながらも、視線は幼子を見ている。

菓子を食べる作法を教えているのだ。

たしかに、その姿は姉というより母のようだ。

「迷惑は無いだろ？化物相手にしていたって

いつ消えるか解ったもんじゃないじゃないか」

「消えたら探しに行くから構わない」

迷うことなく答えられて戸惑う。

どんなことでも決めてしまったことは、この女は引き返さない。

「第一、その妖は代償を払えば願いを叶える。

下手な人間の約束事より、信じられる」

きっちり畳んだ懐紙に乗せた饅頭を、いずの目の前に差し出す。

どうして良いのか解らずに居ると主は笑っている。

「真之介からだ」

「あ……ありがとうございます」

差し出した両手に乗せる仕草も慣れたものだ。

「使用人に客の土産を渡す主の方がいいだろ

ウチじゃあ、どうしても使用人同士で苛めていたから此処の方がいい」

「なら、頻繁に会いに来てやれ」

無茶を言う。

真之介だって、いずの態度で気付いていた。

それでも想いは、従姉妹にしか向いていない。

此処に来るのは、その片思いの相手に会うためだ。

「とにかく惚れただとか、なんだとか、私に言うのは

もういい加減にしておけ。

言葉で言われても、私は解らないんだ」

立ち上がったと思ったら、元のように人ではない男の傍に座っている。

確かに、それだけ態度で示せるなら言葉などでは通じないのかもしれない。

「妖が、どうやって口説いたんだよ」

『口説いて通じないと、ヌイ自身が言っている』

異質な声を放ちながら、寄り添う女を抱き寄せる。

気にもならないのか、幼子を見ているだけだ。

「なあ、いず……」

「なんででしょうか？」

少し前までは雇い主だったのだ。

今の気安い女主より、どうしても居住まいを正してしまう。

「今度、芝居でも見に行くか？」

「え……？あの……真之介様？」

笑う声が聞こえている。

よりもよって、寄り添った二人が可笑しそうに笑っている。

珍しく騒がしいはずの男が、静かに去っていくのを

気に病んでいたのは、いずだけだった。

「ヌイさま、どうしてなのですか？」

いずは、大の男でさえ言い返せぬような気迫でものを言う主にこの数日『務めだ』と言っては髪結い屋に行かされたり高級な紅を渡されたりして困惑している。

あげく、今日は細工物の櫛まで寄越された。

「真之介が誘っていただろう。

あの男の事だから、女との約束を違えたりはしない」

「そんな.....あのようなことを真に受けてはいません」

この主と、ゆっくり話す機会は少ない。

とにかく屋敷の広い庭のどこかで、あの人ではない男と斬りあいなどしている。

本物の斬りあいなど間近で見たのは、初めてだったから驚いたものだ。

庭にいることが多い兄の小次郎などは、見慣れたと笑っていた。

諍いでもなんでもなく、稽古のようなものらしい。

「いずが真に受けてくれないと、私が困るんだ。

あれは惚けた男だが、決して愚かなわけではない。

今のうちに、私の方から畳み掛けておかないと策を凝らしてくるに決まっている」

話していても、こちらを向くことはない。

今日は偶々、幼子相手に手習いなどをさせていたから話す機会があっただけなのだ。

それなのに、とりつくしまもない。

「いずが考えているように、身分違いだろう。

アレは分家だけど、何しろ本家当主が私だからな。

人付き合いは本家並みに忙しい男だ。

武家などというのは、小難しいことをしたがる。

いずに嫁になれとまではいえない。

そこまで言えば、私が当たり前生きるか

水鏡に願って、代償を払うかになってしまう」

無茶を言っているようで、解っているのだ。

だからこそ、今回は従うことに躊躇いが大きい。

「いずのために言っているんじゃない。

私の勝手に押し付けているんだ。

あの男が私以外に目を向ける機会を作りたいだけだ。

その助力を頼んでいるんだ。

わかるか？

私は、いずの想いを利用しようとしているだけだ」

ようやく向けられた顔は、余りに凜としていて恐ろしかった。

普段が気安く、優しいだけに怖いと思わせられる。

「だからって、あいつを誑し込めとか言うんじゃない。

そういうことで追い払えないから、困っているんだ。

いずが、いずらしく遊んで来たらしいといっている」

「遊び方など.....存じ上げません」

貧しい家で生まれ育った挙句、親の遺した借金のせいで売られた。

いずに遊んでいた時期などないに等しい。

「知らないなら教われればいいんだ。

真之介は、そういうことには長けている」

それはそうだろうと思う。

思っても、気軽に受けられるものでもない。

「芝居など、私も知らないから教えられない」

そういうものには、おおよそ縁が無さそうな主である。

「見世物小屋に売ろうとした馬鹿には出会った。

まだ一三くらいだったかな」

兄からも、以前の主からも聞かされている。

この女主は、最近まで紅い髪をしていたのだと。

「ヌイさまなら、売られはしないでしょう」

「そうだな、腹が立ったから斬り殺した」

同じように売られるような事態になっても差がありすぎる。

女として、代わりになれと言われてもなれるものではない。

「とにかく、いずが嫌だろうと行って貰うし、真之介には迎えに寄越させる。

私が言い出したら、誰も止められないと知っているだろう？」

意地悪く笑顔が向けられる。

困ったことに、本当に止められないのだ。

散々に悩んだ。

悩んだ挙句、あれだけ忠告されていたものを抑えられなかった。

夕餉を運んで、すぐに庭の池の畔に立ってみる。

月が明るい、そっと覗き込むと己の姿が映りこむ。

願わなければいい、相談するだけなら代償は小さいかもしれない。

『そんな場所に行かずとも、部屋にいたろう』

かけられた異質な声に悲鳴を上げようになる。

振り向けば、濡縁に見慣れた妖が座っていた。

「その……お部屋ではヌイさまが……」

『知らぬなら教えておいてやろう。』

願掛けがあって私が出て行けば、ヌイは何をしてきたのか

何を代償として奪ったのかと気にやむ。

そのくせに、何も言わない。

あれは、私に一番近い場所に居るから解っている

私は人ではない。代償は容赦なく持っていく』

月明かりの下で見る美丈夫の目は金の色をしている。

先ほどまで部屋にいたのを見てはいた。

食べても、食べなくても同じなのだというから、いつも食事は運んでいる。

どう見ても主とは夫婦仲なのだから、妖だとしても邪険に扱うことなど出来なかった。

『そんな女だから、あれが聞いていなくても

何処で何をしてきたかを、私は全て話して聞かせる。

そうでもしないと、あの女は気に病んでいることを認められずに

また刃を持ち出してきて解決しようとする。

難儀な癖は直らないものだ』

妖の金の瞳が晒っている。

思っていた以上に、この妖は主を思いやっているらしい。

しかし、それでは己が何を話したかが筒抜けだということだ。

「アタシは、どうしたらいいんでしょう？」

『愚か者になって、ヌイの言いなりになってみたらいい。

考えるより、雇い主の言い付けだと諦めればいい。

思惑が外れれば、次の手を出すだろう。

あれを止めることなど、この私にも不可能だ』

変わった方だとは聞いていた。

しかし、ここまでとは思わなかった。

「脅せば言いなりになるのに、言いつけても聞き入れやしない。

この私に言い返すなど気丈にも程がある」

カラリ……と障子が開く。

いつから居たのだろう。

笑う主は、常の通りに優しげだ。

「悪い癖でな、私は苛々が募ると刃物で解決しようとする。

いずに逃げられたら不便だ」

冗談を言うような主ではない。

ならば、やはり諦めるのが一番なのだろうか。

そして、心と気付く。

妖は助言をくれたのだ。

「あの……」

「早く湯を沸かしてくれ。ちづるが眠ってしまう」

主の背に、あの妖は何も言わないで付いていく。

何故だろう。

代償を支払わねばならないはずだ。

不安になったまま、それでも言い付けどおりに風呂の焚き口へと向かっていった。

金の瞳が晒っている。

「本当に節介が好きな妖物だな」

『私とて、奪われたくないものくらいは有る』

また己の欲で節介を焼いたのか。

そう思っている、それを言う必要も感じない。

ただ、抱くように回される腕に逆らわなかっただけで、

それで構わないような気がしていた。

「お嬢さん、今日は早いな」

「うん、小次郎に会うのに走ってきたの」

小さな身体で息を切らせている。

毎日のようにやってくるが、本当は牛と遊びたいだけなのだ。

何故だか、この幼子は小次郎が自慢にしている牛を気に入っている。

「今日は何かあるのかい？」

習い事でもあるのだろうか。

早くからやってくる日は、大抵は小さいなりに用を抱えている時だ。

「小次郎には、まだ内緒」

「かなわないなあ。母さまからの口止めかい？」

楽しそうに笑う声。

「ないしょ。ちづるは言い付けを守れるもの」

この小さな少女は可愛らしい。

利巧で、我俣を言わぬ子供だと思う。

手のかからない愛らしい子なのに、友の一人も居ないのだ。

こうして牛と遊んでいるくらいしか相手もない。

「父さまは？」

「池の中」

これが、この少女の異質さだ。

いくら幼くても、池の中に人がいるはずがないと知っているはずだ。

しかし、実際に少女の父親は池の中に居ることが多い。

そういう類の妖なのだそう。

「お嬢さんは、将来に苦労しそうだよなあ」

そんな他愛のない話をしていると、玄関のほうから人がやってくる。

この屋敷に来るものなど他に居ないから、すぐに解った。

「真之介様、御用でしょうか」

「小次郎……こんなところ、用がなければ普通は誰も来ないぞ」

何故だか、今日は元気がないように思える。

常にも増して、上等の衣装だというのに沈んだ表情だ。

「どうされたのかな……」

「もうすぐ解る」

どうやら少女は知って居るらしい。

それでも尋ねることはしなかった。

意外にも、小さいながらも口は堅いのだ。

大屋敷へと入っていく姿を見送りながら小次郎は、庭の草刈を始めることにした。

荒れ放題の庭の草は、小さな少女の背丈ほどにも伸びたままだ。

これでは化物屋敷といわれても仕方が無い。

小次郎は、あの女主に恩を感じているのだった。

「だから、早く観念して練習しておけばいいものを」

「申し訳ありません」

こうなれば、謝るくらいしか出来ない。

まさか衣装まで着付けられると思わなかった。

以前から、この女主が着もしないような衣装を持っていることは知っていた。

なにしろ着古しを頂こうと思ったら豪華な衣装ばかりで困ったのだ。

どうして普段から、男のような格好しかしないのかが不思議になってくる。

「私の衣装は、どれも重いんだよ。慣れていないと疲れるぞ」

邪魔臭そうにいうが、上等の生地なのだから重いのも解る。

こんな高価なものを着たのは初めてだ。

「どうせ私は着ないんだから、着潰してくれていいからな」

先ほどから背に回って帯を結ばれているが

この主は、着もしないのに着付けることまで出来るのは何故なのだろう。

紅梅に鶴が戯れる絵が豪華に描かれている振袖

松竹梅を織柄にした桜色の帯は、豪商の娘などの間で流行り始めた

変わり結びにされている。

いったい、いつの間に覚えるのだろう。

本人は、いつ見ても袴姿で動き回っているというのに。

「こんな上等のものを着潰すわけには行きません……」

二度と着ることすらないだろう。

「どうせ着ないといっただろう。」

私が着たら血で汚す程度の事はありえるんだ。

それに袖を振る必要もないしなあ」

「やはり他の方に惹かれることはないのですか？」

長い振りで異性の気を引くなどということはしなくとも

この主は、黙って立っていれば十分に気を引ける。

それなのに、選んだ相手が人ではないのだ。

いずには理解の出来ないことばかりである。

「水鏡のことなら訊いてくれるな。

見ていれば解るじゃあないか」

それは解っている。

解るからこそ、尋ねてみたのだ。

「いい加減、入ってきて構わないぞ」

いずの衣装換えを終えて、すぐに声を障子の向こうにかける。

そろりと隙間が開いて、覗いてくる。

「何をしているんだ。入って良いとっているだろう」

「真之介様……」

決まり悪そうに入ってくる姿は、やはり元気がない。

それでも、着飾ったいずには驚いたのだろう。

呆けたように見つめている。

「千鶴……」

「その名の女は死んだだろう」

つまらない反応に他の着物を選ぶべきだったと悔やむ。

いずの幸薄い女の美しさに、たまたま顔移りが良かったのだ。

「あ、いや……すまない。

見違えるほどなんだよ、いずだと思えなくてさ」

「馬子にも衣装と申しますから……」

恥ずかしげに、それでいて寂しそうな声のいずに真之介が慌てている。

「いや、そんなことはない。うん、こんな化物屋敷にいるからいけないんだ。

ヌイ、今日は一日かりるからな」

逃げるように背を向けて、それでも、いずの手をしっかりと引いている。

「いず、骨休めだ。遊んで来い」

骨休めになどなりそうにないと思いつつも

雇い主に言い返す術もなく、いずは手を引かれていた。

恋慕い続けた相手は、どんな気持ちでこの手を引いてくれているのだろう。

屋敷の玄関に向かってみると、草刈をしている兄が見える。

どうやら背の高い草を刈るのに夢中で、こちらに気付く様子も無い。

こんな姿を見られずに良かった……

そんな風に思っていると、見慣れた牛と戯れる幼子がいる。

ふりむいた少女は、笑って手を振っている。

「小さいの、また来る」

「ゆっくりとしていらしてね。いず」

真之介がかけた言葉に、少女はいずに向かって答えを返した。

—何処に、こんなに人が居たのだろう—

真之介に連れられて、にぎわった町へと出かけたものの

いずには、驚くことばかりだった。

そう大きな町ではない……真之介は、いつもそういう。

それでも、この人の多さはなんだろう。

呼び込みの音が、あちらこちらと聞こえて騒がしい。

その人ばかりの中を、すいすいと歩く真之介に驚く。

「あ……あの、真之介さまっ」

慣れない衣装で歩くには辛かった。

着け慣れていない重い帯が崩れるのではと怖くなる。

「ああ、すまん、すまん」

繋がれた手は、赤くなっていた。

明るい笑顔で振り返られて、頬まで赤くなったことには本人は気付かない。

「何しろ正月だ。

人が多いのは解っていたんだが、こんなときだけの見世物もあるんだよ」

「お正月……？」

思えば暦など長い間見ていない。

毎日の空模様だけで暮らしてきた。

「そら、もう世間の常識を忘れかけている。

あの屋敷に居ると、盆も正月もないから気付かなかったんだろう？」

からかうような口調で言われたが、本当にそうだと思う。

あの家では、正月だからと仕事が増えるわけでもない。

ただ……思えば、衣装の柄は正月のものだ。

あの主は、何もしないだけで世間を知らぬわけではないのだ。

思わず長い振りに描かれた鶴の絵に見惚れる。

その絵柄を、真之介も見つめていることに気付いて不思議に思う。

「真之介さま、この衣装に思い入れがあるのでございますか？」

「うん……まあ、あるといえばあるな」

少し人だかりの少ない場所へと移動すると

茶屋の軒先に座って、善哉などを頼んでいる。

「あの本家には、昔『千鶴』という名の従姉妹が居たんだ。

今のちいさいのじゃなくって、千の鶴と書く」

早々に運ばれてきた、二人分の善哉を真之介は、いずに勧めながら箸を手にとった。

「千鶴の母君は俺も覚えていないくらいに早くに亡くなられたが

一人娘のために、衣装を沢山用意したらしいんだ。

衣装贅沢な方だったのだろうか

その名にかけて、どの衣装にも鶴の絵柄が入っている。

だから、それは千鶴の正月用に作った衣装なんだなって思った」

遠く空を見上げて、思い出話をする姿は何処か悲しそうだ。

そんな大層な謂れの有る衣装と知っていたら

もっと断りきれていたかもしれないと後悔が立つ。

「ヌイさまは、何故……」

「あいつのことだから、いずに似合うと思った程度だよ。

実際、千鶴より似合うと思うぞ。うん」

明るい声を立てて笑う。

その笑顔さえ、寂しそうに思えてならない。

「ヌイが言っていたらろう。

千鶴という名の女は、一三のときに居なくなった。

十三参りを済ませた翌年だったよ……墓も、この近くの寺にある」

それで先ほどから、寂しそうなのだろうか。

「千鶴を忘れるというヌイからの忠告だと俺は思っている。

もう何処を探しても、あの千鶴は居ないんだ。

過去を悔やむことを嫌った千鶴が思われ続けて、喜ぶはずは無いんだよな」

真之介の思い人は、あの女主ではなかったのか？

ふと湧いた疑問に気付いたのか、真之介は照れたように笑う。

「この町に長く住む者なら、皆気付いてて知らぬ振りをしているんだ。

ヌイは、養女で本家の跡取りだ。

あんな若い女が、仮にも地方で一番といわれた武家の本家当主だ。

おかしいだろう？」

そうなのだろうか？

武家の仕来りなど何も知らない。

ただ主の腕なら、おかしくないと思えた。

「千鶴は、特別に誂えた薙刀を持っていた。

俺は刀ばっかだから、相手をしてもらう時は木刀だ。

それが、一度も勝てなかったよ。

一〇になった頃には、気合で俺の木刀を叩ききりやがった。

そんな才のある女、そうそういると思うか？」

「ヌイさまなのですか？」

思わず身を乗り出した指先が、善哉の置かれた盆に触れる。

衣装を汚すのが怖くて触ることも出来ないのだ。

「ヌイは、ヌイなんだよ。

そうでなければあ、千鶴のものを全て忘れ去ったりするものか」

忘れ去ったもの……だから、着潰して良いと言われたのだろうか。

違うということになっているだけで、同じ方なのだ。

この美しい衣装は、あの主のものだが違う方のものなのだ。

「ヌイさまの優しさは、恐ろしさと隣り合わせです。

あたしみたいな女に、ここまでしてくださる意味が解りません」

「そりゃあ、気に入られたからだろ？」

当たり前のことのように答えながら、冷めかけた善哉を睨っている。

「あんなのに、気に入られたら恐ろしいことにも合うさ」

恐ろしいこと……

あの主より、その存在そのものが恐ろしいものが、あの主の傍には居るのだ。

あの助言への代償は、もう支払えているのだろうか……

障子の破れが目立ってきた。

さすがに外へと通じる場所だけは、その都度に間に合わせの修理をしても

屋内だけでもなると、ヌイにしてみれば衝立のようなものだ。

それでも、この状態を常としていいものかと思ひ悩む。

障子などに向かって座り込んでいたら、すぐ隣に男が現れた。

何を考えているのか、妖のくせに松竹梅の枝を手折ってきたようだ。

「我が家に目出度いことなど何もないぞ」

『数百年と生きてきて、やっと娶る相手が出来たというのに

めでたいことではないとヌイは思っているのか？』

娶られたという意識は無い。

ただ相手が人であったなら、祝いの一つでもしなくてはいけないのだろうとは思っている。

夜毎に肌を重ねていて、何ら祝いなどしないのは相手が妖だからにすぎない。

「つくづく解らぬ妖だな、水鏡」

手渡された枝を広げていく。

まだ固い蕾の梅の花が、紅白と揃えられていて可笑しくなる。

「あとで、ちづるに活け方を教えようか」

ヌイは幼い頃に僧侶から華道を学んだ。

だから、妖などが持つてくることを可笑しく思ったのだ。

『ヌイ、ちづるを当たり前前に育てたいと言いつつ
流浪の中でも、茶碗の持ち方まで教えていたではないか』
「生憎と私は、己ほどに教え込むつもりがないだけだ」
もう教えることはないと言われなければ満足出来なかった。
道を究めるにはヌイの当たり前前の生活は短すぎた。
中途半端なままの習い事の数々は、死んだ千鶴と共に眠っている。
半端なままなものを教えているだけなのだから
ちづるには、たしなみ程度でいいのだと思いながら教えるのだ。
「そういえば、お前……数百年と生きているのか？」
『今さらに尋ねることではないだろう』
確かに尋ねるなら、もっと早くに尋ねるべきことだ。
それでもヌイは思考するように焦点の合わぬ目をさまよわせる。
「数百と生きてきて、人でしかない私を選んだのは何故だ」
ヌイの知る限り、この妖は願われると断りはしない。
水鏡の中で優先順位はあるようだが、基本的には願いは代償と共に叶えられる。
義母との間に子を作るくらいだから、てっきり夫婦仲の相手が
過去にも居たものと思い込んでいた。
『ヌイが人であることが間違いではないかと昨今は感じている』
「化物に化物呼ばわりされたくはないぞ」
化物だの、鬼だのと、恐れられることには慣れている。
しかし水鏡は、本物の妖だ。
聞き流せずに言い返しても、相変わらずに金色の瞳が晒う。
『その化物に惚れているのは否定できまい』
「水鏡に惚れる女なら珍しくはないだろう。
お義母さまだってそうだったじゃないか。お前は女を誑かすんだ」
否定などする気はなくしている。
ただ己だけが特別のように言われることには反感があった。
『心弱った女が誰でも良いと縋ってくるだけだ。
必ずといっていいほどに願いを叶えてやれば涙を流す。
ヌイは幼子の頃から縋る事など好まなかった。
だから、どんなに想っても話すことすら叶わぬと諦めていた』
「お前、暇潰しだとか言って私と斬りあったのは、実は気を惹くためだったのか？」
可笑しげに人ではない男が笑っている。
ヌイは人の心の機微には敏いが、妖の水鏡のこととなると
今ひとつ解らないままで過ごしている。
『惹いたつもりが、まるで自覚しないまま年頃になってしまって
ヌイの疎さには、ほとほとに手を焼いた』
疎いことは承知している。
しかし、実に巧く手を選ぶものだと感心してしまう。
水鏡に惹かれたのは、最初はその剣を振るう技量だ。
未だに、あの重い剣を自在に扱う技量には憧れている。
池から現れた妖しいものに斬りかかれて惚れるなど普通は思いつかない。
思いつかないだろうが、ヌイはそうして惹かれていった。
ずっと解らなかつた惹かれる理由も、考えてみれば簡単なことだった。
「やはり水鏡は、女を誑かすことに慣れているとしか思えない」
『誑かしてなどいない。願いを叶えるだけだ』

本気なのか、冗談なのかもわからない。

言っている事は間違いではないのだ。

しかし……その結果、この妖は誑かしたも同然になっていると解っているはずだ。

「話を逸らかすのも、たいがいにしてくれ。

それだけ手を焼くような私の傍に居るのは何故だ」

『他に居ないからに決まっているだろう』

どれだけ問いかけても、本音など言わぬつもりらしい。

妖相手に、押し問答などしていても仕方が無い。

さらりと立ち上がると、小間物入れの中から鋏を持ち出してきた。

手折っただけの枝に一つ一つに手を加える。

小ぶりの緑の葉が鮮やかな松の枝振りを活かしたく思いながら

鋏は迷い無く入れられていく。

「花器など長らく見ても居ないな……何処へ仕舞ったのやら」

はじめに見たときから鋏を入れる位置は決めている。

ヌイの華道への道は、迷わぬことを目指した。

武家の跡取り娘らしいと指南してくれた僧は笑っていたものだ。

その日、いずが帰ってきたときには

珍しく玄関に正月らしい花が活けられていた。

—まつうちに 背たけは伸びて 花ほころびぬ—

—白きことをも満ち足るときに—

二枚の短冊に書かれた流麗な文字。

歌の意味など解らずとも、見慣れぬ筆跡は妖のものだろう。

歌い繋いだのが、女主だということだけは解る。

見慣れた女らしい流麗な文字だ。

花を活けたのは、幼い少女だと聞かされて、少しばかり驚く。

「華道くらいはと少々、教えたに過ぎない」

いつものように女主は素っ気無く返事を返してきた。

真之介と過ごした時間は、ひたすら居なくなった『千鶴』という

今の女主の過去が語られ続けた。

昨日までならば、女主が花を活けることが出来るなど想像できなかった。

教えられた『千鶴』なる少女は、厳しい躰を受けた武家の娘だったという。

今の気安い主は、かつてはそうした少女だったのだ。

思い人は、叶わぬ恋をしている。

解っていても諦められぬことくらい、己自身がそうだから、それはよく解った。

それでも歌などを読み合うような二人の仲は何処から見ても、既に睦まじい夫婦だ。

妖などが住まう屋敷だというのに、ひどく居心地がいい。

城と妖

—城内に現れし怪しのもの、討伐をされたし—

桜が散り始めていた。

そんな、うららかな日に届けられた文は

普段なら来ることなどない上の方からのものだった。

「城に出るといふ噂は聞かないなあ」

ふらりと遊びに来ていた真之介でさえ知らない噂。

だが、こんなものが来るということは

以前の化物退治を真之介が解決したことになっている意味がない。

「真之介の方には何も？」

「そりゃあ、本家に寄越す方が筋だろ？」

確かに本家ではあるのだが。

近辺の分家などの親戚付き合いは、全て真之介に押し付けている。

本家だからといって、何かをしているわけではない。

「どうせ、疑われているんだよ。

此処に本物の化物が住み着いているのは有名な話だ」

「それだけなら構わないんだがな。

いずれにしても断る余地も無いのだから、出向くしかないな」

他のことならともかく、討伐だというなら話は簡単だ。

ただ、それだけだとも思えなくてヌイは気が塞ぐ。

「城には池くらいあるぞ？」

案外、本当にその妖の仕業なんじゃあないのか？」

「水鏡が何処で何をしてきたかは知っている」

その話の本人は、聞いているのかいないのか

ヌイの背に寄り添って目を閉じている。

こうしていると、ただの人間にしか見えないから厄介だ。

幼い頃から従姉妹は美しかった。

最近は、口調も態度も男のようなままなのに

何処か色香が漂って、つい見惚れるような美しい女だ。

その傍にいて似合うと思わせるような美丈夫が

人ではないから、真之介は納得が出来ない。

「妖、本当に城に行ったことはないのか？」

『最後に呼ばれて出向いたのが一五〇年ほど前になるが』

それは出入りしていたことには違いないだろうが今回の件に関係があるとは思えない。

「水鏡、そのときの願掛けをした相手と願いはなんだ」

『ヌイは悟気をやきすぎだ』

妖の言葉が終わる前に空気を裂く音だけが聞こえる。

従姉妹が持ち歩いている棒切れが宙で受け止められていた。

この二人の動きは、見えないほどに早い。

『城の跡目継ぎ争いに加担しただけだ。』

結局、あの男は己の力不足で死に至った。

あの男が記していたなら、私のことも記録されているかも知れぬ』

「ならば城には付いてくるな」

晒う妖の声に、不機嫌そうに返す。

『その身の傍に、この身を置けという願いを受けたのはヌイだ』

「ならば、勝手にしていればいい」
呆れたことに、そのまま城からの書簡に目を通す従姉妹の首筋などに唇を這わせて抱き寄せている。
この妖は、妖なのだから人目も気にしない。
問題なのは、そんなことをされて気にしない従姉妹だ。
さすがに目のやり場に困って、意味も無く庭などを見る。
今日も小次郎が草を抜いている。
池の傍だけが以前のままなのは、ヌイが近付けさせないからだ。
うっかりと水面が波立たぬほどの水鏡になったときに
声をかければ、この家に住まう妖は節介を焼きに出向く。
それゆえ『水鏡』と名乗るのだということも知っている。
かけられた言葉は、願いだと受け止められて勝手に叶えられる。
叶えば、相応の代償を持っていくという奇妙な妖だ。
「なあ、そこの化物。
その一五〇年ほど前とかの願いに代償は取ったんだろう？」
『領内に私の妻を用意させた』
「はあ？じゃあ、今のヌイとの関係はなんなんだよ」
思わず頓狂な声を上げて振り向く。
二人は顔色も変えずに、先ほどと同じ姿勢のままだった。
『用意させただけだ。
どれも気に入らぬから、姿も見せずに終わっている』
「気にいらなかったって、お前は妖のくせに
人の女の良し悪しを選び好みするのか？
だいたい、どうして人の女を求めるんだよ。
化物同士で仲良くしていりゃあいいだろう？」
言葉は立て続けに出てくる。
常日頃から機会があれば言ってやろうと思っていたのだ。
『人が思うほど、人外のもの同士というのは互いに関わらないものだ』
「見越し入道の女房が、ろくろ首だとか……」
「真之介、そんな戯言ばかりの黄表紙まで読んでいるのか？」
ついと顔をあげて、説教のように言ってくるが
知っているということは従姉妹自身も読んだということになるのではないのか。
「あの手のものは、水鏡が買ってくる。
ちづるにまで読ませるから、先日も取り上げたばかりだ」
「どうして化物が、化物の物語を買って来るんだよ」
真之介の大きな声に笑っているのは、たまたま茶を運んできたはずだけだ。
先日、なんとなく手土産代わりにと持っていった玉簪を
ちゃんと付けているのが解って、照れくさくて仕方が無い。
「ヌイさまが取り上げたものを、また兄が喜んで読むのですから
水鏡さまは、お優しい方だと思いますけれど」
「いず、しっかりしろ。これは、化物なんだぞ？」
そんなことは言われなくても解りきっている。
正月の代償の事だって、あまりに気に病んでいたら
主に気付かれて、全て教えてもらった。
この妖は、あのとき代償を持っていかなかったのだ。
あえていうなら支払ったのは主ということになる。

「真之介、いずと騒ぐなら離れでも貸してやる。

私は城に向くから、留守の間は勝手にして良い」

「いや、離れて……」

赤くなって戸惑うのを良いことに、そのまま立ち去っていく。

ヌイとて上からの呼び出しともなれば放っておけないのだ。

日付が指定されていないのだから、すぐに行くべきだろう。

さすがに日頃のままというわけにも行かず

萌黄色の色無地に家紋を染め抜いた長着と

青鈍色の袴姿で袋にいれた愛用の薙刀を持つ。

白い足袋に、白い半衿、そして髪は白い布で纏めただけだ。

決して礼装などではないのだが、ヌイとしては精一杯の譲歩だ。

いつ戦闘になるかも解らないのに女としての正装など出来ない。

出かける前に牛小屋によると、小さな少女が牛と戯れている。

「ちづる、留守番を頼んだぞ」

「母さま……また、危ないところへ行かれるの？」

駆け寄ってくる幼子の頭を撫でながら、不安にさせまいと思う。

「お城に招かれただけだ。良い子で待っていなさい」

「父さまは行かれないの？」

最近、すっかり両親扱いをされていて可笑しくなる。

育てたのは己一人だが、血の繋がりはない。

それでも愛しくて仕方の無い幼子だ。

「水鏡は勝手にするらしいから、私にも解りかねる」

「なら、きっと御一緒なのね」

安心したように微笑みが浮かんだ。

それで気が済むのなら、何も言わずにおこうと決める。

「何かあったら、小次郎にでも頼みなさい」

「はい、行ってらっしゃい。母さま」

本当は不安なのだろうに、あの娘は何も言わない。

我侬を言うなど言った覚えなどない。

ただ流浪生活の中で、斬り合いなどを目の前で見て育った。

この腕を頼りに生き延びた小さな命だ。

ちづるは、決してヌイが危険な場所に行こうとしても止めない。

案じて、そして案じていることさえ口に出さぬよう心がけている。

幼いくせに気丈なところは、己が育てたのだから

仕方が無いのかと諦めはじめているくらいだ。

城の前まで来ただけで、門番の様子が変わる。

どうやら、ヌイの外見は知れ渡っているようだ。

それでも、寄越された文を取り出して見せる。

「筑後家当主、ヌイだ。城内に現れるという化け物退治に参った」

白い顔に浮かぶ笑み。

その般若の面のような笑みに門番は、何も言わずに通す。

筑後家の本家当主が化物に関わっているのは有名な話だ。

とはいっても、当のヌイ自身は何年も前に一度は捨てた姓を名乗ることなどない。

このような場所でもなければ、ヌイはヌイでしかないと思っている。

案内されて通された部屋には、既に幾人かの者がいる。

上座に向かって真っ直ぐに進み、最敬礼を示す。

畳を見ながらでも周囲の気配を伺うことは怠らない。

「筑後ヌイでございます」

有り難くも無いが、躡けられた姿勢は覚えている。

これだけの状態からでも、隙がないからこそその本家当主だ。

「ご家老様、筑後の者を呼ぶなど不謹慎なのは……」

囁くように声は潜められているが、全て聞こえている。

城内の取り巻きなど名も知らぬ。

だが、あちらは知り尽くしているようだ。

「毒を持って、毒を制するというであろう。」

筑後殿ならば怪しいものに詳しいはずではないか。

そうであろう？」

「否定はいたしません……」

呼びかけられたのだからと、顔を上げて真正面の男を見据える。

ふ……と浮かぶ笑みは、愛想笑いとは程遠い。

「私は化け物退治に参った。それ以上に何か御用があるのでしょうか」

周囲にざわめきが走る。

不謹慎な態度だということは承知の上だ。

「ならば遠慮なく訊かせてもらう。」

文に書き付けた怪しきもの、夜毎に城内の松の木に現れる。

丁度、殿様の御寝所から見えるような場所である。

放置するわけに行かず、早々に手を打ちたいのだ」

なるほど、急いで片付けたいから体裁もなくなったということか。

「その姿を見たという者は、どんな姿だったと言うのです？」

「青白い姿の女に見えたということだ」

誰からの言葉からも聞かされない。

「最初に見たのは、いつになりますか」

「もうひと月は経過しておる」

ひと月も夜毎に見えるのならば、騒ぎにもなるだろう。

推測するならば、身に覚えがあるからこそ恐れるのだ。

「その怪しいものを斬れと仰るのですか」

「相手は宙を舞うような動きをするらしい」

宙を舞おうが、実体があるなら斬れる。

問題は斬って意味があるかどうかだ。

水鏡などは、人の刃では胴を貫いても意に介さぬのだ。

「当然、祈祷などはされたのでしょうか。」

此処にいる方々にも祈祷師、占い師、医家まで揃っている。

それでいて、私を呼ぶというなら斬るしかないとなりましたか」

揃ったものたちを無能呼ばわりしたも同然の言葉だ。

静かに怒りを抑える気配だけはわかる。

ヌイの笑みが消えない。

下座から見上げてくる目は、晒っている。

「水鏡、その女に覚えはあるか？」

ふいの言葉に周囲が戸惑う。

女の背には、寄り添うように美丈夫が座っていた。

「化物！」

立ち上がる人々を制する気配は無い。

どうせ、水鏡は人では斬れない。

「それが噂の筑後殿の婿殿か……」

「婿かどうかは知らぬが、私に付きまとう妖といえはコレだろう。

ご家老、本当に退治する気があるならコレは役に立つ」

既に刀に手をかけていた周囲のものも、その平常さに毒気を抜かれる。

「斬りあいでもしたいなら、水鏡は相手をするだろう？

いくらでも斬りかかってみたらいい。

人ならぬものとは、こういうもののことをいうのだ」

『ヌイ、私は話をするために現れただけだ。

お前以外の、しかも男などと斬りあっても面白くも無い』

つまらなそうな妖の声は、実に聞き慣れない異質な声だ。

「家を取り潰されておかしくないだけのことを平然と行うからこそ、私は呼ばれたと思っている。

私に何を望まれる」

晒う顔は美しい女のものだ。

凛々しく髪を纏めているとはいっても、その姿は美しい。

それなのに、周囲の者たちは嫌な冷たい汗が止まらなかった。

「家を潰すなど、我らは望んではない。

その怪しいものが役に立つというなら、話も聞こう」

さすがに体裁もあるのか、それとも本当に家老としての技量があるのか

額の汗を拭いたあとは、常の声で話しかけてくる。

それを水鏡は可笑しそうに晒っている。

『私が知る女なら、ひと月前に自害した。

寵愛を貰えないと嘆くから、願いを叶えた。

代償に奪ったものはコレだ』

上座に向けて投げる小さな布。

かすかに漂う香りに、それが匂袋だと誰もがわかる。

慌てて拾った者が家老の手に渡している。

「御寵愛の代償が、そんなものとは……

やはり化物は化物。

釣り合いというものを知らぬのだな」

何処の誰とも知らない家臣の一人らしき男の呟きを、ヌイも水鏡も晒って聞き流す。

水鏡の奪うものは、相応のものなのだ。

少なくとも、奪われた本人は相応のものを奪われたと感じる。

そうでなければ、ただ便利な妖怪になってしまう。

「筑後殿……これは……」

顔色を変えているのは、家老だけだ。

「すまぬが、集まっていたあなた方々はお引取り願いたい。

たった今、見たこと、聞いたこと、全て話すことを禁じる。

話せば、死に値すると思っただきたい」

その声が、僅かに震えている。

戸惑う人々を、気にもしていないように見えるのは

事の発端を起こした者たちだけだ。

「さあ！早う立ち去れい」

青い顔になった家老の叫び声に、訳も解らぬままに

人々は出て行く。

残ろうとする家臣にでさえ、去れという合図をしている。

廊下に行く人々の足音が遠ざかっていく。
広い部屋に残されたのは、三人……いや、一人は人ではない。
その人でない男は、上座も下座も関係なく女の背に背を預けてくつろいでいる。
「あれは、叶えるのに苦労していたのではなかったか？」
『人の心のさまを変えるなど、本来は私の領域ではない。
それだけに私なりに知力を尽くした』
ならば代償は大きいはずだ。
水鏡が、どれだけ知力を尽くしても所詮は人の願いだ。
この妖に縋って幸福になれるとは、ヌイは欠片も思えない。
「筑後殿、その怪しき者の行いを把握しているのか？」
「周囲に『婿』などと思われるような間柄なのだから
この妖は、私に全てを話す」
人の夫婦でも秘密の一つや二つはあるものだ。
ないということが、人でない故なのだろうか。
「それを見るだけで、現れるものに覚えがおありの様だ。
ご家老、本当に私が斬って済むことなのか？」
苦悶の表情を浮かべたまま、視線を落としている。
手のひらの中の、小さな布袋。
そんなもの一つで、態度は急変した。
『中を開けてみるといい。
私以外が持っているは、性質の悪いものだ判断している』
化物の異質な声に急かされて、震える指先で中を開ける。
瞬間に強く香りが広がる。
その中には小さな紙切れが入っていた。
—枕女と呼ばれしことを—
歪んで滲んだ文字は、女の手によるものだろう。
性質の悪いものとは、よく言ったものだ。
入れられた匂袋には城主の家紋が入っている。
こんなものを贈られたら、女は娶られたと思うに決まっている。
その女に、枕女と呼んだのなら戯れであっても女は悲しむ。
拳句に身を投げたということだろうか。
「殿が、急に気に入ったと抱えた女は多くはない。
これだけのものを持っていたなら、なおさらだ」
「だから、訊ねている。
私は化物退治に来たのだ。
いくら上の方だからと言われても、己の女の後始末
女の私が付けてもいいのかと訊いているのだ」
ふと、我に返ったように家老が顔をあげる。
「そうだな……筑後殿は女であったのだな……」
そういう問題ではない。
ヌイは苛立たしくて仕方がない。
本来、己の女の始末くらい他人任せにするなといたいのを
少しは遠慮しただけに過ぎないのだ。
「しかし、考え直せば事の発端を起こしたのは水鏡だ。
お前が、己の領域を越えてまで節介を焼くからいけない。
他人の色恋に手出しをするほど、暇なのか？」

既に背の妖に向けて放つ殺気は本物だ。
手にした得物も、いつ袋から取り出しても不思議ではない。
『ヌイ、そういう話は帰ってから聞く。
思い通りにならぬと刃を抜く癖は、私に対してだけなのだ』
「お前には、いつか勝ってやるっ」
犬も食わぬという喧嘩のはずなのだが
目の前の二人の場合は、どうにも異質だ。
殺気を放つ女を嗜める妖……
しかも、この女の腕前は有名だ。
「その……筑後殿……今回のこと、引き受けてはくれないのか」
あまりに奇異な二人に、家老は不安を隠せない。
ひと月もの間、なにもしていなかったわけではない。
考えられるだけの手を打ち、それでも何も解決はしなかった。
それが、あっさりとした怪しきものの正体を教えられてしまった。
筑後家の当主は、妖魔に魅入られた美女だと聞いていたが
実際に会ってみれば、そのようなものではないと解る。
「私でなければ、この件は治まらないだろう。
我が家の妖が発端なのだから、私が始末をつけるのは筋だ」
『また要らぬ事に関わるのか、ヌイ』
「要らぬことなどではないっ水鏡が悪いんだ。
今宵は、お前にも手伝ってもらおうからな」
呆れるほどに妖物相手に親しげに話す。
これでは『婿』だと噂されても仕方がない。
「それでは今宵、早速に退治していただけるのか」
期待は大きい。
思わず声も弾む。
「退治というと気が引けるな。
哀れな女の死霊であろうに」
何も無いはずの天井などに視線を移す姿は
やはり間違いのない美しい女なのだ。
それなのに、話しているだけで気圧されて女だという事を失念する。
「ご家老、あれは私への警戒か？」
突然の問いに戸惑う。
視線は天井を向いたままだ。
細められた目が、静かに笑みを浮かべる。
「少々、失礼を致すがご容赦願う！」
聞こえた時には目の前には誰も居なかった。
視界の端を過ぎる青鈍色。
—タン—
短い音が聞こえて、木の欠片が降ってくる。
続いて、鈍い音と共に落ちてきたのは見知らぬ男だった。
「筑後殿……？」
その背に石突を当てて、片足で首を押さえているが
どう見ても、既に意識などあるとは思えない。
何が起こったのかも解らないまま、ただ噂通りの腕前を
見せ付けられて唖然とするしかなかった。

「この話、外に漏らせば死に値すると仰ったのはご家老であろう。
ならば、盗み聞きしたものは見逃してはいけない」
男の何処にも斬られた様子などはなかった。
それでも意識を失っているのだ。
「これが、筑後殿の腕前か」
「少々、天井板が壊れてしまったが……
人一人を落とすには、致し方がなかった」
まるで見当違いの返答。
天井板のことなど気にする余裕はなかった。
いくら動きが速いといっても、そこは人のすること。
所詮は女が、女として薙刀などを振るうだけだと
多くのもの思うように、城の中でもそれは常識だ。
だが、今見たものは違う。
視線を外した気もなく、気付いた時には男が降ってきた。
その距離、その高さ、どう考えても尋常ではない。
「ご家老、これに覚えがあたりか？」
不審者とはいえ、足で踏みつけたままで問うてくる。
「いや……記憶にはない顔だが」
そもそも追い出した者以外が、何故潜んでくるのか
それ自体が不思議に思えた。
「水鏡、これを如何したらいい？」
不謹慎なほどに愉しそうな声を出す。
呼びかけられて、一度は消えていた妖が再び姿を見せる。
「水牢にでも入れておけば良いだろう」
「どうして水牢なんだ？」
つくづく水が好きなの妖物だな、水鏡……まさか正体は河童などと言い出すなよ？」
ふざけている様な口調で話しながら、踏みつけていた男の衣装を探る。
何も出てこないと解ると、するりと気を失った男の帯を解いて
手足を縛り付けてしまった。
普段から馬乗り袴を身につけるヌイにしてみたら男が帯を解いた程度で衣服に乱れはないと知っている。
『河童だったら、今さら如何にかするのかわか？』
「ちづるが可哀想だと思っただけだ」
ヌイが男を扱う様子は慣れている。
知られていないだけで、赤い髪になった千鶴はヌイと名乗り赤子を連れて流浪の旅に出た。
十三になって間もない頃の少女が赤子など連れて歩けば襲われる。
赤い髪は、見世物になると好奇の目に晒された。
襲われれば、迷わず刃を抜く。
十三で既に少女と思えぬ腕を持っていた。
得意の薙刀があれば、殺さずとも簡単に倒せる。
路銀は、そうして稼いだのだ。
見栄も何もなかった。
武家の跡取り娘として躰けられたものは、かなぐり捨ててきた。
その結果が、本家当主となってしまった今のヌイだ。
武家の見栄など知っていて無視をする。
此処が城内だと言うことだけを気に留めているだけなのだ。
「着ているものは、紋もないが安いものではない。

顔を隠しもせず天井裏に上るなど素人もいいところだ。

埃で咳き込み、私に気付かれたが……

水鏡、お前なら先を越すだろう？」

咳き込んだ声など聞こえた覚えはない。

確かに男の衣装は埃まみれだが、気付く方が珍しい。

『ヌイ、そういうときは素直に教えてくれと言えば良いだろう。』

その男の素性、事情、何が知りたい？』

異質な声は、やはり化物なのだ。

知りえるはずのないことを、知っていて当然のように言う。

「知りたいのは私ではない。だから、代償を奪うはずのことは問えない。

私が支払ってすむものなら、話してくれ」

思わぬ言葉に驚き、反射的に身体を浮かしていた。

ゆっくりと笑う白い顔が向けられる。

「何を驚いていらっしゃるのか。ご家老」

「代償とは……」

筑後殿が支払うというのは、いったい……」

先ほど、この化物が奪った代償なるものを見せられたばかりだ。

「この妖は、願いをかなえると相応の代償を奪う。

私から奪うのなら構わないといっている。

今回のこと、元をたどれば水鏡が悪い。

それでも妖であるかぎり、性質までは変えられぬ。

代償は何を奪う？」

先ほどから、まるで睦まじい夫婦のようだとばかり思っていたら

女は相手が妖だと理解したうえで、その間柄を保っているというのか。

『ヌイが支払ってすむ話ではないが……』

ヌイが支払うと言い出したのは、私を思うからだろう？

話の根源が私にあるなら、私に害が及ぶ。

私は構わないが、我が家の平穏が崩れる』

「解っているなら、話してくれたらいいだろう」

笑顔のまま刃を向ける相手は、人ではない。

『話さずとも、水牢に入れれば吐露する』

女の向ける刃を素手で除けて、金の瞳が晒っている。

「少しばかり甘えてやったのに、先を言いすぎだ。

この男、水に弱いのだな？

それですむなら、こんなものの始末は私の役目ではない」

気を失い、手足を縛られた男を蹴り飛ばす。

僅かに呻く声が聞こえても、ヌイは意に介さない。

もう、興味などないかのように足元に転がる男を見ようともしない。

「あとのことは、ご家老にお任せしたい。

ご家老の命令を無視した行動を取ったものがいたのだから

居合わせた私が捕まえただけのこと。

居合わせた妖が弱みを知っていただけのこと。

私は、この先のことに関わる気はない」

刃を下に向けているだけで、抜き身の薙刀を片手に

筑後家の当主である女は、平坦で、冷淡な言葉を寄越した。

「何処の立派な御家の方かも知らぬ世間知らずな女だが

これでも、筑後の当主を任されている。

不審な動きをされたら、ご家老の身に危険ありと
判断させていただき、その上で命をとってやるような
武家のものへの情けなどかけてやらん」

視線を送ることもしないで、意識を取り戻した男への警告だけを放つ。

無作法な動きをするし、不謹慎な態度でいても

ヌイは武家の心得を叩き込まれた少女だったのだ。

男が武器となるようなものも持たず、素人判断でやってきただけでも

これ以上の動きを起こせば骨くらいは折るつもりでいる。

それでも殺してやる気などない。

人を殺すことになど慣れている。

慣れているからこそ、斬る必要のない者を斬らないのだ。

「筑後殿でなければ、この男すら取り逃がしたであろう。

噂以上の腕を見せていただいた……」

どんな噂が流れているのかくらいは知っている。

だから、それが素直な誉め言葉でないことも理解していた。

「これ以上、此処に留まっても良いことはないと思える。

ご家老は、不届き者を成敗なさらねばならないだろうし

私は怪しいモノを成敗するために行きたい場所がある」

「行きたい場所？」

するりと近づく白い顔。

ぞっとするほどの笑みに気後れしている間に耳打ちされる。

「そ……それは！」

「殿には、私の独断で通してくれていい。

勝手にしたこと、知らぬことと言いつればいい」

ふ……と笑みが柔らかくなる。

その豹変した美しさに見惚れる。

「私は殺気を放つと、人に恐れられる。

殿さまが、女一人に恐れなど抱くはずは無いだろうが

ここは、念のためだと思っていただきたい」

噂は聞いていた。

筑後家当主の女は、化物を婿にするような恐ろしい女だと。

その一方で、化物に魅入られた美女だとも聞いていた。

噂は、噂でしかない。

目の前にいる女は、噂どおりの美女だし恐ろしい腕前を持つことも知らされた。

だが、そんな言葉で片付くものではない。

「全て、殿の身を案じての策と仰るのか」

「怪しいものの狙いは、間違いなく殿の身にあると思う。

相手は未練と執念の残骸だ。

ただの妄念なら、いっそ俗世の思いなど切ってやればいいのだ」

見ても居ないはずの怪しいものを、知っているかのような。

そんな思いを見抜いたのか、女は晒す。

「ウチの妖が、かかわった女のことなら知っている。

だから私が始末をつける。

代償の品は、水鏡の手にある……

すべて、外に漏れるとしたら先ほどの男のような連中からだ。

お気をつけられよ」

するりと立つ姿は、仕草の隅々までに隙が無い。

「勝手に行かせていただく……」

背を向けたままにかけられる言葉。

からりと障子を開けて出て行く。

止める言葉など思い浮かばなかった。

—勝手にしたこと、知らぬことと言い切ればいい—

家老の許可のもとなどと、あの女は言わぬと言っていた。

ならば知らぬ振りをしていればいい。

冷たい汗を拭きながら、保身を考えていることさえ気付いていなかった。

板張りの廊下を足音も立てずに歩く。

萌黄色の長着に青鈍色の袴姿。

城内を袋に入れているだけで、明らかに得物を解るような

長いものを持ち歩いているというのに

その姿を視界に入れても、誰もが見ぬ振りをした。

奥に進めば進むほどに、本来なら呼び止めるはずのものが
見えないように振る舞う。

ヌイの背には、当たり前のように水鏡が付いてきている。

常のように歩くのではなく、わざわざ宙に浮いたままの姿で

ふわふわと、いかにも妖しい者と解る動きだ。

「よほど、化物の相手に疲れているようだな……」

『困れば縋るものを』

あえて聞こえるように話してみても、誰も咎めない。

ヌイが着ているのは、筑後家の家紋入りの衣装だ。

この城の中でさえ、界限で一とまでいわれる古い武家なのだから

その家紋を見れば筑後の当主だと誰もがわかっていた。

—筑後の女当主は、化物を婿にしている……—

噂は、本当だったのかと思えば誰もが関わることを避けた……

「こうも、あっさり殿の寝所に辿り着かせていいのか？

死霊より私のほうが確実に殿を殺せるのに！」

ヌイが喚いても、誰も出てくる気配すらない。

馬鹿馬鹿しくなって、きっちりと纏めた髪を解く。

『相変わらず、無茶をする女だ』

殿様の寝所などという場所で、いきなり衣装を脱ぎ始めたのだから

普通は驚くところを、予想していたかのように水鏡は見ている。

「女の恠気というのは、相手の男を取り殺すことより

奪った女を狙うことが多いんだよ。

まずは、殿を安全にしなければならぬだろう？

それに殿だって、警護役とは思わないはずだ。

私が無作法の極みだと言われていても、殿の体面は保たねばならない」

鶴の織柄の白い長襦袢姿。

部屋の隅に脱いだ衣装は綺麗に畳まれて、目立たないように置かれる。

ただ、手許には袋に入れたままの獲物がある。

『私以外の男に、その肌を触れさせるといふのか？』

「水鏡……どうして、そういう話になるんだ。

だいたい、お前が半端に女の願いなど叶えたのが間違いだ」

本来の水鏡なら、己の領域を超えて動きはしない。

この件に水鏡の私欲が、最初から絡んでいることくらい知っている。

「寵愛が貰えぬと自信を失くしたところまでは納得する。

だがな、現れた化物すら抱く気も起こらぬ女などと卑下したと

私は、そう聞いた記憶がある。

つまり、その女は水鏡に抱かれたかったんだらう？」

『私は誑かしてなどいない』

そんなことは知り尽くしてる。

この妖は、女を誑かす気もなく誑かす。

「抱けば、私が愠気を焼くと水鏡なら思うだろうし寵愛を頂く方法を探すに決まっている。

人の心は移ろうものなんだ。

水鏡が策を練れば、人の身で逆らえるはずなど無い」

移ろいやすい心は、また移るのだ。

「愠気くらい焼かせておけばいいんだ。

どうせ、私のことだから刃物を振り回せば気が済む程度だ。

私と斬りあって、また私に勝てぬと思えば済むことじゃないか」

他人事のように言い切る様を、人でない男は眉根を寄せて見つめる。

「お前は人ではないのだから、抱いた女から代償を持っていく。

私欲で抱くのが、わたしだけならそれでいい。

気にしすぎなんだ」

『私が人ではないように、ヌイは人でしかない。

当たり前前に傷付き、それを認めることなどしない女だ。

わざわざ移ろいやすい人の心を、移ろいやすくするほどには

私はヌイを手放してもいいとは思えないのだ』

珍しく沈んだ声で告げてくる。

金の瞳が晒っていない。

「困った妖だな、水鏡。

お前を思いやれるほど、私は出来ていないんだ。

私は水鏡に甘えているし、寄りかかっている。

お前は、いつものように晒っていればいいんだ」

背筋を伸ばした姿勢で、まっすぐに告げてくる姿。

『思えばこそそのことであるのに、実に素っ気無い』

不満そうな言葉を置いて、妖は姿を消した。

常のように、どこかに気配を残してもいない。

「少々……甘えすぎたか……」

夕闇の色が移る障子を見ながら、少しばかりの後悔をする。

夜中になれば死霊は来るのだろうか。

過去を悔いることを嫌う女は、既に次の策を練っていた。

何も知らされないままに、その男は億劫な気持ちで寝所に入る。

すっかり怯える癖が付いていたものだから

見慣れない姿のものが先に寝所の隅に座っているのを見たときは

思わず声を上げそうになるくらいに驚いた。

「失礼致しております」

深々と頭を下げられて、それが女だと理解する。

見知らぬ顔だ。

行灯の灯りの中で見る白い顔……

ふ……と浮かぶ笑みは、妖艶である。

「さては、何処その者が好機とばかりに娘を寄越したか？

これだけの騒ぎ……一人寝するしかないからな」

「名乗り遅れました。

我が名、筑後ヌイと申します。

以後、お見知りおきを……」

姿勢正しく名乗られて、その凜とした視線の鋭さに気付く。

「筑後……何やら聞いた名だ」

落ち着かない気持ちになりながらも、長く嫌な夜を過ごしたせいで人肌が恋しくて仕方が無かった。

傍によって、女の顔を見つめる。

呆れるほど視線を逸らすことの無い瞳は、明らかに今までの女とは違う。

触れれば、その肌の暖かさに安堵する。

「私を死霊や、妖と思ったのなら詫びましょう」

何処か笑うような言葉に、誘われるように抱きしめた。

ただ一人でいることが恐ろしくて仕方が無かったのだ。

「この姿だ。据え膳にしか見えないことを承知のうえで申し上げる。

できれば、このまま動かずにいていただきたい」

いきなり口調が男のようになった女は、相変わらずに晒う。

傍で見れば、その美しさに呆気にとられる。

腕の中から見つめてくる瞳が、あまりに鋭いことが気がかりだ。

「藩主さま、あなたの安眠を奪うものがあるのでしょうか」

「知っていて来るとは、豪気な娘だ」

口付けようとすると、さりげなく顔が伏せられる。

「さすがに色事に及んでしまっは、私とて困るのだ」

髪の間から見上げてくる瞳。

白い顔に笑みが浮かぶ。

その般若の面のような笑みに戸惑う。

「失礼した……」

すぐに治まる殺気。

だが、先ほどの笑みは本物の殺気が籠っていた。

「何者だ？夜伽相手ではないということか？」

「名は名乗った」

囁くような声。

その声の艶に、男の本能が反応する。

力付くでもと思った瞬間には、動かす前に手の上に手が添えられた。

「どうか、動かずに……」

驚くような早業である。

優しく手は添えられたただけだが、動きを見切ったのは間違いない。

「ご無礼は重々承知のうえのこと」

無礼を働かれたと思うよりも、何が起きているのがわからなかった。

添えただけで抱き寄せたような姿のまま、下を向く女を見る。

ふと……不安を感じて、障子へと視線を移した。

「……う……うわああああっ」

突き飛ばしたはずの女が、宙を舞うのを見た。

床から拾う長い袋。

静かに障子の向こうに立つ姿が、炎のように揺れていた。

「お待ちしていた」

わざわざと障子を開けてやる。

瞬間に飛び掛るものを、女は長い得物で薙ぎ払う。

「お話をしたいだけだ。私の刃では斬れない」

斬れずとも、掴みかかろうとしたのを退かせたのだ。

障子の向こうから現れたものは、濡れた髪を引き摺りながら
悲しそうに見つめてきた。

「間違いでなければ、先の局さまであろう？

亡くなられた事さえ伏せられたままだが.....

何を思い遺されているのか教えていただけまいか」

—枕女的身で気安く声などかけてくるでないわ！—

死霊の恫喝は、吹きすさぶ風の音のようだった。

「そんな一言に囚われたままなのか.....」

悼むままに瞳が向けられる。

死霊などに同情しても仕方が無い。

「その言葉、寄越したのは誰なんだ？」

ついと向けられた視線の先で、腰を抜かしたような有様の男がいた。

「知らぬ！知らぬぞっ」

否定する様に怒りをむけようとするのを、薙刀がすいっと止めに入る。

「直接の言葉だったか？」

—信じ得られる者から聞き及び.....—

さすがに死霊とて言葉に詰まる。

「ならば、罨に嵌っただけかもしれない。

あなたが寵愛の代償に支払ったものは、寵愛の象徴だったはず。

それを失えば、心が揺れる。

揺れていることに気付かれたら、罨くらい仕掛けられる。

その命、捨てる前に如何して.....

どうして、もう一度水鏡を呼ばなかった！」

激しく振った薙刀は、実体を持たぬはずの死霊を裂く。

ゆらり.....と揺れて姿をとどめても

先ほどのような、おどろおどろしさが消えている。

—水.....鏡？—

「池の中から現れる妖物だ。

化物の癖に、やたらと見目が美しい男だ。覚えがないとは言わせない」

斬れぬ筈の相手に切っ先を向けて、白い腿が露わになるものも

気にせず薙刀が構えられている。

—一度で大きなものを失いました.....

あの方の力を借りれば、私は次に何を支払えばいいのか—

「だからって、死んでしまうくらいなら

命でもかけるつもりで呼べばよかったんだ」

くるりと掌の中で回転する薙刀の柄。

刃が下を向いている。

「あなたは、もう支払うものも無いから呼べばいい。

その未練.....このまま抱き続ける方が幸いなのか？」

ふるふると死霊が首を横に振る。

—けれど、この身は池に映りません……—

「あなたは、自分で未練を絶てないのだな？」

言葉の代わりに、悲しげな泣き声が聞こえてくる。

「殿、何か言ってやる言葉は無いのか……」

視線だけが向けられる。

死霊などと対等に話して、当たり前のように振る舞う。

「何を言えというのだ……」

この女が、身を投げた理由さえ理解できぬ。

又イ……といったな？

女、何故に平然としていられる……」

ときおり震えそうになる声を、虚勢で張り上げてくる。

それすら気にならぬようで女の視線は冷たい。

「あなたが代償を支払うべきだ。

己の周囲を見極められないような者に

上に立たれては、私のような半端者が迷惑する。

己の女の嘆きさえ耳を傾けられないのなら

女など抱かねばいいのだ。

お前などに、少しでも武家のものとしての遠慮をしたこと

悔やんでも仕方が無いから言い切らせてもらおう。

私の肌に触れた代償は大きいぞっ」

空気が裂ける。

殺気の籠った刃を受け止めようと間に入ったのは

実体など持たない死霊の女だった。

—あなたが……又イさま……—

涙が流れるのが見えていた。

—何度も聞かされた……—

受け止められるはずの無い刃を胸につきたてて女は泣いていた。

「悪いが、アレに惚れられても困るんだ。

縋るのは構わんがな……アレは、そういう妖なのだから」

まるで手ごたえがないままの切っ先を引き抜く。

「斬る訳が無いだろう……仮にも藩主様だぞ。

私は筑後家の当主を任されているのだ……」

武家の当主が、いくら怒りに任せても斬るはずなどない」

「ならば、何故に薙ぎ払った！」

崩れる死霊を無視して、男は立ち上がる。

「どうせ、死ぬからだ」

冷たい声。

白い顔に浮かんだ般若の面のような笑み。

そして……

その身体を抱くように背に立つ姿が唐突に現れる。

「……っひい！」

転げるように距離を取る男を、視線だけが追ってくる。

『気は済んだのか？』

聞こえる異質な声。

「私では至らぬことだらけだ。

情けが無いにも程がある。

結局は、水鏡に頼らねば何も出来やしないっ」

『死霊から未練を絶ちきってやったではないか』

ゆれていた影も消えていた。

死霊の姿は、既に見えない。

「この件、裏があるのだろうか？」

我が家に災難がかかるなら、かけようとする方々を

全て忌み者にしてしまえっ

代償なら支払う！」

恐ろしい言葉を、白い顔を上気させて女は言う。

『ヌイから代償など取るものか……』

異質な声は、優しげに聞こえた。

あやすように女を抱く姿は、確かに化物とは思えない美丈夫だ。

だが、見つめてきた金の瞳が恐ろしかった。

『我妻の肌に触れしこと、煉獄の中で悔やめばいい』

抜き身の薙刀を持った女を抱いた妖は

不吉な言葉を残して消えた……

気付いたときには、見慣れた屋敷の部屋の中で

ぼんやりとした意識の下で、何度も感じた快樂に気付く。

「水鏡……」

伸ばした腕が絡め取られる。

白い指に口付けられる。

僅かでも揺られれば、交わった身体が火照る。

『私を束の間でも不安にさせるなど……』

「すまなかった……」

謝罪の言葉を吐きながら、どうやって帰宅したのか記憶になかった。

気付けば見慣れた部屋の中で、何も身につけないままの身体を

抱かれなれた妖の腕が抱いていた。

白々と夜が明けてくる。

そろそろ朝餉の用意に二人の使用人が働き始めたことだろう。

いつもなら、この時間には朝稽古などをしているのだ。

それが、どうにも離れがたかった。

素肌を合わせたままで、その腕の中で目を閉じていても

何かを伝えなくてはいけないような気がしてならない。

「母さま……お帰りなの？」

障子の向こうから、幼子の声が聞こえる。

するりと、身体に衣装が掛けられた。

「水鏡？」

妖の水鏡は、我が子の前でも平気でヌイを抱く。

父と母なのだから、そういうものなのだと教えられた幼子は

他の子供ならありえないだろうに、素直に納得してしまっている。

ちづるは、水鏡の血を引いて、ヌイが育てた子供だ。

年の割りに物分りが良すぎる。

『城の後始末……つけてきてやる』

口付けられて、返事も出来ないままに姿は消えていた。

「父さま……いらっしゃるの？」

障子の向こうからの声が、さらにかかる。

昨夜のうちに帰らなかったことを、子供なりに心配しているのだろう。

「開けて構わぬぞ、水鏡は出かけたがな」

かけられた衣装にくるまりながら、声をかけてやる。

すぐに障子が開いて、見慣れた幼子がきっちりと座っていた。

「お疲れなのですか？」

「いや、眠っていないからそう見えるのだろう」

袖を通せば、置いてきたはずの家紋の入った色無地だ。

全く、水鏡の手はずの良さには叶わない。

「私は身支度をやるから、ちづるも顔を洗ってきなさい」

長着だけの姿で、幼子に言いつける。

常なら躊躇わぬ返事があるのに、何やら不安そうに見つめてくる。

「どうした……？」

傍によると、着ているものの袖をもてあそびはじめる。

「言わねば解らないだろう？」

髪を撫でると、その顔が見上げてくる。

「夜明け前に、綺麗な女の方がいらしたの」

この屋敷は、常から何処も施錠しない。

何処からでも入れるのに、誰も入ってこないと解っているから

ちづるを一人にさせているのだ。

「母さまの名を出されて、羨ましいと仰るの」

「それで？」

おおよその察しは付く。

どんなものが現れても、ちづるなら騒ぐはずがない。

何しろ、自分の父親は化物だと理解しているのだから。

「羨むのなら、近付けばいいと私は教えられているでしょう？」

だから、そうお答えしたの……」

困ったように、己の袖を掴んだまま視線を落とす。

ちづるには厳しくする気もなく、問われるままに答えているだけだ。

武術の欠片も教えないのに、この姿に懂れて

見よう見まねで棒を振り回していることくらいは知っている。

「もっと早くに……って仰って見えなくなられたわ」

寂しそうに声を落とす。

幼いなりに傷つけたと悔やんでいるのだろう。

「難儀な死霊だな……」

あの女が、本当に思いを寄せたのは誰だったのか。

ヌイの刃を受け止めたのは、藩主を守るためだったのか

それとも、ヌイの刃だったからなのか……

「ちづるの手に負える相手じゃないから、相手になんかなるな。

どうせ、どんな返事をしても泣くしか出来ない女なんだ」

泣きながら消えた女は、今でも泣いているのだろう。

「それでも、母さまなら……！」

「私なら、斬ることしか出来ないさ」

化物に続いて、死霊にまで棲みつかせる気などない。

斬れないものを、刃でどうにかできるとは思えなかったが

それでも思い出して、古い懐剣を箆笥の奥から取り出す。

「ちづる、これを身につけていなさい」

本来なら、まだ懐剣などを持つには早すぎる。

そんなこととは関係なく、ヌイはちづるの手に重い刃を乗せる。

「ちづる自身が辛くないなら、それを抜いて見せろ」

言われて、幼子は拙い手つきで袋を解く。

この幼子の身体に流れる血は、半分は人のものではない。

だから、あえて抜かせてみたのだ。

見慣れない刃を、幼子は見ている。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前……？」

読めるだけでも大したものなのだが意味が解らぬとばかりに首をかしげている。

「気休め程度だが、効く時は効くだろうから持っていなさい。

本来なら、女が自害するための刃。

往生際の悪いものが刻んだ九字だと教えられたがな……

私は、ちづるを案じて渡しておくんだ。わかるな？」

大人しく頷く幼子。

ちづるが持てるのなら、気休め程度だろう。

だいたいヌイ自身は懐剣などもったことがない。

懐には実母のヒ首を幼いときから持っていたし

武家の娘としての正装のおりでも、当たり前で薙刀を持っていた。

そのヒ首は、勝負に勝てないままで水鏡の手にある。

返すというのを、何度も断り続けている刃。

実母の実家の家紋が入った小さな刃は、千鶴のものなのだ。

今のヌイには、もう必要の無い物でしかない。

「母さまのような大きなものは、持てないから？」

「ただの守護刀だから身につけているだけでいい。

扱い方も知らないのに、抜いて振り回したりしないことだ」

素人の刃は性質が悪い。

「ならば教えてくださればいいのに」

拗ねたように口調が固い。

ちづるが武術を教えろと言い出すのは慣れている。

「こんなもの、ちづるが覚えたら

当たり前の女としての幸から遠ざかるだけだ」

常日頃のままでの格好に着替えると、髪を無造作に纏め上げる。

筒袖の長着に、馬乗り袴。

一尺ほどの棒切れを片手に幼子の傍に座り込む。

「どうせ、ちづるには水鏡の血が流れている。

あの重い剣を扱う技量を受け継いでいるなら

私などが教えられることなど何もないんだよ」

懐剣を元通りに袋に仕舞うと、幼子の懐にさしてやる。

それに手を添えながら、見上げてくる大きな瞳。

「母さまは、父さまを羨んでいるの？」

「そうだな……あの技量は羨ましい」

そのことだけは、誰にも隠さず言い切れる。

人ではないからなどとは思ったことはなかった。

扱えるものがあるなら、その高みを目指そうと追いかけた。

未だに追いかけた理由は、本当は恋慕だったのだと思切れない。

思切れなくても、水鏡に恋慕の感情を抱いていることは

認めているし、否定のしようが無いと自覚している。

「ならば、私も母さまを見習う！」

「だから、そういうことは止せと言っている。

私みたいになったら、嫁の貰い手がなくなる」

それでなくても化物の血を引いているのだ。

将来を思えば、武術など教える気にはなれなかった。

「母さまは、嫁の貰い手がなかったの？」

当たり前聞いたら可笑しい問いかけだった。

だが、ちづるは実の娘ではない。

ただ育ての親だというだけの、水鏡の血を引く娘だ。

「私のように偶々、人ではない男と連れ添うことなど
ちづるにまであるとは思えないから止めておきなさい」

朝餉の支度が出来たのだろう。

良い香りと、いずの忙しそうな足音が聞こえている。

「父さまのこと？」

「他にあるか」

幼子を片腕に抱き上げる。

その抱かれた顔が、すぐそばで悩んでいる。

「ちづる、父だ、母だと呼んでおきながら解ってなかったのか？」

「だって、母さまは婿じゃないって仰るから……」

無自覚なのだろうに、そういう風に言われると

本当に水鏡の娘なのだと、頭が痛くなってくる。

「以後、言わぬように気をつける」

聞かせるべきは、ちづるではないのだろう。

あんなにも離れがたかった理由が解って、己の疎さに腹立たしくなる。

城の後始末だというなら、そう容易くはないはずだ。

人の刃では傷つけることも出来ない水鏡の

帰りを案じたことなど、それが初めてのことだった。

移ろう

「解る、解らぬという話じゃないんだぞ、いず」
濡縁に並んで腰掛けながら、まるで童のように騒ぎ立てていた。
「亡くなられていた方は隣の国から嫁いできた方なんだ。
そんな方を自害させたとなったら、ウチの殿様は立場がないじゃないか。
おまけに自害に追い込んだ連中ときたら、堀に身を投げた
その方が現れると恐れて水を酷く嫌うのだそうだ。
そこまで嫌いで、恐れているなら、堀も、池も埋めておけばよかったんだ」
わざと大きな声で言い放って、周囲を見回す。
静かに風が小枝を揺らしているだけだ。
あおぎみれば、うっすらと曇った空を鳥が飛んでいく。
「あの妖は？」
「今日は見ておりませんが……」
城の裏事情は、化物が絡んだせいで民衆にまで知れ渡ってしまった。
あの化物は斬りかかれて、当たり前前に斬り返してきたというから呆れる。
斬られてなんでもないのだから放っておけばいいものを
怪しい動きをしながら見慣れない剣を振るってきたのだそうだ。
瓦版にまで書かれた化物は、姿こそ化物らしく描かれていたが
何故だか、その衣装に筑後家の家紋が入っている。
こんなものを撒かれたら大変だからと、本家に相談に来たのに
あの従姉妹は意に介さなかった。
「お殿様は、どうなるのでしょうか……」
「本来なら切腹というところを、
あの化物が水牢に閉じ込めてしまったらしい。
施錠された扉は、祈祷しても開かず……だとさ。
奥方を自害に追い込んだ連中も、同じく水牢の中。
まさに、天から落ちたも同然だ」
他の娘を嫁がせたくても、邪魔がいては仕方がない。
ただ……隣の国などから押し付けるように嫁がされた女に信用できる人物の少ないことが不幸の始まりだった。
「あの方は、あちらでは心を病んだ方と言われて
ここに嫁がされたんだってさ。
池を見ては、映る姿に語りかけるものだから……」
「水鏡さまと会った方だったのですね」
いずでさえ察することの出来ることだった。
確かに、あの化物は城に出てはいなかったのだ。
隣の国の城ならば、別の場所と理解して話す筈がない。
「自害させて、喪もあけたら輿入れさせる段取りが
ウチの当主が暴れて、すべて露見したわけだ」
「ヌイさまは、死霊に懐かれたと嘆いておられますが？」
今日も、あの従姉妹は護符などを買いに行くと言って出かけてしまった。
化物屋敷に護符を貼ってどうする気なのだろう。
「下手したら、ウチの家が潰されていただけのことを
あの当主さまはやってくれたんだよ。
何処まで知っていて暴れたんだか知らないけれど」
今回のことばかりは、流石に真之介も呆れ果てていた。

無茶をするとは知っていたが、ここまでとは思わなかったのだ。

「元をたどれば、全部あの化物が悪いんじゃないか。

解決した張本人みたいに、瓦版じゃあ書かれているけど！」

再び大きな声を出す。

ふと、傍に気配が立つ。

驚いて、身を引くと見慣れた姿があった。

「水鏡のことを、私に隠れて悪し様に言うとは見下げたな」

背負った得物に片手まで掛けている。

どうやら本気で怒らせてしまったようだ。

「いや……事実だろうか？」

怒らせ慣れているだけに、いきなり斬りかからないと知っている。

「事実の欠片に過ぎないさ。本当に水鏡が全ての根源で、此処まで騒がれたら

いくら世間体など気にしない私でも示しが付かないと思う」

いずの手から、瓦版を取り上げて目を落とす。

つくづく、仕草の隅まで美しいと見惚れていると鋭い視線が向けられた。

「新しい殿さま選びに、水鏡は関わっている。

次の藩主様は我が家を引き立てる方になるだろうから

真之介も早く身を固めてしまえ」

「どうして、化物が関わるんだよ！」

言葉を無視して、背を向けられる。

そのまま行ってしまうのかと思ったら、ふと振り返られた。

「水鏡は私の婿なんだから、筑後の当主代理だ。

あいにく、私は死霊に懐かれて城などに行けないからな」

あの件で従姉妹に死霊が取りついたのは聞かされている。

堀に身を投げた女は、言い残したことが多すぎて夜中になると、従姉妹を訪れるのだという。

「当主代理なら、俺でいいじゃないか……」

普段から近隣の親戚付き合いなどは全て真之介の仕事になっている。

こんな大事の時だけ、婿などと言い出されたら敵わない。

「真之介の代わりに水鏡に頼んでも構わないぞ。

親類どもが、アレを家に入れるというのなら

私は、水鏡の方が任せやすいくらいだ」

「入れるような家はないよ」

捨て鉢になって言葉を投げる。

『入れずとも、勝手に上がることならできるが？』

目の前に唐突に現れたものだから、見慣れているとはいっても

さすがに驚いて、声を上げそうになってしまった。

「帰ってきたのか、ご苦労だったな……」

その声が、従姉妹のものだと理解するまで数瞬の間があった。

あまりに優しい声色。あの幼子相手のときくらいしか聞いたことがない声。

その声に、目の前の化物が近付いていく。

相変わらずに結いもしない髪の間から衣装に紋が入っているのが見える。

—ウチの家紋じゃないか！—

あれでは瓦版の絵に嘘偽りはないことになってしまう。

だから従姉妹は意に介さなかったのか。

「嘘だろう？」

「何がだ……」

怪訝そうに従姉妹が見つめてくる。

それでも、やりきれなさが込み上げてきて仕方がなかった。

「どうして化物が、ウチの家紋つけているんだよ。

本家当主は、どこまで色惚けてしまったんだよっ」

「あいにく色惚けて婿を選べるほど、私は色香に機敏じゃない」

そんなことは知っている。

こと色事となると、幼子以上に疎いのだ。

「私に本家を継がせたのは真之介だし私は、とっくに水鏡と連れ添っている。

城に筑後のものとして行かせるなら家紋くらい入れたものを着せるのは当たり前じゃないか」

それは人としてなら当然だろうが、相手は化物だ。

不服を言おうとすると、横から袖を引かれた。

「ヌイさまは、あの衣装を仕立てるのに急げといって縫い子を脅されたくらいなんです。

なんでも反物だけがあったとかで……」

いずの耳打ちに、やりきれなさが涙になって溢れてきた。

反物で置いていたというなら、用意したのは千鶴の母だろう。

あの衣装贅沢な方なら、一人娘の婿装束まで気を回してもなんら不思議ではない。

ヌイは、かなぐり捨ててきた千鶴のものを化物に与えてしまったというのか……

「重ねて言っておくがな、気に入らないなら追い出せばいい。

私も、ちづるも流浪生活には慣れているんだ。

ただ今回の件で、水鏡を筑後家から切り離す方が難しいぞ。

化物騒ぎがあったら、筑後に声がかかる。

水鏡なしで、あんなものと張り合うのは私でも御免被る」

掌で顔を覆いながらも、平坦な従姉妹の声を聞いていた。

どうにかしようと思いつつも、策を練っていた。

その間に、従姉妹の方から畳み掛けてきたのだ。

「あとは任せたからな、いず」

何処か笑う様な声。

あの従姉妹は、決めた道を生き辛かろうが気にもしない。

色事に疎い従姉妹が惚れていると言い切ったときから、もう勝負は付いていたのかもしれない。

「せめて、普通の相手に惚れてくれよな……」

やっと出た愚痴を、聞いていたのは

同じように涙を浮かべたいずだけだった。

まだ一枚しか縫いあがっていないものだから、水鏡を着替えさせる。

妖の水鏡は、衣装を着替えるなど本来などしないものだ。

それを着せ替えさせるのは、ヌイなりに考えた結果である。

『良いのか？分家殿は、知らないままに悲しんでいるのだろう』

「己の知り得たことだけでは矛盾があると気付かぬなら

知らせるだけ無駄だと思うから黙っていた」

長襦袢姿で外を気にする妖の横で、ヌイは衣装を衣紋掛けに掛ける。

「あの奥方さまは、度々里帰りをされていた。

こちらでは寵愛をいただけないからと、寂しいだけでも

あちらにしてみれば、やはり病のせいかと思われる。

その度に、相手をしていたお前が悪い」

『だから、ヌイのいう事を大人しく聞いてやっているだろう』

長く人と接してきた水鏡だが、当たり前の人間のようにには出来ない。

水面に映る姿に声をかけてきたものの願いを叶えるだけなのだ。

相手が人間同士の中で、どういう立場なのかなどとは考えない。

一人が寂しいと言っては水面に声をかけ続けた女は、ずっと傍に居て欲しいと願う人ではない男に置き去りにされて愛して欲しいと願う相手を替える事にしたのだ。だから、水鏡は願いを叶えた。

女の傍に居られない理由も、尋ねられたから答えた。

ヌイが否定していようと、水鏡はヌイを娶った気で居たのだから傍に居て欲しいなどとヌイからさえ言われない言葉を叶えることは難しいと思ったのだ。私欲で人の願いを叶えるからだと、ヌイの機嫌を損ねた。

それでも、城の後始末に着て行けと衣装を用意してきたりする。

「化物相手だと思えば、まともな話でも耳を貸さないものは多い。

水鏡が妖であることは否定のしようはないけれど

筑後家の者だと名乗らせるくらいなら容易い」

容易いことではないだろうと何度言い聞かせてもヌイは言い出したら聞かない女なのだ。

今回は水鏡自身、私欲で叶えた結果を悔やんでいた。

だから、それを出されたら言い返す気も失せる。

あの夜にヌイが叫んだように、後々に厄介になりそうな相手はわざと刃を抜かせて、すぐに斬り捨てている。

そうしているうちに話も通るようになる。

体裁を保とうとするなら、化物に斬られたというより、筑後の当主代理に斬られたというほうが真実味が湧く。何しろ、女当主の腕が評判になっている。

その代理というなら、それなりの腕と誰もが思う。

元凶なのだからと、後始末を終えたつもりの妖に言い

次の藩主選びにまで関わらせられている。

水鏡は、ただ与えられた場所に居るだけだ。

それでも邪魔だと思えば斬ると知らせてしまったし

保身を図るものたちは、代償を払ってでも助言を求めてくる。

『あんな厄介ごとは、ヌイより私のほうが向いている』

「言われずとも解っているから行かないんだ。

私が大人しく聞いているはずがないだろう」

黙って下を向いていれば、人にしか見えない水鏡なら知らないものは人間だと思うだろう。

助言を求めて、そこで人ではないと気付いても遅いのだ。

妖の水鏡は、容赦なく代償を持っていく。

「それより、少しは話は進んだのか？」

本来なら水鏡を城になど行かせたくはない。

だが半端に関わっただけでは、権力の前に何を言い出されるか解らない。

あちらの方が上なのだから、仕方なしに常識外れを用意した。

水鏡の常識は、人には理解できない。

『進まぬ』

どうせ話を形だけ通そうとしたら、水鏡が邪魔なのだろう。

「あの保身だらけの家老は息災か？」

『あいかわらずの男だな……長きに巻かれるのが好きなようだ』

長いものに巻かれ続けていたら、ヌイを呼び出しはしなかった。

ひと月もの間、死霊をどうにも出来ずに立場の危うさを感じて

よく考えもしないままにヌイを呼び出したのが運のつきだった。

「母さま」

表の方から幼子が駆けてくる。

ふと、水鏡に気付いて慌てて姿勢を正した。

「おかえりなさい。父さま」

『私に気など使わなくて良い』

手招きされて、大人しく膝の上に座る。

「母さま、小次郎が御用は終わったって言っていたの」

「あまり効果も無さそうだな……その様子では」

小次郎には、買ってきたばかりの護符を貼らせていたのだ。

それを面白いからと見ていたのだから、ちづるにとっては効力も感じないものらしい。

水鏡にいたっては、そんなものでどうなるとも最初から考えていない。

『本当に追い払いたいなら斬ってやると言うのに』

「今は、我が家にさえ害がなければいいだけだ」

水鏡が閉じ込めた水牢の中の人々が見ているのは幻覚なのか、それとも本当に死霊なのか……

本物なのなら、気が済むまで現れればいいと思っている。

それでも、ちづるの前に現れたりしている以上は、この屋敷に来るなという意思表示くらいはしないとけない。

ちづるは気にしていないが、害があるなら困る。

ヌイは血の繋がりもない幼子を過保護にしすぎていると自覚している。

ただ、そうすることでしか安心できなかった日々が長すぎたのだ

夕暮れも近付くと、二人の使用人は台所で仕事をしている。

大屋敷に遠い牛小屋の近くで寝泊りしている小次郎にしたら最近までは滅多となかったことである。

「火が勿体無いですから……」

そんな言い訳をして妹の傍で藁を編んでいたりする。

「牛小屋には護符を貼ったのだろうか？」

「はい、ありがとうございます」

小次郎にとって、あの老いた牛は家族同然だ。

だから死霊が牛小屋などに近付くまいと思っても

余計に買ってきて与えておいたのだ。

「小次郎……まさか、死霊が怖いのか？」

「え……」

むしろ怖くないのかと言いたそうな顔である。

夕餉の後始末などをしている妹のいずにしても不安そうだ。

「お前たち、水鏡に慣れたくせに……」

「旦那さまとは違うでしょう？」

兄も妹も、二人の使用人は常識外れな屋敷で馴染んできた。

雇われた時から女主の傍に居た妖は居ることを知らされた上で雇われている。

だが、死霊などは未だに見たことさえないのだから

それがやってくるようになったと聞けば恐ろしいのは当然だった。

「まあ、違うといえば違うな」

仕方がないから、余っていた護符を二人に分けてやる。

「よろしいのですか？」

受け取りながらも、いずは不安そうだ。

「持っていて安心するなら何枚でも買ってきてやるし

何処そこの護符が欲しいなどがあれば、金を渡すから買いに行け。

障子紙かわりにしても構わない」

相変わらずの無茶な返事である。

この女主は、あちこちからの勝負を挑まれては稽古代だとか

なんだとかと理由をつけて金を渡されている。

二人の使用人には、手も届かないような額の護符を買ってきては紙くずのように扱うのだ。

「効き目があるなら、水鏡は無理でもちづるにくらいは

少しは効力を示すと思うのだがなあ……」

「死霊除けの札ですから、お二人は平気なのでは？」

いずは札に効力があると思っていたい。

水鏡には慣れたばかりだが、幼子のちづるなどは

半分は人でないと聞かされても信じられずに接しているのだ。

あの聞き分けの良い愛らしい少女が、そういうものとは思えない。

「とにかく気にしないことだ。

害があれば、水鏡が斬ると言っている」

既に寝巻き姿の主が台所などにやってきたから

何事かと思っていたら、どうやら二人を気遣ってのことらしい。

「いつまでも妹に構っていないで、少しは女でも探しに行け」

ついでのように小銭の入った袋を手渡されて、小次郎は戸惑う。

「私は自分のこととなると色事に疎いだけだからな」

確かに所帯を持ってもおかしくない年齢だし、ここの給金なら充分にやっていけると思うのだが……

小次郎は、女が欲しいわけではない。

ただ、寝巻き姿の主の色香にあてられていただけなのだ。

そんなことをいえば美しい顔が恐ろしい変貌をする。

だから何も言わずに、その背を見送ったのだった。

既に灯りを落としている部屋で、ちづるは眠っていた。

枕元には抜き身の懐剣。

これを持たせて以来、死霊はちづるの前に現れない。

ただ、効果があったからなのか、ヌイが居るかなのか、そのあたりは訊く気にもなれずに過ごしている。

障子一つ隔てて、己の布団のもとに行く。

ちづるを一人で寝させるようになったのは、成り行きだ。

もとから屋敷には部屋が余っているから障子一枚隔てた。

今日は、その障子にも穴を塞ぐように護符を貼ってある。

『ヌイは身内には甘い』

「少し前までは、己とちづるだけで精一杯だったのだが」

いつの間にか現れていた水鏡の晒うような声にも、あまり気にもならずそのまま布団に潜り込む。

夜目の利くヌイは灯りを落とすのが早い。

水鏡は人ではないのだから、もともと灯りなど必要ない。

月明かりさえ少ないから、部屋の中は深夜のように暗かった。

「己の技量など、まるで変わらないというのに、この家の名を借りて勝手気儘にしているだけだ」

『腕は上げたと思うがなあ……』

その言葉には少しばかり笑みが浮かぶ。

常識外れだの異常だのと言われる腕を持っていても、まったく歯が立たないのが水鏡の技量だ。

『ヌイほど人ではない私の何処に惹かれたのが』

解りやすい女も珍しい』

「解らないよりいいじゃないか」

色恋に疎いものだから、何処に惹かれたかと訊ねられても解らぬはずが

あまりに他に理由が無いものだから否定する気などない。

「私は水鏡が、人でしかない私の何処がいいのかさえ解らないままだ」

『まだ、そのようなことを……』

声が近づく。

耳に唇の触れるのを感じていた。

うつ伏せた視線の先には、灯りのない行灯がある。

その手前に転がっているのは、常に持ち歩いている硬い木の棒だ。

その棒が、コロリと転がる。

—何故なのですか……—

震える声は、聞きなれてしまった。

枕元に現れたのは思いを遺した死霊。

袖で顔を隠した女が涙声で尋ねてくる。

「また来たのか……」

どうやら、今日の護符も役立たなかったようだ。

—ヌイさまでなくてはならない理由……知りとうございます……—

日頃なら、水牢の中の藩主への恨み言などを聞かされるのに

今夜は矛先が違うようだ。

だが、その声が聞こえていないはずもないのに水鏡は相手をしない。

まるで居ないかのようにヌイに口付けて、身体に手を這わせていく。

「水鏡……？」

うつ伏せていた身体を抱き寄せられる。

唇を重ねられて、戸惑っていると腰紐が解かれている。

するりと落ちる片袖。

闇に現れる白い肌。

それに口付けられながら、水鏡の行動の理由を考える。

「……あ……」

身体が反応する。

初めて肌を重ねた夜から、水鏡は夜毎に抱いてくる。

身体は意志と関係なく覚えた快楽に反応する。

—水鏡さま！—

死霊の声が、すぐ傍で聞こえる。

『ヌイ、害であるかどうかはお前が決めたらしい

だが、私は先ほどから邪魔だと思っている』

「お前な……」

縋られたら叶えるのが水鏡の性質だ。

ただ、対価となる代償がなければいけない。

代償を失った死霊の声など聞く気もないということだろうか。

『この所、公にまで私を嬪などと呼んでくれて嬉しく思う。

なのに、ヌイは邪魔だとは思えないのか？』

「あまりに憐れで思いつかなかったのだが……確かに、いつまでも来られるのは困るな」

憐れだとは思う。聞いてやって、気がすむのなら構わない。

だが、この様子では水鏡への思いは断ち切れそうにない。

「だから、聞かせてやれ。私を選んだ理由くらいは……」

背に腕を回して耳元で囁く。

その声が、どうしても笑ってしまう。

すぐ近くで、女のすすり泣く声が聞こえていた。

『縋ってこないなら、抱き寄せるしかないだろう。

気性は荒いし、武道の才もあるが……心根の優しい娘が誰にも縋ろうとしない。

他には居ない、そういう稀有な女は知らない』

以前から何度か尋ねてみても、はっきりとした答えを言わなかったのに

今宵は如何したわけか、言い聞かせるように答えてくる。

その予想外の出来事に呆れていたら、抱きしめられた。

『幼子の頃から気になる娘だった。それでも人でしかない娘なのだからと諦めていたらちづるを生かすために私と取引などをした』

素の肌に触れてくる腕が、掌が暖かい。

『異形の娘のために命まで懸けてきた。

他には居ない。この腕に抱きたいと思ったのは、そのときからだ』

「早すぎるだろうっあのとき私は十三だったんだぞ！」

初めて聞かされる話が照れくさく、大きな声を出してみる。

—十三……—

揺れる声に、まだいたのかと視線を向ける。

うなだれる姿は見慣れたものだ。

—この身を奉げても良いと言っても私を要らないと仰った—

『この色恋に疎い女を、ようやく色付かせたばかりで

他の女になど会いに行くのも面倒だったのだ』

やっと死霊にかけてやった言葉。

ふと気付いて、ヌイは死霊を見つめる。

涙の後が消えないその顔を見つめて視線を逸らさない。

「水鏡が現れたり話を聞くのを優しさだとか、そういう類のものだと思っていたのなら、それは勘違いも甚だしいぞ？そういう性質の妖なんだ。

優しさでも、親切心でもない……そういうものなんだ」

『それでは、まるで私が優しくなどないように聞こえる』

髪に頬擦りまでされても、ヌイは死霊から目を離さない。

「水鏡が優しいのは私欲のためだけだ。

ようするに、私の機嫌を損ねないようにするだけだ。

こんなものと連れ合うには、お前は他人に頼りすぎる。

足があるうちに、しっかりと立たないから立てなくなるんだ。

己の死に様くらい、もう少し綺麗に見せてはどうか」

—私は……そういう女なのです……—

「ならば惚れた男の手にかかって消えろ」

揺らめく死霊の姿。

抱いていた腕が消えたと思ったときには、あの重い剣を振り切る水鏡の背が見えていた。

『だから斬ってやると、言うておったのに』

「いいじゃないか、おかげで良い話が聞けた」

笑うには、あの女が憐れに思えて堪える。

人ではない男は、少し目を離しただけでもどのように肌が触れていた。

「邪魔だと思ったら、いつでも斬ってくれ」

『まだ何かあるのか？』

腕に抱かれながら、目を閉じる。

己の死に様など、覚悟だけではどうにもならないときがある。

「私のことだよ。水鏡……」

『馬鹿なことを』

あやすように髪を撫でられながら、久しぶりに寝入ってしまった。

都からは少しばかり離れた小さな藩に妖が住まう武家があるという。

藩主は、その妖を当主代理と呼ぶ。

人ではないと知られながら、人の世に関わっている。

金の目をした妖は、そういう風にしてしまわなければ婿だと呼ばなかった女の傍にただいるだけだ。

今日も朝早くから、二人の刃を交わす音が鳴り響く。

『肌を重ねていたはずが、どうしてこうなるのだ……』

「子が出来たからな。

動けるうちに腕を上げさせてもらおう！」

回転した長い得物を突き出すと確かな手ごたえがある。

肩に刃を突き刺したままで、人ではない男は晒っていた。

「水鏡、お前のことだから気付いていると思っていたのだがな」

『知ろうと思わなければ気付きもしないのが、私だ』

刃を抜くと、流れ出るはずの血が僅かに衣装に滲む程度で止まる。

本来、人が持つ刃などではどうにもできないのが水鏡だ。

「ならば教えてくれ。どんな異形の子が生まれる？」

『同じ願うならば、異形でないことを願えばいいだろう』

そんな言葉にも又伊の白い顔は柔らかな笑みを浮かべる。

「願うわけが無いだろう。どのような姿でもいい。私の子だ。

この命を懸けてでも守って見せるさ」

『それでなくても短い人の命を、そう簡単にかけてくれるな。

私の子だからこそ異形なのだから、私にも役目を与えろ』

抱き寄せられて、クスリと笑う。

「また当主代理として、上からの仕事を任せると思うし

ちづるの相手だって頼まなくてはならない。

池に沈む暇など与えてやらぬからな……私の傍に居ろ」

『心得た……』

数百と生きてきて、やっと手に入れた女は人としてしか生きられない。

この腕に抱いた身体は、あと百年も持たずに崩れると互いに知りながら寄り添い、肌を重ねてきたのだ。

妖の子を宿したと女は笑って告げてきた。

この女は、何処までも人としての常の道を歩かない。

常識外れといわれても、この女は揺るがない。

それを知るからこそ、抱いた腕を離せなくなる。

『自愛しろ……又伊は無茶をし過ぎる』

「性分だからな」

人ではない男に人としての常識を忠告されて又伊は笑うしかなかった。

「ちづるとは違うからな。次の子は跡取りとして育てる。

親類縁者にも認めさせる。もう……髪が赤い程度で、殺そうとするものなど居ない」

人の命は短い。

かつて、紅い髪の赤子を殺そうとした人々は死に絶えた。

髪が紅いままでも生きられるのだと又伊は生きて見せた。

それを辛いと思わないのが、この女の性分だろう。

妖に惹かれた想いは真っ直ぐに生き様となっている。

親類縁者へと告げねばならない従兄弟の泣き言になど

又伊は笑うだけで構ってもやらずに済ませてしまった。

過去を見ても何も変わりはないのだ。

『千鶴』への思いを断ち切れない真之介の恋心は、どうしようもないのだということだけを知らされた。

—いつまでも、いつまでも、この平穏が続けばいい—

数百という年月を生きてきた人でない男は

恋した人でしかない女を腕に抱きながら、流れる時の速さを思っていた。